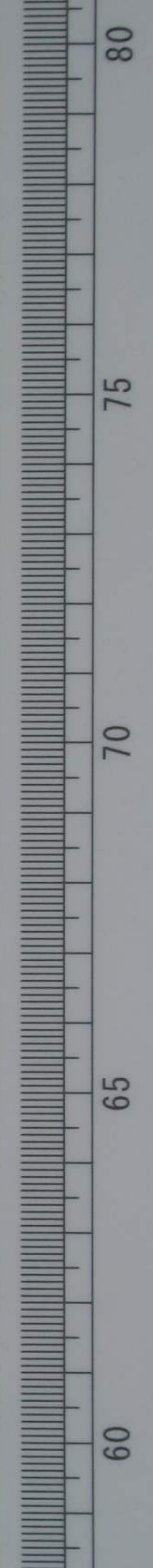
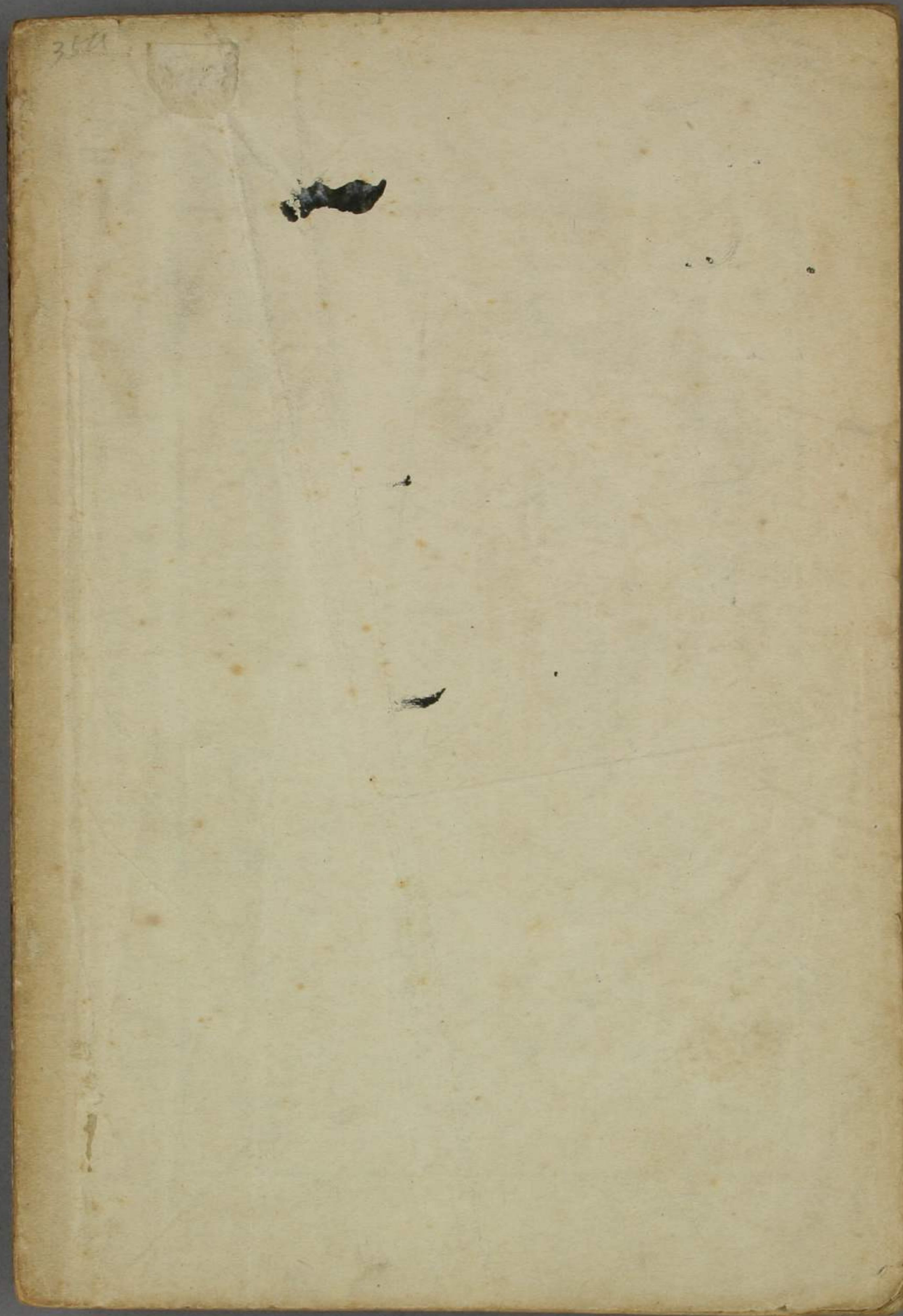


新體詩研究
明治詩集姉妹篇



新體詩研究

吉野臥城著



- (1) 體別內容
- (2) 體類
- (3) 目錄
- (4) 卷目
- (5) 備考

大正五年盛夏八月廿日於千代書局

購

〰

〰

〰

新體詩研究



Vertical red ink markings, possibly bleed-through or faint stamps, located on the right page. The markings are faint and difficult to read.

凡例

○本書は、『明治詩集』（明治四十一年一月刊）の姉妹篇で、同集の餘材と新舊二稿を合して出來上つたのである。無論初學者の爲に書いたのではあるが、一般の愛詩家の參考にもならうと思ふ。

○篇を「詩國小觀」「詩集解題」「讀作詩眼」「分類詩例」「餘材」の五つに分けた。「詩國小觀」は詩史の資料を網羅し、「讀作詩眼」は讀詩及び作詩に關したる事項をあげ、「餘材」は舊稿數篇及び最近詩論一篇、寫生文二種を載せた。

○「詩集解題」は詩集を出版年月順に序列し、著者・出版・性質・目次・備考の五項に分けて叙説し、詩集によつては或項目を省いたものもある。著者の小傳は『明治詩集』に附したいと云つた書肆の註文を無にした代り、茲に擧げたのである。本篇は『明治詩集』所載の「新體詩年表」と相待ちて、裨益があらうと信ずる。

○「分類詩例」に載せた詩の多くは、『明治詩集』の爲に寄せられたもので、頁の都合で割愛したものを茲に活かして用ゐたのであるが、「嵐來る前」「茴香酒」を始め其他四五の作及び自作の如き、詩例に當て備める爲る特に選んだものもある。自作は自ら許して模範にす可しと爲すのでは無い。

○詩の分類は或は内容より、或は形式より、便宜に従つて試みたので、つまり通俗を主としたのである。十四行詩で抒情詩に入る可きものも有れば、象徴詩で又これに入る可きものも有らう。

○本書は明治四十一年二月既に脱稿し、同四月發刊の豫定であつたが、書肆の都合で遷延した。で、今回出版に際して、多少の増補修正を加へた。

著者識す

目次

詩國小觀

諸雜誌と新體詩

- ▲雜誌より見たる新體詩發達史——『國民の友』——半月の小品——美妙齋と『伊良郡女』——鷗外等の譯詩——梅花道人の長篇詩——二十五年の詩界……六
- ▲『文學界』生る——悲曲「琵琶法師」其他——擬古派詩人の失敗……一二
- ▲『帝國文學』と『早稻田文學』——藤村の抒情詩——晚翠の處女作……一四
- ▲『新著月刊』と泣菫の諸作——詩界の氣運……一五 ▲『東京獨立雜誌』と其詩人——藤村泣菫晚翠の詩風——三十二年の詩界……一七 ▲『小天地』——『明星』月刊詩集の發行——有明の詩——三十五年の詩界……二〇 ▲『新小説』新體詩の懸賞募集——鐵幹白星林外合作の叙事詩——臥城の劇詩——『白

百合』生る——泡鳴の「鳴門姫」——叙事詩の勃興——雜誌續々出づ……………二二三
 ▲『中央公論』——詩界未曾有の盛觀——詩界の研究問題……………二二五▲『早稻田文學』の復興——樂と詩との調和——劇的叙事詩現はる——腰辨當の市井詩……………二二七▲『太陽』と諸家の新作——新體詩を掲載する諸雜誌——民謠詩試みる——詩人の彷徨時代……………二二九

詩集裝釘の變遷

▲薄ッぺらな青表紙——『新體梅花詩集』と『青年唱歌集』——『花紅葉』の裝釘——可憐なる冊子——『若菜集』は不折の意匠——意匠に就て研究するの風……………二三三▲『暮笛集』の裝釘——菊半截版四六版菊版の優劣——長方形本の流行——『紫』及び『毒草』の裝釘……………三五▲詩集裝釘の一進歩——クロース本製の詩集——詩集の定價——詩集の美裝と出版界——裝釘と畫家……………三八
 詩壇の回想……………三九

詩集解題

詩集の著者・小傳・出版・目次・備考

▲新體詩抄……………五三 ▲新體梅花詩集……………五六 ▲青年唱歌集……………五七 ▲花紅葉……………六〇 ▲天地玄黃……………六二 ▲抒情詩……………六三 ▲若菜集……………六六 ▲一葉舟……………六八 ▲夏草……………六九 ▲天地有情……………七〇 ▲風月萬象……………七一 ▲暮笛集……………七三 ▲夜濤集……………七五 ▲無絃弓……………七七 ▲曉鐘……………七八 ▲小百合集……………七九 ▲露じも……………八〇 ▲落梅集……………八二 ▲ゆく春……………八三 ▲ハイネの詩……………八五 ▲草わかば……………八七 ▲野茨集……………八八 ▲うもれ木……………八九 ▲半月集……………九〇 ▲透谷全集……………九一 ▲日本國歌……………九三 ▲春雪集……………九四 ▲獨絃哀歌……………九五 ▲花外詩集……………九七 ▲毒草……………九八 ▲藤村詩集……………九九 ▲夕潮……………九九 ▲夏花少女……………一〇〇

- ▲二十五絃……………一〇二▲白玉姫……………一〇四▲塔影……………一〇四▲悲戀悲歌……………一〇五▲鐵幹子……………一〇六▲春鳥集……………一〇七▲小野のわかれ……………一〇八▲海潮音……………一一一▲ゆく雲……………一一三▲白羊宮……………一一四▲東海遊子吟……………一一六▲花妻……………一一八▲寐覺草……………一一八▲あやめ草……………一二九▲泡鳴詩集……………一二二▲豊旗雲……………一二三▲天風魔帆……………一二三▲うた日記……………一二四▲有明集……………一二六▲明治詩集……………一二七

讀詩眼

- 讀詩の心得……………一二九
- ▲詩を味ふ力……………一二九▲詩の解釋……………一三〇▲熟讀玩味……………一三八
- 讀詩餘錄……………一四〇

分類詩例

- ▲「あゝあゝ」の系統……………一四〇▲詩に現れたる笑聲……………一四六▲題のつけ方……………一五二
- 作詩の經驗……………一五七
- ▲感興……………一五七▲推敲……………一五八▲長篇詩の苦心……………一五八▲逍遙と詩……………一六〇▲好奇心と詩……………一六一▲目に訴へる詩……………一六二▲詩題……………一六二▲取材の範圍……………一六三▲觀察……………一六三▲作詩の覺悟……………一六四

- 叙 事 詩……………一六五
- ▲牧羊神(上田敏)……………一六五▲不識庵(高安月郊)……………一八四
- 劇 詩……………一九三

▲佐波遲媛(吉野臥城)……………一九三

散文詩……………二〇三

▲山林に自由存す(國木田獨歩)……………二〇三 ▲甘藷畑(吉野臥城)……………二〇五

叙景詩……………二一七

▲朝顔(吉野臥城)……………二一七 ▲嵐來る前(平木白星)……………二一八

抒情詩……………二二一

▲蝶のゆくへ(北村透谷)……………二二一 ▲おえふ(嶋崎藤村)……………二二二 ▲フロ
ーレンス遠望(土井晚翠)……………二二七 ▲金翅鳥王の歌(前田林外)……………二三〇

▲『ミロ』の『エーナス』(土井晚翠)……………二三七 ▲枯薔薇(薄田泣菫)……………二五〇

▲葉卷のくゆり香(岩野泡鳴)……………二五一 ▲不安(河井醉茗)……………二五五 ▲感
興(兒玉花外)……………二五八 ▲茴香酒(與謝野寛)……………二六〇

象徴詩……………二六一

▲みなといり(蒲原有明)……………二六一 ▲書のおもひ(蒲原有明)……………二六三

十四行詩……………二六六

▲泉(薄田泣菫)……………二六七 ▲戀塚(前田林外)……………二六九 ▲苦悶の鎖(岩野
泡鳴)……………二六九 ▲いたくなせめそ(小山内薫)……………二七〇

律詩……………二七三

▲秋夜(土井晚翠)……………二七三 ▲さらば別れん(吉野臥城)……………二七四

民謡詩……………二七五

▲税吏(前田林外)……………二七五 ▲茶摘唄(吉野臥城)……………二八〇 ▲木曾少女
(蒲原有明)……………二八一 ▲扇(吉野臥城)……………二八四

譯詩……………二八七

▲燕の歌(上田敏)……………二八七

諷刺詩……………二九一

▲猿芝居(吉野臥城)……………二九一
印 象 詩……………二九五

▲海雲(平木白星)……………二九五 ▲明滅(吉野臥城)……………二九六

餘 材

新體詩假名違例……………二九九
明治三十七年の詩界……………三〇六
『東海遊子吟』と『あけほの』……………三一八
詩壇の烽火……………三三一
晚 餐……………三四二
鬪 球 盤……………三五一

詩國小觀

諸雜誌と新體詩

(雜誌より見たる新體詩發達史)

在來の諸雜誌に載つた新體詩を擧げたのみでも、新體詩の發達の跡は分る。今、自分の記憶を辿つて、雜誌の方面から其の跡を辿つて見やうと思ふ。

『國民の友』

の創めて刊行されたのは、明治二十年二月十五日であつた。この雜誌は政論雜誌であつたが、文學趣味にも富んで居た。湯淺半月(吉郎)が時々小品を掲げて、清
新な思想の一味を讀者に分つて居たが、世の人は變體な長歌もあるものぢや位に
思つて居たに過ぎなかつた。丁度その年であつたらう山田美妙齋が小説を試みて
居る傍、婦人雜誌『伊良都女』を發刊した。夫れには美妙齋の詩が載つて居る。
在來の歌謠に用ゐられた七五調、五七調の外に、八六調、五五調、五七五調や、

詩 國 小 觀

詩 國 小 觀

言文一致の創始者であつただけに夙に口語體をもやつて居た。半月の詩に較べると、將軍の駿馬に跨つて鐵鞭を揮ふの慨があつた。今、自ら言文一致と銘を打つて出した「春の曙」の第二節を示さう。

そよ 吹ぐ 風 も 肌 さむく
つゝみて こめる 朝ざりに

緞子張り窓は 消えまよふ。

いま やゝ 芽ぐむ 箏たけのこの

織い 手さき で 温めて

しのび音ねに 吹く 笙しょうさへも

かすむ 垣根 の ちござくら、

ほのめく 影 の あいらしさ。

二十一年になると『東洋學藝雜誌』に、落合直文の「孝女白菊の歌」が現れた。

稀に見る長篇の叙事詩で、七五調であつた。

阿蘇の山里秋更けて、

ながめさびしき夕まぐれ、

いづこの寺の鐘ならむ

諸行無常と告げ渡る。

折しもひとり門に出で、

父を待つなる少女あり。

年は十四の春淺く、

色香ふくめるそのさまは

梅か櫻かわかねども、

末たのもしく見えにけり。

這麼風こんなに雅馴な調で、豊麗な詞で詠み出でられたのであつた爲に、非常に愛誦さ

詩 國 小 觀

れた。その後五六年の間は諸種の雜誌に轉載されて、獨り寵を擅にして居たのであつた。

二十二年以後は『國民の友』が嶄然頭角を現して來て、詩界にも非常な勢力を振ふやうになつた。森鷗外等SSSの連中の譯詩「於母影」が此の雜誌に出で、世の耳目を聳動した。これは重に明の高青邱、獨のギョオテ、シエツフェル、ハイネ、ホフマン、レナウ、英のバイロン等の詩を譯載したもので、押韻詩もあれば八七調もあつた。二十三年に入つては詩界頓に色めき、譯詩も創作も共に盛んになり、矢崎北邨散士（嵯峨の屋主人）宮崎湖處子、中西梅花道人等が輩出し、美妙齋も亦「沈醉香」を始め數篇の創作及び譯詩を同誌に公にした。其の翌年には梅花道人の長篇詩「九十九の姫」が出た。

息きれぬ、歩むに腰のほね痛し、

杖もがな、ア、杖もがな、

詩 國 小 觀

竹にもあれ、木にもあれ、

手頃の棒のほしきことよ、

こゝらの里に小供は居ぬか、

居らぬと見える、

居らば遊ぶに良き場所なるに、

遊ばゝ小供のつねとして、

棒ちざり、履わらじ、

取りちらしあるは必定、

ア、棒もがな、杖ほしや、

詩 國 小 觀

これは其の冒頭の數節である。殆ど口語詩と云つても可い程に詞がぐだけて居て、美妙齋の「春の曙」よりは負かに言文一致的である。巧拙は暫く措くとしよう。二十五年に入つては詩界は更に一段の光彩を添へ、潑瀾たる活氣を帯び來つた。

詩 國 小 觀

『女學雜誌』には磯貝雲峰の物語詩「知盛」顯れ、『日本評論』には戸川殘花の「朝の歌」「夕の歌」出で、硯友社の『文庫』にも諸家の詩が載り、半月は再び起つて詩筆を執り、大西操山は新に出でて作詩を發表したる目ざましさ。初期の新詩界は、昇る日の花やかなるにも譬へつべきであつた。

『文學界』

が、『女學雜誌』の白表號から生れたのは、明治二十六年の一月末であつた。その發行緒言の一節に、「……曩に發兌の雜誌を分ちて白表赤表の二卷とし一は益政治社會時文と關係を厚うし一は愈實際の域に進みて家庭に友たらんことを期せり而して今や文界の友に向つては此の「文學界」なる冊子を發し社員社友の斯道に志ある者相集ひて互に其得たる所思ふ所を述べ我好讀者と共に幽情得て云ふべからざる文界に逍遙遊し併せて志篤く便り少き人の爲に好修養場となり指導者となり……」とあつて、體裁も女流文學の機關であるかの如く見えたが、追々と詩界に

對して花々しい活動を試みて來た。古藤庵無聲（嶋崎藤村）の悲曲「琵琶法師」「茶のけむり」「朱門のうれひ」が相踵いで出で、中にも「朱門のうれひ」は佳作であつた。三篇とも口語體で、五七五調であつた。先づ其の一節を抽いて見れば、

秋風へ白河へゆくみちすがら、

宗匠が茶堂の許へ寄りしとき、

扇面にのこす一句や枇杷の花、

名月のかげにあれあの桐を見て、

茶堂めは果報な叔父と言はれしが、

その聲も幽かに残るけふもけふ、

いかなれば異見の聲も枯れはて、

かゝるかなしき目をば見るらん。

と云つたやうな調子で。短い會話になると、

詩 國 小 觀

詩 國 小 觀

諸雜誌と新體詩

大宮 面々はもはやこれにて揃ひしか。

藤井 見えざる人は。

赤星 朱門どの。

〔朱門入場〕

朱門 これはく、

大に遅刻いたしてござる。

なぞとあるが、大體から五七五調と見て差支はあるまいと思ふ。美妙齋の口語體乃至は梅花道人の雅俗折衷躰と云へ、これと言へ、後の民謡詩を試みる人の參考とすべきであらう。

『文學界』は、更に戸川殘花の「桂川」(情死を弔ふ歌)を掲げた。透谷が同誌上で「桂川(弔歌)を評して情死に及ぶ」と云ふ一篇を公にし、俗嘲を顧みずして新しい題目を歌つたこと、味ふべき妙句の多いことを説き、明治韻文の佳品ちやと云つ

た。

川ぞひ柳さらくし、

髪ふりみだす姿にて、

白きは何ぞ、夏草の

しげみのうちに見ゆるなり。

こゝは處も桂川、

造化の筆はいまもなほ、

悲惨の景色うつしいで、

我はた冥府の人なりき。

昨日も今日も五月雨に、

詩 國 小 觀

諸雜誌と新體詩

詩 小 國 觀

ふりくらしたる頃なれど、
 ひそかに月の影もれて
 死出の田長のおとづる、
 雲井はるかに見あぐれば、
 喪服てふ空のさみしきに、
 三ツ四ツおちし村雨は、
 つゝみかねたる誰が涙かな。

これは上篇の結末の三聯である。但し圈點は原作の儘だ。「白きは何ぞ、夏草の」の一句の如きは、中々氣の利いた句法である。同誌は、以上あげた外に、北村透谷の「眠れる蝶」、馬場孤蝶の「酒匂川」を載せて、兎に角「文學界」派なるもの、旗幟を樹て、「國民の友」に下らざるの勢を示した。又、「三潁」は透谷の「蝶のゆくへ」を載せ、其他「文學界」の人々の作を掲げたので、宛ら「文學界」の別働

隊の如き觀があつた。

『國民の友』には湯淺半月の「天地初發」が出で、大西操山の「少女と胡蝶」が現れ、何れも當年の佳作として推獎された。其他『評論』『六合雜誌』『學の友』なども、多少詩が見えたやうに記憶する。二十七年には日清戦役があつたので、世は軍事詩や軍歌を歓迎するの傾向が見えて來たので、諸雜誌も多く其種の作を採録した。『少年園』『少年文庫』『日本之少年』などには、鹽井雨江、太田玉茗、河井醉茗、一柳芳風など頭角を顯し、『女學雜誌』には岩野泡鳴の名が見えて來たが、まだ世の注目する所とはならなかつた。

確か『國文』と云ふ雜誌だと記憶するが、この雜誌は中村秋香、大和田建樹、佐々木信綱などと云ふ擬古派の作家を出した。この派の作は大抵長歌躰によつたので、詞章は雅醇であり、流暢ではあつたが、詩想が貧少で、格調が陳腐で、逆も『文學界』や『國民の友』の諸作とは同日に談することが出來ぬ。で、是等の擬古派

詩 小 國 觀

詩人は戦争を幸に、軍歌や唱歌を作る事を以て能事とするに至つた。

『帝國文學』

は、二十八年の一月に多大の抱負を以て、多望なる新文壇に生れ出でた。その新文壇の一角には『早稻田文學』があり、從來の講義録體の舊套を脱して巨大な歩を進め『文學界』は前年北村透谷を喪つたけれども、猶手足を詩界に伸すに足り、青年文藝雜誌の『青年文』や『文庫』やが崛起し、戦勝國の文藝は鬱然として勃興して來たのである。

『帝國文學』には鹽井雨江の「深山の美人」は出で、繊細に失し彫琢に過ぎたるの弊はあつたが、優麗典雅の調は當時の愛詩家の胸を躍らしめた。夫れより續々その作を公にしたが、弊の益甚しくなるのみで、餘りに振はなかつた。「深山の美人」の人を恍惚とさせて居るうちに、「雨江と殆ど雁行して出でたのは武鳥羽衣である。先づ叙事詩「墨染櫻」を出し、次で「小夜砧」を出して、在來の擬古派の錦で馬糞を包

むとは異り、思想の清新に加ふるに詞章の精練であつた爲に世の注目する所となつた。後には朦朧體とか何とか云ふ批難も見えたやうであつたが、當時の詩界に在つては傑出したもの一つであつた。この二詩人と前後して上田萬年、大町桂月、杉鳥山等が現れ、又老將外山正一は再び起つて、大膽にも朗讀體と稱する散文詩「旅順口の英雄可兒大尉」「輸卒」忘るゝな此日を」などを公にして、當年の武者振を偲ばしめた。

開闢以來未嘗て今日の如く我邦の名譽の高大なるはなし。

良運なり。幸福なり。此の時期に遭遇せるの日本人は。

之は「旅順口の英雄可兒大尉」の冒頭二行であるが、總て這麼調でやつたのであるから、非難の聲が頗る高かつたやうに思ふ。『早稻田文學』には三木天遊、繁野天來等が出でて、『帝國文學』に拮抗したが何となく場遅れの觀があつた。

二十九年より三十年にかけて、詩界は愈清新の氣が盈ち渡り、大和田建樹、佐々

詩 國 小 觀

木信綱等の新體詩を顧みるものがなく、興謝野鐵幹の作などが却て目をつけられるやうになつた。この氣運に乗じて、井上巽軒が再び起ち、老後の思出一花咲かせんと、神話詩「比沼山の歌」を『帝國文學』に掲げ、又この年生れたばかりの『太陽』にも同時に同作を載せたが、完結しないで止めになつた。かゝる時に當つて勇を鼓して進んで來たのは『文學界』で、島崎藤村は二十八年に『與作が馬』外數篇を出し、その翌年には「一葉舟」「秋の夢」「哀歌」「二つの聲」「雞」、三十年には「天馬」などを出して、抒情詩に一新聲を齎した。これには流石の『帝國文學』も避易した形で、渠の「深林の逍遙」を同誌に採録するに至つた。勿論『帝國文學』には萬年、雨江、羽衣、桂月等も頻りに其の作を公にし、二十九年の末には土井晚翠の「紅葉青山水急流」「枯柳」、翠年には「造化妙工」「希望」なども出でたが、同誌新興當時の生彩はなかつた。

新體詩専門雜誌『大和琴』は二十九年に生れ、美妙齋の作が又現れ初め、三十年には渠の掉尾の佳作「魔界の天女」を載せた。

『新著月刊』

は、この年新に生れた小説雜誌ではあつたが、天來が關係して居つただけに詩界にも野心があり、桂月の「今日を限りの命」、天來の「雨聲鳥語録」、藤村の「四つの袖」などを掲げ、薄田泣菫の「花密藏難見」を載せた。之を手初めとして泣菫は續々その作をこの誌上に於て公にし、在來の調以外に八六調等を試み、清婉の調、蒼涼の趣を以て斯界に鳴つたのである。

其他『文學界』や『國民の友』には、半月、湖處子、嗟峨の屋、孤蝶を始め、松岡國男、田山花袋、國木田獨歩等が據り、『日本人』には竹の里人（正岡子規）が俳想の長詩や押韻詩を試み、『有名』もしは草紙『佳友會雜誌』など早稻田を中心とした文藝雜誌や、『裏錦』などにも盛んに詩が掲げられ、詩界の氣運は希望を孕んで進む白帆のやうであつた。

詩 國 小 觀

『東京獨立雜誌』

は、三十年に内村鑑三によつて生れ、平木白星、兒玉花外、吉野臥城等の詩人を包擁して思想界の一角に據つた。彼の戀愛に泣く詩人の仕に比ぶれば措辭粗笨の嫌はあつたが、熱烈火を吐くやうな革命的男子の詩であつた。お嬢さんの涙ではなくして、鬱勃たる平民の聲であつた。この雜誌の歡迎された如く、是等の詩も一般の人に愛誦された。杉谷代水、蒲原有明、高橋山風等の作も時々見えた。『帝國文學』は最う晩翠の活舞臺で、「萬有と詩人」「星落秋風五丈原」「暮鐘」などが現れ、『反省雜誌』には渠の「馬前の夢」が出で、詩名一時に高くなつた。すべて七五調であつたが、用語は和漢を折衷して明晰爽亮であり、而も想は清新で冥想思索の風趣を帯びて居た。同じ七五調でも擬古派の夫れとは異つて、藤村のは藤村の特色があり、泣菫のは泣菫の特色があり、晩翠には晩翠の特色があつた。之から格調に對する韻律の研究は歩を進めて來たやうに思はれる。『帝國文學』には晩翠の外に、

吉田、荻、州の作が見え、『國學院雜誌』には栗嶋、狹、衣、『天地人』には桑田、春、風の作が出た。

三十二年に入つては藤村、泣菫、晩翠の三詩人は、詩界を縦横に馳騁して大なる活動を試み、『新小説』も追々と詩を載せるやうになり、藤村の「労働雜詠」などが續々出で、『帝國文學』には晩翠の「萬里長城の歌」「富嶽の歌」などが振ひ、有明の「かげ彦の歌」や「もろ葉草」が現れた。其他『東京獨立雜誌』の諸詩人が振ひ、『學窓餘談』には泡鳴の物語詩「嘉播の親」が連載され、『世界の日本』にも一二新作家の作品が出たやうに記憶する。

『小天地』

これは、泣菫編輯の下に、三十三年に大阪に生れた雜誌である。泣菫の多くの作は之に掲げられ、天遊、臥城、山本露葉、高安月郊等の新作が續々出で、東都の詩界に尠からぬ反響を與へた。なほ大阪には『造士新聞』『ふた葉』など云ふ雜誌も

あつて、多くの詩を載せた。與謝野晶子（當時の姓は鳳）の詩界に打つて出でた
第一歩は『造士新聞』などであつたらう。

『明星』

は、『小天地』と同年に東京新詩社から出た雑誌である。始めはちツぽけな雑誌であつたが、追々と面目を改めて來た。三十三年には鐵幹の「小生の詩」が載り、白星の「亞細亞」等の諸篇が出で、前田林外も處女作を公にした。『帝國文學』は前年の餘勢未だ衰へず、晚翠の「黒龍江上の悲劇」「弔吉國樟堂」「登高賦」等を盛んに載せて詩界の中心となり、『新小説』には藤村、泣菫の新作が寄せられ、『天地人』には泣菫の「遺憤」及び泡鳴の作が出で、『新聲』には有明の「彩雲」、其他青年の作が雲の如く現れ、『文庫』派も亦漸く振つて來た。

三十四年に入つて詩界は愈振ひ、詩集の刊行されるものが多いを加へた。而して大阪から月刊詩集『若くさ』が出で、東京新詩社からも『片袖』が出たが、一は

詩 國 小 觀

詩 國 小 觀

一號、一は數號にして斃れて了つた。『明星』には鐵幹、白星の諸作、林外の「アメリカ彦造の墓」、有明の「獨絃哀歌」が出でた。「獨絃哀歌」はソネット形の四七六調であつて、象徴派の色を帯びて居たので、詩界の視線は此の詩人の上に集つた。詩に句讀點を施すことが美妙齋、梅花道人、殘花の時代には行はれて居たが、藤村、晚翠に至つては全く捨てて顧みられなかつた。夫れが有明によつて復活し、此の頃から再び世に行はれるやうになつた。『聖書之研究』や『心の花』には臥城の新作が出で、『文庫』には醉茗の外、伊良子清白、横瀬夜雨、山崎紫紅等が振つて來たが、雨江、羽衣等は衰へ、藤村も亦詩界を去らうとした。『新聲』には尾上柴舟の譯詩が見え、『白虹』はこの年を以て新聲を上げた。

三十五年も前年と大した差はなく、『小天地』は相變らずの顔觸れで詩苑を賑はして居たが、殊に注目すべきは泣菫の「暮秋野徑の石に凭れて」の七四調であつた。『帝國文學』には、晚翠が遠く歐州より「亞細亞回顧の歌」等の新作を寄せ、花外の

詩 國 小 觀

諸雜誌と新體詩

二〇

「暗中田鼠に告ぐる歌」や桂月の俗謡詩が出で、新に藤岡東圃、岩城孤秋等を加へた。『新聲』には有明の「新鶯曲」が出で、『海』と云ふ新生の雜誌には露葉の「海のあなたへ」が掲げられ、『新小説』には花外の「孤槍吟」が現れ、『心の花』には臥城の詩篇が載り、各その特色を發揮したが、殊に振つた雑誌は『明星』で、有明、鐵幹、白星、林外、泡鳴、小山内薫等の作が續々發表された。けれども、『帝國文學』と『小天地』とは猶詩界より重んぜられて居たことを忘れてはならぬ。

『新小説』

は、以前より詩を載せて來たが、詩界の注目を惹くやうになつたのは三十六年頃だらうと思ふ。この年は新體詩の大に江湖に推獎された年で、『大阪朝日』の「大阪市歌」、『萬朝』の「處世の歌」、『讀賣』の「大日本膨脹の歌」等の懸賞詩が發表されたので、慾に目のない凡骨俗才までが新體詩の有り難さを認めて來た。従つて『新小説』なども小説雜誌であり乍ら、此の方面にも努力して來たので、泣菫の「金

詩 國 小 觀

諸雜誌と新體詩

二一

剛山の歌」は目の覺めるやうな活字で印刷された。『太陽』には有明の「國土創成賦」が出で、『明星』には鐵幹、白星、林外合作の叙事詩「源九郎義經」や、泣菫の「雷神の夢」や、有明、泡鳴、露葉などの作が見えた。『小天地』は臥城の劇詩「草月夜」其他諸家の作を滿載して一月の詩界を驚かしたが其の儘廢刊となり、十一月には東京純文社の『白百合』が生れた。至つて薄ッべらな雑誌であつたが、號を追うて見るべきものとなつた。夫れから、も一つ附け加へて置くべきは、此の年に生れた『婦人世界』に有明の「夢の娘」が載つた事と、『帝國文學』は晚翠の詩によつて振つて居た事とである。

『白百合』

は、『明星』の體裁を眞似て世に出たが、『明星』ほどの異彩はなかつた。併し多くの詩人の後援があつたので滞りなく發達して、或は『明星』を凌がうとした。泡鳴の夢幻史詩「鳴門姫」は措辭粗笨なるが上にだらだら調で好評でなかつたが、三十

七年になつて公にした「あゝ世の歡樂」「磯姫」などは佳作と稱された。林外の「夏花少女」「壁畫孔雀の賦」「金翅鳥王の歌」は瑕疵もあつたが特長もあつて、兎に角詩界の顧みる所となつた。其他同志には、有明の「東の間なりき」「わが思」、臥城の「白金小櫛」及び、新進の石川啄木の「五月姫」、相馬御風、水野葉舟等の諸作が出た。歌劇を鼓吹したのは、同志の功績と稱して可からう。

『新小説』には露葉の「戰鬪の詩」、有明の「姫が曲」、泣菫の「天馳使の歌」、其他諸作家の什が現れた。「天馳使の歌」は長篇の神話詩で、頗る詩界の注目を惹いた作である。昨年から本年にかけてに叙事詩が勃興の氣運に向ひ、神話が眞面目に研究され、創作に評論に見るべきものが多かつた。『明星』には泣菫の「如月の一夜」、鐵幹の「大沼姫」「鶏を悼みて」及び川下江村の作などが出で、「心の花」には臥城の「佐波遅媛」が連載され、上田敏の譯詩が出で、『太陽』には有明の「石人」、月郊の「赫夜姫」、『時代思潮』には晚翠の「フローレンスの遠望」外數篇が現れ、『帝國文學』

には晚翠の「南歐銷魂吟」、白星の「魔出現」、平野流香の「天飛ぶ雁」及び上田萬年坪井九馬三、芳賀矢一等の軍歌が出たが、軍歌は徒に世の笑を買ふに過ぎなかつた。

新に生れた雑誌では『萬年草』には白星の「開闢」、『あまびこ』には上田敏、服部躬治の諸作、『世界』には林外、泡鳴の諸作、『新泉』には青年諸家の作が出で、仙臺に生れた『新韻』には臥城、泡鳴、露葉の詩、『曉聲』には有明の「沈丁花」等が掲げられた。又、『文藝界』『新人』『警世』なども新體詩を載せ、『文庫』『新聲』は云ふまでもなく、『新潮』『山比古』などと云ふ青年文藝雑誌の詩欄は非常に膨脹して來た。『ホトトギス』の俳體詩は、ねつから滿らぬものであつた。

『中央公論』

は、『反省雜誌』の分身で、『新公論』の兄弟分である。兄弟分ではあるが、喧嘩分れをしてから各好む所の方面に向つて進んだ。だいが號數の古い雑誌で、例へば

詩 國 小 觀

最う老いばれて白髪頭を振り立て乍ら炬燵にでもちび込んで居べき筈のが非常に若返つて、日露戦役の第二年即ち明治三十八年にぬうと顔を出し、晚翠、臥城等の新作を載せ始めた。

こんな老雜誌までが新粧を凝して詩界に打つて出る陽氣に連れて、ちツぽけな雜誌ではあつたが清水橋村の『國詩』が出る。新體詩専門雜誌の『白鳩』が生れる。小山内薫等の『七人』が立つと云ふ騒ぎで、詩界未曾有の盛觀を呈したのである。

まづ前年來引續いて來た雜誌を見るに、『太陽』には晚翠、有明、泡鳴の諸作が出て、『中學世界』には泣菫の「ああ大和にしあらましかば」、『百合』には有明の「常盤樹」、泡鳴の「三界獨白」、林外の「白鶴」、月郊の「羅浮仙女の嘆」「花賣」、『明星』には有明の「朝なり」、鐵幹の「倒れし白樺の歌」、泣菫の「わがゆく海」、『帝國文學』には晚翠の「東海遊子吟」が出た。有明の「朝なり」は材を市井に取り、實際的生活に觸れて居るので頗る詩界の注目する所となつたが、攻撃の聲も高かつた。併し

氣運は妙なもので、詩人も追々とその方面に目をつけて行くやうになつた。又この「朝なり」以上に注目されたのは泣菫の「わがゆく海」で、技巧の圓熟した點に於て、信仰を賦した點に於て好評を博した。ではあつたが、讀んで見ると何だか美しい文字の排列で、深い、重い所がないやうに思はれた。之より技巧と云ふことが詩界の研究問題となつた。

馬場孤蝶が再び起つて『明星』に新作を公にし、白星、醉茗、臥城、花外等も諸雜誌に據つて花々しき活動を試みた。『新小説』には大塚甲山、中村星湖等の新顔が現れた。が、大した作も無かつたやうだ。

『早稻田文學』

が、暫く「水底の没人」となつて居たが、三十九年一月に復興した。表紙は模様なしの白字抜きであるが、その文字はそつくり前の『早稻田文學』の字體に似て居る。唯主幹の坪内逍遙が島村抱月となつただけが、前のと違ふ所だ。泣菫の「魂

詩 國 小 觀

詩 國 小 觀

の常井「葛城の神」其他、林外、有明等の作が出で、久しく詩界から隱遁して居た天來の詩などもひよつこり現れた。「魂の常井」には、東儀鐵笛の譜がついて居た。藤村の『落梅集』の『海邊の曲』以來珍しいことだ。之より樂と詩との調和を語るものが漸く多くなつて來た。「音樂」や『音樂新報』には詩が澤山載るやうになつた。

『太陽』には晚翠の「失樂園」の韻文譯、泣瑩の「望郷の歌」、泡鳴の「黄金鱗」。『中央公論』には臥城の「天岩戸」「天日槍」などの長篇詩が現はれ、殊に「天岩戸」は在來の叙事詩に一生面を開いたもので、三段劇の形式で以て成つて居る。渠は之を劇的叙事詩と名づけた。「新時代」には花外、泡鳴等の作が出で、『白百合』には林外及び細越夏村の諸作が出たが、當年の霸氣はなくなつた。新生の雜誌には國木田獨歩の『新古文林』があり、早稻田の別働隊の『趣味』があり、上田敏、馬場孤蝶等の『藝苑』があり、滿州より凱旋した千朶山房將軍の鷗外は腰辨當と洒落れ、鬢の白

髪を染めて詩界に打つて出で、以上の二誌に即興詩風の市井詩を發表し、『明星』や『心の花』にも續々公にした。詩としての價値は認められなかつたが、目新しいので詩界に流行の兆が見えた。「藝苑」には小林愛雄、『帝國文學』には折竹蓼峰等の作が紹介され、『明星』に東京新詩社の人々の新作が續々登載され、中には見るべきものも有つた。

『太陽』

今日まで時々新體詩は掲載したが、詩界に對して冷然たる態度を取つて來た同誌は、四十年に入つて目ざましい働きをやつた。一月號には有明の「人魚の海」、泡鳴の「うら渦貝」が出で、續いて臥城の「民謠詩」「天若彦」等の諸作が載つた。次に多く詩を掲げたのは『文章世界』『早稻田文學』『中央公論』で、如上の詩人の外に泣菫、白星、鐵幹及び早稻田詩社の人々の作が見えた。『中央公論』に載つた臥城の「蕩兒の歌」は在來の民謠詩に比すると一風變つた代物であつて非難の聲も高かつ

詩 國 小 觀

たが、將に與らんとする新口語詩の先蹤をなすものとも見られた。

『明星』は相變らず一の城郭を作つて勢を張り、鐵幹を中心として青年作家を羅致し、醉茗は夜雨と共に新に詩草社を起して『詩人』を出し、泡鳴、有明、臥城、花外、露葉等先進詩人の諸什及び澤村胡夷、溝口白羊等社友幾百の詩を排列した。恐らくこの雜誌ほど詩に忠實で、而して詩の多く載つて居る雜誌は天下に無からう。

『詩人』に次で生れたのは『新思潮』だ。詩は目のさめるやうな四號活字で、二段ぬきに刷つてある。有明の『茉莉花』『畫のおもひ』、鐵幹の『茴香酒』『眞畫』などが現れた。其他『新小説』『新時代』『東亞の光』『新人』『新公論』『日本及日本人』『中學世界』『女學世界』『婦人世界』『ハガキ文學』『文庫』『新聲』『新潮』『心の花』『文藝俱樂部』『時好』『女子文壇』など、あらゆる雜誌は何れも詩を載せ、その影響が新聞にまでも及び、『國民』には泣菫の『子守唄』が連載され、夜雨の作も折々現れ、『讀

賣』には上田敏の『牧羊神』を始め、花外等の新作が掲げられた。

と云つて見れば、四十年は非常に盛んであつたやうに見えるが、實際は新興の自然派の短篇小説に壓倒されたかの觀があつた。而して各詩人を通じて作詩に對する煩悶が見えた。殊に泣菫などは一轉歩しようとして煩悶した形跡が歴然と詩の上に現れて居る。晚翠は「詩壇は彷徨時代なり」と觀じて修養に努め、殆ど其の作を出さぬ。かかる間に立ちて泣菫、臥城、林外は勿論、有明までも民謡詩を試み、泡鳴はデカダン詩をやり、鷗外は市井詩に努力して居る。獨り鷗外のみとは言はず、總ての詩人が努力しつつ進歩して行くらしい。その結果は總て四十一年以後に於て分るだらう。

詩集裝釘の變遷

新しい意匠と花やかな装釘とを中西屋の店頭に於る今日の詩集に比べると、昔の詩集は見すばらしいものであつた。殊に明治十九年に出た『新體詩歌』の如きは、氣の毒な程見すばらしいものであつた。四六半截形で、薄ッぺらな青表紙、紙質の粗悪なることも亦無類で、真中まんなかに「新體詩歌」と隸書體で現し、楷書で左側上方に「明治十九年四月出版」、右側下方に「東京書肆」と割つて「鶴聲社」と記してある。何れも木版刷だ。二十年に出た『明治新體詩歌選』は、四六版で、ちよつと和製の『ナショナル、リーダー』と云ふ風の装釘だ。黒の二重線の輪廓を取つた上に活版で模様を赤く刷り、真中の上方に木版で「NATIONAL」偶評と横に入れ、「明治新體詩歌選」と隸書で現し、右側には明朝の三號活字で「從七位陸軍中尉大庭君題辭」備後佐藤雄治先生編纂」と二行に刷り、「明治二十年第四月刊行」と割つて「津田氏發兌」と

菊半截版也
四の判ニアラス

記してある。從七位の題辭を有り難がつたり、先生編纂などとやつて居る所が滑稽だ。這麼装釘でも當時にあつては、ハイカラだつたのであらう。

二十四年三月に出た『新體梅花詩集』となると、前の二詩集に比べて尙かに立派なものだ。表紙畫は久保田米僊の筆で、老幹槎枒たる梅を一氣に書きなぐつて居る。先づ襖畫と云ふ格だ。青、黄、黒の三度刷である。紙質は前の二詩集に比べれば尙かに可い。表紙に刷つた活字の字體は、久永流の行書で、一時博文館本に盛んに用ゐられたものだ。四六版の並製で、裏表紙には博文館の商標が刷つてある。山田美妙齋の『青年唱歌集』も同館發行であるが、體裁が全然『新體梅花詩集』と違つて居る。四六形の横綴本で、青表紙である。書名は短冊形の紙を貼り新詞韻文『青年唱歌集』と書き下し、肩に「山田美妙齋著」と、例の行書活字で刷つたのだ。彼の文部省印行の「小學唱歌集」も一寸こんな體裁であつた。

二十九年に出た『東西南北』や、その翌年に出た『天地玄黄』は四六半截の並製

詩 國 小 觀

で『新體梅花詩集』や『青年唱歌集』にも劣つたが、二十九年末には『花紅葉』が美装して出た。今日まで装釘などには餘り頓著せなかつた博文館本としては大出来である。菊半截の桔梗色の布表紙でもみぢ葉を金箔で現した。之が詩集装釘の一進歩であらう。三十二年に出た『天地有情』も表紙の色こそ違へ、此の體裁であつた。其他博文館から出た『黄菊白菊』でも、『暗香疎影』でも、『霓裳微吟』でも、總て此の體裁を襲用した。

民友社版の『抒情詩』は四六半截の横綴本で、紙表紙ではあつたが、装釘畫は和田英作で、非常に意匠を凝したものである。但し意匠を凝した程にはえないのは遺憾だ。が、『鈴虫松虫』と並んで共に可憐なる冊子である。『抒情詩』は序から本文に至るまで、悉く六號活字に刷つてある。此の頃より、世は製本や印刷などに多少意を注ぐやうになつて來た。

三十二年

三十二年の八月に出た『若菜集』は、装釘畫は中村不折で、意匠の嶄新なのが尠か

らず世を驚かした。今日より見れば、これ式のものに驚いたのは不思議だと驚くだらうが、當時にあつては内容の清新と相待ちて、表紙畫や挿畫の美を嘆美したのであつた。序を色刷にして居るのも目を惹いた。その翌年に出た『一葉舟』も『夏草』も同じく不折の意匠で、清新の趣致が横溢して居た。詩集の表紙畫は可い加減なものでなく、勝れた畫工の勝れた手腕に待たねばならぬことを悟り、意匠に就て研究するの風が見えた。

詩 國 小 觀

三十二年の六月に出た『風月萬象』は左程のものでもなかつたが、同年の十一月に出た『暮笛集』は頗る凝つたものであつた。四六版の横綴本で、絹の彩絲で綴つてあつた。装釘も先づ瀟洒たるものであつたやうに思ふ。この横綴本は前に美妙齋の『青年唱歌集』があり、小形ではあるが『抒情詩』があつたけれども、體裁は餘り引立たないので、此後この形を詩集に採用するものがなくなつた。但し前田林外の『日本民謡全集』は歌謠の數を甚だ多からざる頁の中に比較的多く收め

る方針でやつたのださうだから、特別である。
 之までの詩集は何れも多くは菊半截か四六版であつたが、三十三年に至つて高安月郊は『夜濤集』を出した。該集は思ひ切つて大さは菊版で、書名を金字で現し、淺黄色のリボンで綴ちてある、實にさつぱりした詩集である。爾後、月郊は『春雪集』や『寐覺草』を出したが、皆菊版で、小口を斷つてない。『寐覺草』の表紙畫は多分淺井黙語だらうと思ふが、裏表紙から表紙に渡つて薄を銀箔で見せ、表紙の三分の一だけ色刷で桔梗を銀箔で現し、三分の二を白くし、書名と「月郊」の二字を自筆の木版で見せた處が面白い。この集の出たのは三十九年であるが、三十四年に出た晚翠の『曉鐘』も菊版で、表紙畫は一條成美、色絲で綴ちてあつた。

恁く菊版も二三の詩集に用ゐられたが、三十四五年頃には矢張携帶に至便な袖珍本が全く廢らず、泣菫の『ゆく春』臥城の『小百合集』泡鳴の『露じも』は即ち

夫れであつたが、多くは四六版であつた。藤村の『落梅集』、有明の『草わかば』、白星の『日本國歌』、花外の『花外詩集』等、皆然らざるはなしである。

三十四年に出た『無絃弓』は一寸風變りな四六版の長方形本で、表紙畫は當時雜誌の挿書畫きの流行ッ兒たる成美であつた。夫れから『ハイネの詩』や、『花柘榴』や、『野茨集』や、『半月集』も此の形を採り、一時譯詩集や何かにまで流行したのであつた。

又、鐵幹の『紫』はちよと乙な本で、中身は菊半截であるが、表紙は四六版で、リボン綴であつた。『毒草』は菊版を三分の一だけ削いだ方形本で、上等な洋紙を用ゐて居る。表紙畫は藤島武二で、出來が可い方であつた。が、『紫』や、『毒草』の體裁は餘り出版界に影響を及ぼさなかつたやうである。

三十年代になつてからは、詩集の表装にも意匠を凝し、用紙や印刷にも苦心するやうになつて、從來の詩集と比べると霄壤の差があるが、小説の表装とは未だ同

日の論ではなかつた。けれども、泣菫の詩集『ゆく春』だけは、用紙に於ては眞かに小説を凌ぐものであつた。よくも記憶しては居らぬが、この『ゆく春』が出てから、詩集の用紙が一變するやうになつたと思ふ。『若菜集』にせよ、『天地有情』にせよ、その用紙は甚だ粗悪なものであつた。

三十七年に出た『藤村詩集』は、用紙は普通であつたが、表装は紙製の本製で頗るハイカラに出来た。この以前に現れた詩集と云ふ詩集(ナショナル・リーダー式の『明治新體詩選』を除き)は、皆並製であつたのに、突如として本製が現れたので讀詩家の目を眩し、出版界の視聽を聳動せしめた。……今、突如としてと言つたが、この詩集の本製が出るには出るだけの氣運に向つて來たのである。と云ふのは、前年既に佐々木信綱の歌集『おもひ草』^{△△△△}が出て居る。『おもひ草』は全文四號活字刷で、表装はクロースの本製、表紙畫は長原止水で、空前の美本であつた。であるから、『おもひ草』を以て、詩集美装の先驅と見て可からう。

詩集の美装と共に、定價の貳拾五錢前後であつたのが、五十錢内外となり、三十八年に出た『二十五絃』に至つて、遂に壹圓の定價となつた。『二十五絃』は『藤村詩集』に次で春陽堂から出版された詩集で、装釘は岡田三郎助、總クロースの金泥刷、凝つたと云つたなら恐らく是れ以上に凝つたものがなからう。

恁くして詩集の表装が贅澤になり、詩集とし云へば用紙を精選し、體裁を飾り、美に美を盡さねばならぬもののやうになつた。で、出版書肆も詩集は美装しなれば駄目だと云ふ風になつた。

そして、詩集の美装は出版界の流行となり、三十八年に出た『白玉姫』『塔影』『海潮音』、三十九年に出た『ゆく雲』『白羊宮』『東海遊子吟』、四十年に出た『二十八宿』、四十一年に出た『有明集』などは、クロースの本製で美々しいものであつた。就中『白羊宮』と『東海遊子吟』とは其の尤なるもので、定價は共に壹圓。夫れから、前に戻つて三十八年に出た『春鳥集』は紙表紙の本製で、背はクロース。

詩 國 小 觀

『あやめ草』と『豊旗雲』とは羅紗紙の本製で、表紙書も相應な出来であつた。是等の装釘書を書いた畫家で、世の注目を惹いたものには、前に一條成美、平福百穂、結城素明、藤島武二あり、後に和田英作、長原止水、滿谷國四郎、中原弘光、齋藤松洲あり、中村不折は『若菜集』より『東海遊子吟』の時まで猶衰へず、否衰へないばかりでなく今後とも装釘書界に振ふだらう。併し、近頃めつきり評判の好いのは齋藤松洲であるさうな。『うた日記』と『有明集』とは、松洲の装釘である。

詩壇の回想

窓の外には、ささと時雨が訪れて囁く。火鉢の炭火は灰を被つて白くなる。鐵瓶には松風が通つて、静かな音を立てる。心ゆくばかりに好い夜である。

『明治詩集』の附録とすべき「新體詩年表」を編製して了つた自分は、机に凭れて目を瞑つた。洋燈の心の油を吸ふ微かな音が耳を穿つて、遠世の夢を誘うて來る。夢の華が五彩に輝いて、追懐多き華の一瓣一瓣が明かに見えて來る。懐しい薫が胸に満ちて、何とも知らぬ恍惚とした感じがする。

詩 國 小 觀

『新體詩抄』の出た明治十五年四月の自分に歸る。——自分は政變動搖の餘波が全く收まらないで、人心の不安の波が呻いて居る頃に生れた。妖星だと時の人の畏怖した彗星を母の懷に眺めた。燦爛たる光芒の美は、今も深く深く刻まれて忘れぬ事が出來ぬ。——自分は背戸の河邊の柔かな緑の草の間に頭を擡げて居る土筆

や蒲公英を摘み乍ら、青年の歌つてゆく「一里半なり一里半、並びて進む一里半。」の勇壯な節を聞いて居る。「天には自由の鬼となり、地には自由の人たらん。自由よ自由、やよ自由。」の激越な調に耳を敬て居る。嗚呼「自由」！自分の心は躍つた。空ゆく雲、天飛ぶ鳥、自分の思は地上の花を忘れた。摘んだ土筆や蒲公英を悉く川に流して了ふ。「まあ、お隣家のわこうさん（當時御家中——町人に對して云ふ——の子息を恚う呼んだ）が、大人しくして遊んで居なさる。」と云ふ聲に振り向くと、夫れは隣家の女が自分の祖母と話して居るのであつた。祖母は自分を案じて、何をして遊んで居たかを見に來たのであらう。——今日から思ふと夢のやうに美しい。祖母は實に好い女性であつた。文盲なものゝ多い時代の女性としては異數で、角文字や倭文字を書く術を知つて居た。夜になると何時も昔噺を聞かされた。小倉百人一首は課業のやうに讀まされた。これは五歳か六歳の時であつて、意味は解らなかつたが、非常に面白いと思つて讀誦した。

明治二十年か二十一年頃に至つて、始めて青表紙の『新體詩歌』と云ふ本を手に觸れた。彼の青年の歌つて行つた勇壯な節は、「輕騎兵進撃の歌」であることを知つた。而して彼の激越な調のも此の詩集に載つて居た。非常に嬉しくて堪らない。幾度も幾度も繰返して讀んだ。洋紙綴の表紙の剝れたのを色紙か何かで繕つて、それを懷にして八幡の森陰に入つて讀んだ。臥牛城址の若草を籍いて讀んだ。河邊の蒲公英の上に詩集を伏せて愛誦した。幼稚な時代には、矢張幼稚なもので満足して居る。

『新體詩歌』の次に、自分の愛誦したのは「孝女白菊の歌」であつた。誰かに雑誌を借りて、自分で手寫したやうに記憶して居る。落葉亂るゝ晩秋の御裏林の夕日を浴び乍ら、聲を張りあげて吟じて見た。反響が答へるやうに林の奥の奥に聞える。自分は詩中の人であるやうに思はれた。

泰西から流れて來た新思潮は東海岸を洗つて、霎時も歌むことがない。刻々に人

詩 國 小 觀

の頭が新しくなつてゆく。段々と進んで来るに連れて舊文學が少しづつ破壊されて行く。——歐化思潮——その反動——幾轉變するに従つて、内部的生命の火が熾んになつて来る。文學の天に輝く新しい詩歌の星が愈照り輝く。人の心の奥底を刺すやうに輝く。山田美妙齋の口語詩が現れた。森鷗外の譯詩が顯れた。宮崎湖處子の『歸省』が出た。この『歸省』の出たのは、明治二十三年である。その篇中の詩は清新の響を傳へて、うら若いものの胸を躍らした。美妙齋の口語詩にあきたらなかつた人々は、この詩を稱揚した。「孝女白菊の歌」の長歌臭あることを追々と悟つて来た自分は、恚うも新しく詠めるものかと少からず感服した。けれども、多くの人は未だ詩を顧みなかつた。『歸省』に酔ふものは、詩よりも寧ろ其の文にあつたのである。『世路日記』に流涎した年少の嗜好は『歸省』の上に移つたのである。この年には美妙齋の「日本韻文論」と云ふ長論文が『國民の友』に現れた。内田不知庵や石橋忍月や森鷗外やば之を批評して、辯難を交換した。

十五年に生れた新體詩は、美妙齋と云ふ保姆に依つて這ひずり廻り、次で危なかしい乍ら立つまでに育つた。恚くして育つた新體詩は、中西梅花の『新體梅花詩集』に依つて、歩くことを覺えた、明治二十四年である。森鷗外の題言が付いて居た。

「いかなる形にもあれ永く生きて働くべきことを云ふぞ若き詩人の務なる。物にさからふ心、ものをきらふこゝろ、ものを誇るこゝろ若くはものを打消すのみなることは努めてこと業にあらはすことなかれ、その何の益もなからん。」

「わが友とする若き人々にわれ今切に勧めむとす、人々のおの／＼その身の上をわもはむことを。詩のしらべ少しとよのひたらば、これのみにて其意いよく善くなりぬべし。」

「詩の含めるものは、即是詩人の世のふくめるものなり。それは誰もえ奪はず、たれもえ縮めず、唯おほひて暗からしむることあるべきのみ。底事によらず、影をかへりみてみづから喜ぶやうなることを本としたるは、わが取らざるところなり。」

「思を舒べてかくすことなきは、人あなつりするに近し。そばかゝるとき誰もみづから堪ふといへど、まことはえ堪へねばなり。我友とする人々には今いはむ、君等は守るべき法度あるにあらす、法度は君等がみづから作るべきものなり、唯一詩成らばかならずその含めるこゝろわのが経歴より來れるかと問へ、またその経歴おのが道を進めたるかを問へ。譬へばわかれし戀人、われをすてし戀人、若く

詩 國 小 觀

はみまかりしこひ人をいつまでもこふるは道を進むべきことにあらず、かゝる事をよみてたるは言葉いかに巧なりといへども、何の益かあらむ。」

「詩人はわが世とともにその言の葉のすまむことをつとめよ。かくつとむるときは、いつにても直ちにその活動したるの活動したりや活動したらずやを知らむ、また後におもは、いつにてもおのがこゝろの活動したりしや活動したらずしやを知らむ。」

この法を説きしは大詩人ギョオテなり、これを寫して梅花詩集の題言としたるは鷗外漁史森林太郎なり

會て『國民の友』に載つた「九十九の嫗」と云ふ長篇詩も載つて居て、一部の人には愛讀されたものである。自分は餘り好きではなかつた。自分は此の頃から『萬葉集』や『古今集』に興を感じて、之に讀み耽つた。雑誌『しがらみ草紙』は友人と引合ひ乍ら讀んだが、強い印象を受けずに濟んだと見えて、殆ど記憶に残つて居るものがない。

明治二十五年になつて、自分は始めて歌と云ふものを詠んで見た。確か秋であつたと思ふ。『都の花』を抱いて小説に遊んで居る友や、俳句革新を談ずる友や、ウツロズウヲースの詩集に酔うて居る友の誰であつたかは忘れたが、何れ其の中の一人大沼の畔を散歩した。入日の沼水は、近山の影を涵して靜かである。ありとも知らぬ鴨が、岸邊の末枯れた眞菰の裡から水を曳いて飛び立つ。いつも見て居る景色ではあるが、此の日に限つて詩情が痛く動いて一首の歌となつた。非常に嬉しい。「この日始めて歌を思ふ、幸多き心の日よ。」と、日記に書いた。

新體詩を試みたのは、明治二十七年である。曩に詞友や先輩と逢隈會を起して和歌を研究して見たが、餘りに古い形式に拘泥し、古い思想に戀々として居るので可厭になつて了つた。で、何か發展の途を講じやうと思つて新體詩を試みたのであつた。始めて作つたのは「一枝の山吹」とか何とか云ふものであつた。例の七五調のもので、だから調の下らないものであつた。夫れから日清戦争が起つて夕顔棚の下涼みにも輕き團扇に肩胛を張つて戦話に耽る世となつた。多分この年か、その翌年かであつたらう、『國民新聞』や『毎日新聞』などが戦争に關する詩

詩 國 小 觀

を江湖に募つたことがある。日外、A君と語つて笑つたことがあつた。「左様、僕も彼の時『毎日』のに應じて、『夜半の川霧』外一篇が何等かに當選したつた。最う遠い昔のやうに思はれる。」と云ふと、A君は「僕も應じたが、落選して了つた。」と云つたことがある。渠も内々その頃から試みて居られたと見える。兎に角この空前の大戦争に觸れて新文學が鬱然として興起し、新體詩を試みるものが頓に多くなつた。

當時、自分は漢詩人が律も絶句も作るやうに、わが詩人も短歌、俳句、新體詩を作るべきだと云ふやうな考を抱いて居たので、俳句も試みた。「夷講我も供へん何の魚」と云ふは、その處女作である。仙臺に出てからは『五城文學』を發刊し、小説などもひねくつて見た。

明治二十八年の下半期に至つて新體詩は、腕白ざかりの能く笑ひもすれば、能く語りもし、泣きもするやうになつた。生れてから最う十九年である。人の成長に

比べると遅々たるものである。「帝國文學」の鹽井雨江、武島羽衣、『早稻田文學』の三木天遊、繁野天來、『文學界』の島崎藤村などは續々其の作を公にした。この時まで新體詩を顧みなかつた人々も注目するやうになり、愛讀者の數も多くなつた。自分は藤村の「與作が馬」は雨江の「深山の美人」と行き方が違ひ、何處かに新しい句があり、濕ひがあり、面白い作だと思つた。

明治二十九年に與謝野鐵幹の『東西南北』、その翌年に同じ人の『天地玄黄』が出たのが、人の話で聞いただけで讀んでは見なかつた。二十九年に出た雨江等の『花紅葉』は讀んで見た。如何にも花やかな詞が並べられてあるが、纖弱な調で、胸にしみじみと覺ゆるものがなかつた。唯羽衣の「小夜砧」は幽韻の掬すべきものがあると思つた位で、大して感服もしなかつた。

再び故郷に歸つた頃から、自分の心は何物かに思ひ煩つて居た。うかうかと人生を蔽ふ懷疑の雲に釣り込まれて、一種の哀感を覺えて來た。綠深き夏野を行いて

詩 國 小 觀

詩 國 小 觀

も、暮雲の低く垂れた湖畔を辿つても、金風蕭殺たる落葉木林に入つても慰むる術は無かつた。頑固なる學校教育に禍された自分の頭は裂けんばかりに痛み、耶穌教は邪教なりと確く鑄られた胸の扉は破れんばかりに悶えた。無形の鐵槌、あゝその鐵槌は手力強く打ち込まれる。胸の扉は滅茶滅茶に破壊されて了つた。破壊の刹那に建設は宿つた。予の心靈の「神」に喘いだのは此の時であつた。

けれども、自分は人の造つた讚美歌の教會には入らなかつた。不眞面目な教師なぞの髻を扱いて説教する教會には入らなかつた。自分は神の建設された森林の教會に入つて黙禱した、清流耳を穿つ河畔の教會に身を置いて黙禱した。自分の慰籍は野の小鳥と野の花と聖書とであつた。自分は現實の生活を忘れて、空想の世界を見たのである。

數年來自分を愛し、自分を信じ、自分を慰めて呉れた「心の少女」は、漸く成長して來た。豊頬朱唇より溢れんばかりの微笑は、わが靈を愈純潔な空想の世界に

誘うて行く。新しい建設の成ると同時に、自分は「心の少女」の慰籍の力の強いものがあることを悟つた。「神」に黙禱を捧げる時に「心の少女」は必ず傍に在つた。自分の歩む時は自分と共に歩み、自分の泣く時は自分と共に泣いた。ああ純潔、百合の如き「心の少女」よ。彼女は萬人の冷罵と女性の嫉妬との中に立ちて、少しも怖るる處なく恨む處なく、自分の哀秋に向つて陽春の温氣を供したのである。自分の詩は、とこしへに死ななかつた。

三十年の初秋、時じくの『若菜集』が萌え出でた。芭蕉葉をよぐ夕風の椽にして之を讀んだ。紺青の空には夕星一つ、雀は竹林の薄冥に囁いて居る。自分は風呂を浴びることも忘れて、この浦若い詩人の情熱の韻致と紅涙の筆痕とに恍惚として了つた。『歸省』は過去の潮に葬られて、『若菜集』は新しい思に活きた。その清新のほひと、温かき血とに胸を轟かしたのは獨り自分ばかりではなく、當時の詩人は勿論、評家の胸にも強く強く響いたであらうと思ふ。

詩 國 小 觀

恁くて新體詩は全く獨立の成人となつた。

天才の前には幾多の犠牲を要する。天才の成人して世に知られるまでに、梅花は失戀に狂うて死に、透谷は哀愁の俘となつて縊れ、美妙齋は隠れ、詩界の波瀾は波瀾を捲き、波瀾は應て新潮を齎し、新潮は天才に帆をあげるの自由と船を漕ぐの努力とを與へた。自分も亦その船の水脈みまに跟着行くの一人であつた。

不知不識の裡に自分の思想は移り、自分の境遇は變じ、空想の世界に擅なることが出来なくなつた時に、茲に始めて革命の火が點せられた。蒲公英を摘み乍ら聞いた「自由」は、焔々の猛火と化つて燃えて來た。その血管は革命の呼吸に破れんかと思はれた。無妻！正義！！獨立!!! 自分は主義の爲に建闘を試みやうとした。「心の少女」と手を分つて漂泊の旅——自分は敢てしか呼ぶのである——に上つた。

『小百合集』と『野茨集』とは、自分が此の時代の好紀念である。併し『野茨集』

を仙臺の五柳園の一室で校正した時は、將に思想の再轉せんとするの時であつた。ああ追懷おもひは總て美しい。美しい追懷——詩歌——希望——ばかり、自分の苦悶に瞬時の慰藉を與へるものはない。

詩集解題

大正五年八月八日午後二時読了(第一回)

- 詩壇、回想、――再読、(長)
- 詩集、紫釘、夏遷、――再読、(要)
- 法瓶、読下、新件、詩、――再読、(要)

▲新體詩抄

著者 外山、山。井上巽軒。矢田部尙令。

外山、山。井上巽軒。名は正一。静岡の人。明治三十一年四月、帝國大學總長より

進んで文部大臣となり、同年六月内閣の總辭職と共に冠を懸けて野に下り、侃

々諤々の論議をなして世に重んぜられたが、明治三十三年三月病を得て終に長

逝した。年五十三。

巽軒。文學博士。名は哲次郎。安政二年十二月二十五日、筑前國太宰府町に生

る。明治十三年七月、東京大學哲學科を卒へて後、海外に赴き、獨逸の伯林、

萊府、ハイデルヒ、ソルボンヌの諸大學に學んだ。學識が該博で、哲學は勿論

廣く文藝に渡つて居る。東京帝國大學教授で、帝國學士院會員で、而して『東

亞の光』の主筆である。當時人口に膾炙した『孝女白菊詩』や『比沼山の歌』

や其外『釋迦牟尼傳』『倫理と宗教との關係』『日本陽明學派の哲學』『日本古學派

詩集解題

新體詩抄

井上巽軒
名哲次郎
文學博士
大宰府人

外山、山
名正一
文學博士
静岡人

初版
序文三枚
凡例一枚
目次一枚
序文四枚
正文三十五枚
自序一枚

の哲學『日本朱子學派の哲學』等の専門の著書が頗る多い。
 尙今。理學博士。名は良吉。帝國大學理科大學教授兼東京高等師範學校教授であつた。明治三十二年八月、海水浴の節溺死を遂げた。享年は四十九。

出版 明治十五年四月發行。

目次 ム山仙士——チャールス・キングスレー氏の悲歌。高僧ウルゼーの詩。拔刀

隊の詩。ブルウムフヤールド氏兵士歸郷の詩。テニソン氏輕騎隊進撃の詩。社會學の原理に題す。シエークスピール氏ヘンリー第四世中の一段。ロングフェールロー氏人生の詩。尙今居士——春夏秋冬の詩。ロングフェールロー氏兒童の歌。シヤール・ドレアン氏春の詩。カムプベル氏英國海軍の詩。グレイ氏墳上感懷の詩。勸學の歌。テニソン氏船將の詩。日本魂。鎌倉の大佛に詣でて感あり。シエークスピール氏ハムレット中の一段。巽軒居士——ロングフェールロー氏玉の緒の歌。

備考 詩らしく讀めるのは、まづ尙今の「グレイ氏墳上感懷の詩」と、ム山の「チャールス・キングスレー氏の悲歌」位のものだらう。併し、この詩抄を今日の日

で以て批評するのは無理である。須らく新體詩史の第一頁を飾る最初の詩集として見るべしだ。明治十九年四月には小室屈山校閲、竹内節編輯の『新體詩歌』(四六半截、百三十頁)が、東京鶴聲社から出版された。全卷を五集に分ち、第一集に載つて居るのは「楠正成櫻井驛に於て正行へ遺訓の歌」外十一篇、第二集には「勸學の詩」外十四篇、第三集には「テニソン氏輕騎隊進撃の詩」外七篇、第四集には「虚禮氏墳上感懷の歌」外六篇、第五集には「世渡りの歌」外九篇で、『新體詩抄』のは悉く載つて居り、其他小室屈山の「自由の歌」「外交の歌」「花月の歌」及び坪井正五郎、小川健次郎、飯田武郷、久米幹文などの作が載つて居る。又、二十四年四月には佐藤雄治(碌々庵居士)編纂の『偶明治新體詩歌選』(津田氏發兌、四六版、二百餘頁)が出た。『新體詩抄』や『新體詩歌』の

諸作は大概網羅された上に、大和田建樹、大竹美鳥、鈴木券太郎其他の作、總て七十四篇載つて居る。次で『新體詩林』や何や蚊やと類似のものが、だいぶ發行されたらしい。

詩集解題

▲新體梅花詩集

著者 中西梅花。名は幹男。落花村舎主人漂絮とも號し、東京淺草區千束村に住んで居た。奇矯の人で、善憤善罵高聲四壁を動したとある。明治二十三年の秋、廳然京を出で美濃尾張の野にさすらひ、美濃なる虎溪の精舎に數句の間引籠つた。後、再び京に歸つたが、詩集を公にした年遂に狂死した、失戀の爲だと云ふ。幸田露伴、森田思軒などと昵近であつたらしい。

出版 明治二十四年三月十日。六版、百四頁。

目次 九十九の姫。滴滴露。靜御前。毒港禪師を辭し虎溪山を出るとして。松壽軒西鶴の畫像に贊するとして。墨川白鷗の詞四首。對空吟。戯れに露伴子と韻を探

中西幹男
落花村舎主人
狂死

息のたぬ歩むに腰の骨いたし
狂死のやうな
狂死

詩集解題

りし折柄已ア、エの兩列を得しかば二首。江戸紫に題す。春の舎主人。竹の舎主人三首。鷗外漁史。古蒼樓主人。靈魂。出放題。旅鳥。須磨の月夜。李青蓮が菩薩の意を譯す。おなじく柳永が卜算子慢を。原作者の名を失す二首。米僊子の西京に行かれしと聞き想鴨河納涼に走せて。浦のとまや。備考 「旅鳥」は八六調、其他五七調、七五調と見るべきものもあるが、多くは散文詩である。思想の流露に任せて書きなぐつたものらしい。森鷗外、徳富蘇峰、森田思軒の序と、幸田露伴の跋とがついて居る。之を讀んで後、詩に對すれば無限の感慨が湧くであらう。

▲新調 韻文 青年唱歌集

著者 山田美妙齋。名は武太郎。明治元年三月、東京に生る。明治十八年の春東京大學豫備門在學中、その同學なる尾崎紅葉、石橋思案、丸岡九華等と文會を結んで硯友社と名づけ、『我樂多文庫』と題する廻覽雜誌を發行し、十九年末よ

山田美妙齋
尾崎紅葉
石橋思案
丸岡九華等
硯友社
我樂多文庫

詩集解題

り追々同志も加はり、機運も熟して來たので二十一年五月印刷して發賣するに至つた。之が小説雜誌の嚆矢である。その前年即ち二十年には紅葉、九華と共に『新體詩選』を著し、又婦人雜誌『伊良都女』を發刊して新體詩をも登載した。次で詩篇を續々『國民の友』等に公し、詩論をも發表した。後、専ら小説に筆を染め『夏木立』『いちご』『胡蝶』などを作り、『いろは辭典』其他雜著頗る多い。言文一致を唱導した人として、後世まで其名を傳へられるだらう。

出版 明治二十四年八月、東京、博文館發行。四六形横綴本、第一編九十八頁、第二編七十六頁。渡邊省亭、久米田米徳の挿畫二葉。

目次 〔第一編〕大祭日祝頌（其一、四方拜。其二、孝明天皇祭。其三、紀元節。其四、神武天皇祭。其五、春秋二季皇靈祭。其六、天長節。其七、神嘗祭。其八、新嘗祭）。明治二十二年二月十一日憲法發布。蒙古襲來。故郷の山。八州。るうまにあ軍歌補譯。天地の名玉。たのしかれとて。明治二十四年元旦口號。未見

詩集解題

の友磊落子へ。秋月述懷。願はくは。さても此世。庭前の女郎花。落葉の吟。病後の吟。花のかをり。霖雨。其儘の花。母の慈愛。落魄の旅。岩本善治氏舉兒の賀。夢。露國皇太子を送り奉るとて。紙屑買。夏の貧家。静けき山里。〔第二編〕花の雲。山の曙。春の遠山。若葉の月。初夏。桂川鶉飼の圖。晚秋即事。老梟叫月の圖。夜の霧。冬の山路。世は無盡。沖。少女裁縫の歌。こどもを詠じた西人の句をはじめに用ゐることもと題して。ともしらが。つゝましさ。薔薇のつかひ。雲一片。まよひの淵。つぼすみれ。 **外編**

備考 言文一致の詩は、幾分か端唄に近い調でやつて居る、「春の曙」などは其の例である。又、俗體としてあるのは、思ひきつて俗語を入れ、後世の壯士節に似通つて居るものもある、「蒙古襲來」などは即ち夫れだ。句續點（、。、）は必ず附し、名詞、動詞、助辭等の間を明けて書して居る處は、今日の泡鳴の詩よろしくである。、！、？、——、なども澤山用ゐて居る。調は大體七五、

五五、五七、五七五、八六、八七で、苦心の跡があり／＼と見える。この點より見ても、この詩集は詩界に取つて忘るべからざる詩集であらう。第二編の「つぼすみれ」以下に、「日章旗」外四十篇の詩が載つて居る。こは大方雑誌『伊良都女』投書家の作だ。茅海散士と云ふのは、河井醉茗なさうである。

▲花紅葉

著者 鹽井雨江。大町桂月。武島羽衣。

雨江、名は正男。文學士。明治二年一月三日、但馬國豊岡町に生る、明治二十八年七月、帝國大學文科大學國文科を出で、中學の教師となつたが、今は日本女子大學講師だ。『湖上の美人』『暗香疎影』『日本文典』其他數種の著述がある。桂月、名は芳衛。文學士。明治二年一月二十四日、高知市北門筋に生る。帝國大學文科大學國文科の出身である。島根縣中學校に教鞭を執り、後『太陽』記者となり、『青年』の主筆となつたが、今は東京府西大久保に閑居して『中學世界』

塩井正男、
大町芳衛、
武島羽衣

中學世界
武島又次郎

に評論の筆を執つて居る。著書は『黄菊白菊』『學生訓』『日本文明史』『一枝の筆』『代表日本人』『東京遊行記』『日本文学史』『我文章』等、其他頗る多い。夫人、名はちやう、雨江の妹である。
羽衣、名は又次郎。又、霓裳と號す。文學士。明治五年十一月、東京日本橋に生る。第一高等中學校より帝國大學文科大學に入り、國文學科を卒業した。『修辭學』『霓裳微吟』『文章入門』『日本文学史』其他數種の著書がある。東京音樂學校教授兼東京高等師範學校教授。
出版 明治二十九年十二月。菊半截、四百十九頁。
性質 美文と新體詩の合集である。美文十八篇、新體詩十六篇。
目次 鹽井雨江——磯の笛竹。たゆたふ駒。故郷の花。秋の蝶。大町桂月——琵琶瀧。巢だつ雛鳥。秋蟬。野末の伏屋。武島羽衣——ぬれ燕。魂まつり。戦死卒。戀。立秋。落梅。浪の雫。詩神。

雨江二十八年、
桂月二十五年、
羽衣二十五年。

詩集解題

備考 雨江と桂月との作には圈點が附してあるが、羽衣の作には附してない。「魂まつり」と「詩神」とは勝れて居る。

▲天地玄黄

著者 與謝野鐵幹。名は寛。明治六年二月二十八日、京都岡崎の里に生れ、落合直文の朝香社に學んだとある。頗る霸氣のあつた男で、曾ては韓山八道の風雲を叱咤せんとした事もあり、一時盛んに太刀、虎などを詠じたので、虎の鐵幹などと評されたこともあつた。明治三十三年、東京新詩社を起して、明星を發刊し、詩壇の一勢力となつて居たが、遂に百號を以て廢刊して了つた。座談は眞綿に針のやうな處もあるが、概してやさしみがあつて人をそらさぬ。が、一たび批評の筆を取ると辛辣を極める。今の夫人の名は晶子、本姓は鳳。明治十一年十二月七日、和泉國堺市に生れ、歌壇の鬼才を以て目せられて居る。歌集『小扇』『舞姫』『夢の華』などは見るべきものである。

與謝野鐵幹
生年不詳

晶子
生年不詳

詩集解題

出版 明治三十年一月。四六半截、百四十六頁。外に附録三十一頁。二十五才
性質 短歌と新體詩の合集である。短歌百四十一首、連歌五首、新體詩十一篇。
目次 山中の石。惆悵。憎元恭を送る。海嘯。斷腸錄(次の夜枕邊に伽して二人鬼。洛北の山栖梅花鶴瘦堂に題す。仙臺の新歌人佐々木獨尊と話す。乾坤寥廓。漕歌。野中千代子。
備考 「山中の石」「乾坤寥廓」の二篇は比較的勝れて居る。この集も圈點が無暗矢鱈に多い。附録に伊藤落葉の『こぼれ松』(新體詩三篇、短歌二首)、金子薫園の『わか菜』(短歌十四首)、佐々木獨尊の『寒梅一枝』(短歌二十首、連歌五首)が載つて居る。

▲抒情詩

買らん

編者 宮崎湖處子。名は八百吉。元治元年九月二十日、筑前國朝倉郡三奈木村に生る。東京専門學校政治科の出身で、國民新聞記者となり、黒田侯爵家の家扶

宮崎湖處子
名八百吉

となり、聖學院講師となり牧師となり、今は夫れもよして、操觚の業に従事して居る。『歸省』『ラルヅナルス』『人寰』『湖處子文集』等の著書がある。

出版 明治三十年四月。袖珍横綴本、二百五十六頁。和田英作の挿畫六葉。全文六號活字刷である。定價 二十五円

目次 國木田獨歩——獨歩吟(驚異、夏の夜、濱づたひ、枯野の友、友なき里。

春來り冬ゆく、門邊の兒供、君ゆるるに、戀のきはみ、森に入る、聞くや戀人、今こそは、「こそこの今」、山林に自由存す、獨坐、秋の月影、山中、沖の小島、故郷の翁に與ふ、戀の清水、風の音、山の聲。松岡國男——野邊のゆきき(夕ぐれに眠のさめし時、年へし故郷、野末の雲、ある時二首、海の邊にゆきて、友なし千鳥、磯間の宿、人に別るとて、思ひ出でて、鶯がうたひし、美しき姫に若者がいひし、花陰の歌、都の塵、園の清水二首、月の夜三首、母なき君二首、夕のみちに、野の家、小百合の花、一夜二首、ある折に、曉やみ、はかなきわ

かれ二首。田山花袋——わが影(山かげ、春の夜、ある夜、妹の君、君が姿、やみの夜、君をこひしは、雨の夜、眺望、朧月夜、君と我、まごころ、野遊、あるとき、わが心、涙、あら磯、月の夜、なでしこ、松原、孤岩、あら波、よき日、影、ゆふ月、君が名、琴の音、わが住む里、孤燈、旅にありける夜、わが世、雲のみだれ、林の奥、夕月夜、友と別るとして、昔の友、なき人をおもふ二首、ともし火、ゆめ、をぐらき墓。太田玉茗——花ふぶき(歸らぬ父、生と死、闇の小川、我星、墳墓、妻とふ鹿、うたゝね、初夢、某夫人へ、涙、朧月夜、文反古、明治二十七年十一月弟正雄の柩を送りて、同じく二十九年十月兄岩男を失ひければ、稚きものよ、けふより姉、鯛牛、汽車の窓、替嬢、宇之が舟、除夜の兒、我もむかしは、年の暮、坊や、あさがほ、めをと島、老婆と雛祭、尼法師。嵯峨の山人——いつ真で草(山蔭の翁、厭ふ浮世、白髮翁、荒野の曙、をさなご、かたみ、述懐、露を哀む、もの思ひ。宮崎湖處子——水の

おとづれ（失題、讚美歌、あるとき、小川、里の子、水聲、忘れ水、摘草、春のゆふべ、菖蒲、仲秋、葦、薄、枯野、浮世美人、警矯飾、厭戦闘、雲雀、牽牛花、雪中、おそよ、疎屋、釣翁、君と吾、わかるゝ際にのぞみては、寂寞）。備考。各家の集には、各家の序がついて居る。或は詩界に對する感想を述べ、詩形を説き、或は作詩の苦心を語り、格調をあげつらひ、或は自己の所思を陳ずる等參考に資すべきものが多い。松岡國男は、今の法制局參事官法學士柳田國男であるが、當時は純抒情の詩人として望を囑されただけあつて最も佳作に富んで居る。獨歩の作には散文詩もあれば、口語體の詩もあり、總て研究的態度を以て進んで居る。なほ注意すべきは玉茗の「宇之が舟」、湖處子の「雲雀」など云ふ叙事的抒情詩だらう。世に民友社派の詩と云つて持て囃されたのは、即ちこの集の人々の作である。

▲若菜集

島崎春樹

早稲村

古藤庵無聲

今中四四四

小説の自伝

著者 嶋崎藤村。名は春樹。明治五年春、信濃國木曾妻籠に生る。明治學院に學び、明治女學校、東北學院、小諸中學校などに教鞭を執つたことがある。明治二十六年、古藤庵無聲と名乗つて『文學界』に現はれ、「琵琶法師」「茶のけむり」「朱門のうれひ」といふ劇詩を試み、次いで新體詩に筆を染めた。『若菜集』によつて名を成したが、今は小説家として立ち、『破戒』『綠葉集』『春』などを公にした。

出版 明治三十年八月。四六版、百九十六頁。中村不折の挿畫二十五葉。

目次 おえふ。おきぬ。おさよ。おくめ。おつた。おさく。明星。草枕。潮音。

春の歌。新曉。若水。春の歌。佐保姫。春の曲。醉歌。二つの聲。白壁。四つの袖。暗香。蓮花舟。葡萄の樹のかけ。高樓。天馬。哀歌。母を葬るの歌。梭の音。かもめ。流星。夏の夜。晝の夢。東西南北。懷古。秋の歌。初戀。狐のわざ。相思。一得一失。傘のうち。えにし。知るや君。秋風の歌。雲のゆくへ。

逃げ水。月光。強敵。別離。望郷。葡萄栗鼠の木彫を觀て。鷄。深林の逍遙。
 備考 明治二十九年ニナニナの秋より三十年ニナニナの春にかけての作で、『文學界』『帝國文學』などに載せたのを收めたものだ。新聲調を以て熱烈なる戀愛を歌ひ、崇高なる自然を賦したので、時人は其若やかな句に酔ひ、高韻清致に魂を奪はれて了つた。中でも、「おえふ」「天馬」「哀歌」「鷄」「深林の逍遙」は、傑出して居るとの評であつた。用語の雅醇、修辭の新工夫に於て獨特の妙を發揮してあるが、唯惜むべきは、假名遣ひのあることである。併し、その假名遣ひの如きは所謂白璧の微瑕で、詩壇の面目を一新した此集の輕重を問ふには足りなからう。

▲一葉舟

著者 嶋崎藤村
 出版 明治三十一年六月。四六版、二百頁。中村不折の挿書十八葉。
 性質 詩文集である。詩五篇、文九篇。

目次 春やいづこに。鷺の歌。銀河。白磁花瓶の賦。きりくす。
 備考 詩の方の扉には「おちば」と題し、文の方の扉には「ながれみづ」と題してある。茲には、文の目次をあげない。「鷺の歌」「白磁花瓶の賦」は好評であつた。假名ちがひの多いのが目立つ。
どうして五ねだるゝ 鷺子もたゞトキを殺す

▲夏草

著者 嶋崎藤村。
 出版 明治三十一年十二月。四六版、百八十七頁。下村觀山、横山大觀、菱田春草、西郷孤月、山田敬中、寺崎廣業の挿書六葉。
 目次 晩春の別離。曉の誕生。終焉の夕。月光五首。うぐひす。かりがね。新潮、わすれ草を讀みて。高山に登りて遠く望むの歌。二つの泉。天の河二首。落梅。婚姻の祝の歌（其一、花よめを迎ふるのうた。其二、さかもりのうた）。農夫（序、上の卷、下の卷）。

備考 一夏の作としては非常の努力であつた。「晩春の別離」以下二篇には藝術の愛慕を抒べ、「新潮」と「農夫」とには實際的生活を歌つて居る。渠の詩風は一轉し、再轉したのである。

▲天地有情 (是てエリナキ)

著者 土井晚翠。文學士。名は林吉。明治四年十月、仙臺市大町に生る。立町小學校時代から秀才を以て、大に望を囑せられて居た。第二高等中學校より帝國大學文科大學に進み、英文學科を卒へた。三十四年夏海外に赴き、英國の倫敦、獨逸の萊府、佛國の巴里の諸大學に遊び、南歐の觀光を了へて、三十八年の秋歸朝した。著書は、詩集の外カーライルの『英雄崇拜論』の譯がある。今は第二高等學校教授兼仙臺高等工學學校講師である。夫人、名は八枝子、東京音樂學校の出身で、琴瑟よく相和して居る。

出版 明治三十二年四月。菊半截、百八十二頁、附録二十七頁。

今柳子

▲風月萬象

備考 集の名は「暮鐘」の一句から取つたのである。「希望」「萬有と詩人」「暮鐘」等の冥想的抒情詩や、「馬前の夢」「星落秋風五丈原」等の叙事的抒情詩は、頗る世の注視する所となり、殊に「暮鐘」は絶唱との評があつた。全集悉く七五調で、句讀點には餘り注意を拂つて居ないやうである。附録にはカーライル、セレイ、ジョージ・サン、エマルソン、ユーゴー五家の詩論若くは詩人論の抄譯が載つて居る。

今柳子
刊行の
期に
掲載
せらる

目次 希望。雲の歌。星と花。鶯。萬有と詩人。哀歌。海棠。無題。詩人。夕の思。岸邊の櫻。花一枝。夢。夏の歌。光。月と戀。夕の星。墓上の花。暗と眠。廣瀬川。籠鳥の感。馬前の夢。花と星。浮世の戀。登高。夜。小兒。赤壁圖に題す。夏の河。青葉城。別の袖に。人の世。紅葉青山水急流。枯柳。造化妙工。靜夜吟。哀樂。星落秋風五丈原。夕の磯。暮鐘。 (是てエリナキ)

詩集解題

著者 兒玉花外。山本露葉。山田枯柳。

花外、名は傳八。明治七年七月七日、山口縣三隅村に生る。同志社、東華學校、札幌農學校、東京專門學校等に學んだが、何れも半途にしてよした。福井に赴いて新聞記者をやつたこともあれば、京都に煙草店を開いたこともある。多感の詩人で、盃を嚙んで泣くことすらあると云ふ。弟の星人も亦、詩を作ると云ふ。

露葉、名は三郎、山本義上の男である。明治十二年二月、東京に生れ、慶應義塾、東京專門學校等に學んだ。今は父の資産を継ぎ、閑に居て詩を賦し、小説にも筆を染めて居る。

出版 明治三十二年六月。四六版、「麥笛」八十三頁、「柳影集」七十六頁、「葡萄の葉かげ」九十二頁。挿畫七葉。

目次 花外——鶏の歌。燕。森のさすらひ。屠牛場。蛇。猫を捨つる哀歌。翁の

兒玉傳八
山本露葉

山本三郎
多感露葉

そんな姿をなつかしく

さいね

悔悟。巨鐘。野犬。墳墓を撫して。憐なる鼠に。蛇のつぶやき。別離。枯柳——
葦船。杜陵八景。十字架。硯賦。河水。別離。都を出づる歌。卒業生に寄する歌。露葉——ふだうの葉かげ。流星。吹笛餘韻。蟹が子に寄するの樂歌。哀歌。元旦の歌。玉椿。戀。夢。友に別るとして。夕つつ。荒磯。あるとき。鶏の歌。慰藉。

▲暮笛集

著者 薄田泣菫。名は淳介。明治十年四月七日、備中國淺口郡連嶋村に生る。小學を卒へてから岡山縣の中學に入つた。その二年生の時であつたさうだが、非常に酷な採點をやる數學教師某が子を擧げたので、一つ御祝をやらうぢやないかと云ふので同志七人と謀つて、三間の麻繩に水引をかけ過激な文言を添へて贈呈した。夫れで以て教師の激怒を買ひ、遂に停學されて了つた。上京後は上野圖書館に通つて獨學したと云ふ。明治三十三年、大坂の『小天地』の主筆と

薄田泣菫
多感露葉
山本三郎

詩集解題

なつて筆を揮つたが、同志癡刊後は居を京都に卜し、山紫水明の境に歌想を練つて居る。夫人の名は秀子、姓は市川、紅桃女史と稱し、琴曲もやれば短歌も作るさうである。

出版 明治三十二年十一月。四六形横綴本、百六十二頁。赤松麟作の挿畫八葉。

目次 詩のなやみ。鶴鴿。冬の歌。古鏡賦。虎が雨。村娘。暮春の賦。鶴鴿の歌。

兄と妹。大原女。盃賦。絶句十九篇（一、山雀。二、獲物。三、琥珀。四、雛祭。五、秋懷。六、雲。七、蟋蟀。八、星。九、鐘。十、鬢の毛。十一、紅涙。十二、江戸河にて。十三、玉腕。十四、紅絹袖。十五、螢。十六、蟋蟀。十七、夕。十八、眞珠。十九、桐葉。尼が紅。遊子。巖頭に立ちて。春の夜。關山曲。旅客に與ふ。壁にそめたる。鄙ぶり。ふなうた。蛩少女。粉屋の女房。娘をかしや。燕の賦。百合花。秋の歌。木曾川にて。琵琶湖にて。加古河にて。楫保河にて。華燭賦。

備考 可憐なる情操を歌ひたる點に於て、技巧の點に於て、はた格調の舊套を脱したる點に於て、當時詩壇の視聽を動かしした詩集で、渠の詩名を高からしめたものである。

▲夜濤集

著者 高安月郊。名は三郎。明治二年二月十六日、大坂市瓦町に生る。家は代々醫を業として居つたので、渠も醫を學ぶべく十三歳の頃東京に出たが、當時盛んであつた自由思想に感じて政治學に轉じ、更に人生に疑を起して哲學を學び、遂に文學に入つて了つた。明治二十二年の秋故あつて京都黒谷の僧房に閑居し、その冬故郷に歸つて或朝不圖「舊都の秋」と云ふ抒情詩を作つた。この處女作を出して後、二十三年には小説「天無情」を作り、二十五年にはイブセンの社會劇「人形の家」、「社會の敵」及びドストイェフスキイの「損害と侮辱」を譯した。二十七年自ら癡嫡を求めて家を出でて京都に移り、二十九年東京に移つて

高安月郊

詩集解題

「公曉」「遠藤武者」「真田幸村」などを公にしたが時に合はず、窮迫して三十一年東海道を下り中國九州に漂泊したが、遂に復京都に入り茲に止まる事となつたさうだ。三十五年「月照」を作りセクスピアの「リヤア」を翻案して京都の南座に上せ、次で「大鹽平八郎」を夷谷座と翌年大坂の辨天座に、「江戸城明渡」を東京の明治座宮戸座に三十八年大坂の角座に上せ、同年ユーゴの「ミゼラブル」を翻案して大坂の朝日座に、「盆踊都風流」と「銀嵐」を京都の明治座に、「櫻時雨」を南座と翌春辨天座に、更に淨瑠璃に作つて大坂の堀江座に、「嵯峨の露」を中座に、四十年「吉田寅次郎」の一部を新富座に上せ、劇界の爲に力を盡して居り、又、同志社大學の講師もやつて居る。

出版 明治三十三年十二月。菊版百十二頁。

目次 招魂賦。李青蓮。大雅堂。天狗舞。浪と童と。嚴島。三田尻。千代の松原。大宰府。熊本城。耶馬溪。内海行。高野山。和歌浦。都の歌。三十六峰。落瓦

賦。嵯峨野。鬮髀盃。天馬賦。

▲無絃弓

著者 河井醉茗。名は幸三郎。明治七年五月七日、堺市北旅籠町六番邸に生る。『少年文庫』時代から、太田玉茗と共に名を知られ、『文庫』時代には既に新體詩の選者となつた。明治三十四年三月に家を擧げて上京し、『文庫』の編輯にたづさはり乍ら、早稻田大學に學んだが、中途でよして了つた。明治四十年、『文庫』と絶縁して、新に詩草社を起した。今、『女子文壇』の主筆をして居る。肉類も餘り好まぬさうだが、果物は一切食はない。「ちや、醉茗さんは何を食つて生きて居るでせうね。」と云つた、青年詩人もあつた。

出版 明治三十四年一月。四六大長方形本、百四十四頁。一條成美の挿畫六葉。

目次 妹。胡蝶の墓。紅芙蓉。希臘半島。湯の香。蛙の聲。いさよふ雲。行く春。こざくら。大雪小雪。みづわか草。やほじほ。月のはえ。ちぬの海。露の玉章。

詩集解題

女子文壇主筆、
今しや四十五才

河井幸三郎
の醉茗

夕の聲。朝の聲。春風怨。小羊。漫吟。戀の神。曙の里。經木流し。天女の聲。山水秀。自然の文。星の光。冴ゆる夜。花すみれ。あじろ守。浦なれ衣。残る心。罪の終。征矢獵矢（春月、山、女、戀、其姉は、磯づたひ、露と薔薇、夢の別路、山の宿、寺、袖しぐれ、京、春、海酸漿、紅き薔薇白き薔薇）。

備考 七七調が一篇あるが、他は悉く七五調だ。『文庫』に載つた作が多きを占めて居る。

▲曉鐘

著者 土井晚翠。

出版 明治三十四年五月。菊版、百三十一頁。

目次 萬里長城の歌。花上の露。月と水。惆悵吟。夏の夜。暗と眠。秋興八首。岸上の終焉。白桃花。白梅。平和。弔吉國樟堂。破船。天上。無限。黑龍江上の悲劇。登高賦。臙夜。清怨。夕の姿。富嶽の歌。〔附録〕汀上の逍遙。深淵。

●故郷の墳墓。

備考 時事問題に觸れた作は何れも長篇で、他の短篇に比して著しく振つて居る。『天地有情』よりは格調も整ひ、措辭も圓熟して來たが、漢語が非常に多くなつたとの評があつた。中に就て見るべきは「萬里長城の歌」「黑龍江上の悲劇」「富山嶽の歌」等の長篇で、「弔吉國樟堂」は弔詩としては寧ろ失敗の作であつた。「清怨」は『野茨集』の「清怨」と同じく、高山樗牛を戀ひし女を歌つたものである。

▲小百合集

著者 吉野臥城。

出版 明治三十四年七月。菊半截、百十六頁。

目次 幻影。秋の歌。つきぬ恨。冬の歌。花の歌。愛猫を葬る歌。病。早春の歌。鬼の歌。逢隈川邊。晝の夢。狂犬。病夢。訣別の歌。雷の歌。蜘蛛。星の歌。

露じも

八〇

廣瀬川（序、其一、其二、其三、其四）。備考 明治二十八年より三十二年の秋までの作で、多くは『東京獨立雜誌』に載つたものだ。社會主義的思想が仄見える。

▲露じも

著者 岩野泡鳴。名は美衛。明治六年一月、淡路國洲本町の海岸に生れたと聞けば、その號の因つて來る所も大方想像がつく。始め明治學院に學び、専修學校を卒へて後、東北學院に學び、奇行頗る多かつた。明治二十四年頃から詩作を始めたさうだが、雜誌にぼつ／＼名の見えて來たのは二十七年頃からである。戀愛の煩悶が、だいぶ其少年時代を苦しめたらしい。『神秘的半獸主義』を著して以來、氣焔追々と高くなり、相手嫌はず議論を闘はして居る。勝氣の強い男だ。先年大倉商業學校講師をした居たが、之を辭してよりは専心著作に従事して居る。著書は前記の外、『新體作法』『海堡技師』『闇の杯盤』などである。

山石野美衛
泡鳴

泡鳴

ハハ月夜行
無天詩窟
菊半截
内容
秋の蜻蛉
十音詩
寝釋迦の渡
西行庵
秋風
盛春の歌
春の思
夏野にて
茄子賣
常世にも我はあり
磐城の山中にて
鶯の歌
乙女
わが稚き弟を殘して母の身
まかりし時
失戀の人に代りて詠める
無花果の落つるを見て世の終を觀ず
移り行く世
某嬢に贈る
猪苗代湖
水島灘を渡りて詠める
朝顔
岸の藤波
こがねの指輪
浪子の戀
月夜物語
小督
吾妻山雜詠
（山を望みて、高湯にて、細谷川、烟の柱、莓の露、外國人に別る）
松島雜詠
（富山に登りて、詩人と鶯）
蟻に寄す
船頭唄
硯の水のこほれる時
君は明日より
野邊の夕暮
十

露じも

八一

詩集解題

字架のかげ。

備考 「寢釋迦の渡」は集中の最長篇だ。十音詩は押韻してあるが、大分苦しいやり方で、「からく」だの、「はらく」だの、「秋骨」だの、「ぼちやく」だの云ふのでやつと韻を踏んである。十七字詩は至つて幼稚なものだ。

▲落梅集

著者 嶋崎藤村。

出版 明治三十四年八月。四六版、二百五十四頁。中村不折の挿畫十二葉。

性質 詩文集である。詩二十四篇、樂譜一篇。文四篇。

目次 小諸なる古城のほとり。労働雜詠（其一、朝。其二、晝。其三、暮）。壯年の歌（其一、埋木。其二、告別。其三、佯狂。其四、草枕。其五、幻境。其六、邂逅）。悪夢。黄昏。綠蔭。罪。胸より胸に（其一、めぐり逢ふ君やいくたび。其二、あゝさなり君のごとくに。其三、思より思をたどり。其四、吾戀は河邊

著者
嶋崎藤村

三十一
以後
小説界

詩集解題

備考 文の目次はあげない。はしがきに「わが口唇は千曲川の蘆の如し。その葉は風に鳴りそよぎてあやしきしらべに通ふめるごとく、わが口唇もまた震ひ動きて朝暮の思を傳ふるまでなり。」とある。信州に隱退した時の作だ。情熱は漸く冷めて、實社會を寫さうとするに至つた。多くはこれ朝暮の思を傳へたものであらう。「寂寥」と「常盤樹」とは集中の佳作だとの評があつた。渠はこの集を最後として、遂に小説界に去つて了つた。

▲ゆく春

著者 薄田泣菫。

ゆく春

出版 明治三十四年十月。菊半截、二百二十二頁。滿谷國四郎の挿畫四葉。

目次 牧笛。夕暮海邊に立ちて。夕の歌。暗夜樹蔭にたちて。鐵幹に酬ゆ。小鼠に與ふ。低唱。さまよひ。夢路の關守。沙彌がうたへる歌。小狐。泉。桃園。惡縁。俗人の歎。遣愁。遠情。遣憤九首（一、狐に巢なしと誰かいふや。二、亟相何とて無禮なるや。三、粘土の子凍りて息は無きに。四、願ふは清狂市にゆきて。五、曉若もの鋤をふりて。六、夕暮賊の男門にたちて。七、偽善者來れり蠟を塗りて。八、昨夕は山田に水をそそぎ。九、夕飯のむしろに瓶子そへて。罪。うたげ。戀の矢。夏の白晝。謎。歡聲。あゝ杜國（一、類なき似而非者チエンバレンの。二、不毛國拓いて百合を植うる。三、議會に立ちたるクルウゲルの。四、この國富める故を以て。五、一語に答へて足りぬべくば。六、死の手に延かれて去るといふも。七、白髯丈あるジュウベルトの。八、大風船吹く海を超えて。九、海神願はく肩を垂れて。十、地圖ひく人の子心あらば。

巖頭沈吟（一、なげきの巻。二、のろひの巻）。破甕の賦。鶯と蝙蝠。郭公の賦。野にたちて。金絲雀を放つ歌。『南畝の人』の小引。石彫獅子の賦。

備考 序に「『ゆく春』はまことに野にふさはしき調のみ。唯歌うて感情をいつはらざりしを喜ぶなり。」とある。長篇は概ね七五調だが、「小狐」より「あゝ杜國」までの絶句は八六調だ。「破甕賦」鶯と蝙蝠などは六五乃至七四調で、「郭公の賦」は六五、七四、八六調の交錯だ。之を以て見るも、渠の格調に苦心したことが分る。戀愛の詩が少くなつて、「遣憤」や「あゝ杜國」の如き作が加はり、「石彫獅子の賦」の如き藝術を嘆美する仕のあるものも注意を値する。

▲ハイネの詩

譯者 尾上柴舟。文學士。名は八郎。明治九年八月、美作國津山町に生る。帝國大學文科の出身だ。大學時代に久保猪之吉、服部躬治等といかづち會を起して、和歌の革新を唱へ、今は車前草社を起して、之が主幹となつて居る。至つて和

柴舟
ハイネ

ハイネの詩

歌に器用な人で、曾て宮中御歌會始の勅題の預選歌に入つたこともある。東京女子高等師範學校教授で、『銀鈴』『金帆』『静夜』『紫式部と清少納言』などの著書がある。

出版 明治三十四年十一月。四六長方形本、七十五頁。附録三十頁。肖像一葉。

目次 おのが涙。おのが心。はてなき空。歌のつばさ。てる日の影。菩提樹の花。小さき眼。荒れわたりたる。かがやきわたる。照る日かがやく。女が麗しき。その光ある。暗のわが世に。おのが心。涙おさへて。澄み上りたる。灰色なせる。あらしは鳴りつ。君が門邊。海原とほく。波路の末。深きおもひ。年のゆき。清くゆかし。そのくれなる。もの恐ろしき。夜は來ぬ。死は冷やけき。わが戀人と。とく起きいでて。思ひ悩みて。父の御園。たのしき五月。千度八千たび。春の夜風。あられき眼。みどり色濃き。さか捲きおこる。心にながく。月影うけて。とく森かげに。黄金の光。今年の春。静けき磯。影ほのぐろく。

ハイネの詩

我をば君が。黒みわたれる。君がなしたる。鷗はなごて。わだのみ中に。
備考 全篇悉くなだらかな七五調である。缺點もあらうが、之より後に續出した譯詩集の前驅をなしたのであれば、相當の敬意を拂ふべきだ。確か四十年であつたと思ふ、この詩集を抱いて金華山沖に入水した女學生があつた。附録は「ハイネリツヒ・ハイネ評傳」が載つて居る。

▲草わかば

著者 蒲原有明。名は隼雄。明治八年三月十五日、東京市麴町區隼町八番地に生る。それで、此の名があるのださうな。父の郷里は九州で、有明海の附近だ。雅號は夫れから出て居る。東京府尋常中學校や國民英學會に學んだと云ふ。明治二十八年の頃、處女作を『落穂双紙』に出し、三十一年頃、『東京獨立雜誌』に一二の作を出したことがある。遊戯は圍球盤が得意で、座談に巧みである。
出版 明治三十五年一月。四六版、百頁。渡邊審也の挿畫二葉。

草わかば

草わかば

●目次 春の歌。日神頌歌。をとめごころ。新譜（其一、おもふに夢に。其二、野路よりひとり）。彩雲。春の野べ。戀ぐさ。君やわれや。牡蠣の殻。樹蔭。青野花草。枳殻。可憐小汀（鷗に寄する歌、菱の實とるは）。ゆふづつ。夕かげ。問ふをやめよ。夏愁。かたみの星。追憶。かすかに胸に。草莽蕪頌。高潮（曙のうた）。

●備考 多くは七五調で、たまに五七調と八六調のがある。「高潮」は集中の白眉であらう。

▲野茨集

●著者 吉野臥城。

●出版 明治三十五年二月。四六長方形本、百七十二頁。

●目次 詩狂。新秋の賦。暮秋の賦。雀。瑞鳳山。鼠の愁訴。荒村行。義人の聲。某氏に與ふる歌。悲む勿れ妹よ。圍炉裡の親子。小百合。朝露の歌。耶蘇降誕

祭。嵐の歌。新世紀の歌。土井晚翠君を送る歌。麥かり。清怨。愛宕山に登る歌。立秋吟。田園雜詠（其一、人に答ふ。其二、葡萄を贈られしを謝する歌。其三、美しき夢。其四、桐の葉裏に書きつけたる歌。其五、さらば）。回顧吟。朝顔。渾圓球上平和の曲。宮城野に立ちて。清風明月行。村の家。備考 凡例の中に「集中の多くは『東京獨立雜誌』『造士新聞』『小天地』『聖書之研究』『心の花』によりて既に世に公にせしもの」とある。七五調、五七調以外に八七調。散文詩などがある。細評は、當時の『小天地』に載つて居る。

▲うもれ木

●著者 與謝野鐵幹。

●出版 明治三十五年十二月。菊半截、二百六十二頁。藤島武二の口繪一葉。

●性質 新體詩、短歌、美文、小説の合集である。小説三篇、美文二篇、短歌百餘首、新體詩十三篇。

詩集解題

半月集

九〇

●目次 黄金向日葵。若うして。磯づたひ。武藏野。朝戸。鶯籠。眠るは誰が子。
わがなげき。木かげ。烏瓜。悪源太。兔。枕上花瓶賦。
●備考 山路愛山の序文がある。

▲半月集

●著者 湯淺半月。ドクトル・オフ・フィロソフィー。名は吉郎。慶應元年、上野國安中に生れ、舊板倉藩士である。同志社を出てから、エール大學に學んだ。始め牧師をやつて居つたが、後に京都帝國大學の講師になつた。明治三十五年圖書館學研究のために英佛獨に遊び、翌年歸朝し、現に京都府立圖書館長をやつて居る。渠は何れかと云へば樂天家の方で、曾て牧師をやつて居た時、或日の午後四時に神戸で説教する約があつた。四時と云ふ約であつたにも拘はらず京都を悠然として出たのが丁度その時刻で、夫れから神戸に赴く途中大阪に下車して丁ひ、翌日のこゝと神戸の教會に著いたさうな。又、平曲は藤村檢校の門

湯淺半月
子半月

に學んだだけあつて堪能なさうだが、歐州遊學中之を巴里のまん中で獨奏して行人を驚かしたと云ふ話もある。實兄次郎の夫人は蘇峯の姉。その實兄の子は一郎と云つて、油畫家である。

●出版 明治三十五年八月。四六形細長本、二百十九頁。湯淺一郎の口繪一葉、大

●西祝の手翰一葉。

●目次 天地初發。黄金門。神子と魔王。七雷。大極殿。百猿舞。斥候兵。筆力。

●君が代。天長節。秋田家。新婚旅。天然。松と藤。菊。聖誕祭。洪水。戀。愛

●犬。山墓。古英雄。

●備考 「天地初發」は明治二十六年一月の『國民の友』に載つた作である。當時『文學界』では傑れた作だと云つて居た。

▲透谷全集

●著者 北村透谷。名は門太郎。明治元年の生れである。十四年父母と共に東京に

透谷全集

九一

北村門太郎
透谷全集

詩集解題

移つて泰明學校に學び、同年十二月小學校の課程を卒へた。後、岡千仞の私塾に遊び、共慣義塾にも入つたが、皆不愉快を感じてよして了ひ、十六年三月に東京専門學校に入學した。當時、渠の燃ゆるが如き野心は政治界に打つて出でんとして躡き、商賈とならんとして能はず、遂に文學者として立たんとするに至つたのである。二十二年始めて「楚囚の詩」を作り、二十四年「蓬萊曲」を出したが未だ世の認める所とはならなかつたらしい。二十六年一月「文學界」を發刊し、「富嶽の詩神を想ふ」を始めとして「内部生命論」「桂川を評して情死に及ぶ」等の評論及び新體詩を續々發表して文界の一勢力となつた。が、惜しいかな、渠の認められた時は渠の悲惨の最後を遂げるの時であつた。夫人は、石坂昌孝の女、名は美那子。一人の遺子がある。渠の逝去した年齢は二十七歳であつた。

出版 明治三十五年十月。四六版、七百九十八頁。肖像一葉、筆蹟二葉、丸山古

香の挿畫七葉。

性質 評論、小説、新體詩、短歌、俳句、戯曲、日記等を蒐めたものだ。新體詩は十一篇ある。

目次 ゆきだをれ。ほたる。蝶のゆくへ。雙蝶のわかれ。眠れる蝶。露のいのち。鬮舞。彈琴。みゝすのうた。蓬萊曲。楚囚の詩。

備考 渠の歿後『透谷集』を刊行したが、殆ど絶版同様になつたので、更に増補して刊行したのだ。編者は星野天知、島崎藤村、平田禿木、戸川秋骨の四人で、四人の序があり、戸川殘花の跋がある。「蓬萊曲」と「楚囚の詩」の二雄篇は、散文詩に近いものだが、當時にあつては頗る珍とすべきものであつた。

▲日本國歌

著者 平木白星。名は照雄。明治九年三月三日、上總國市原郡姉ヶ崎村に生る。東京英語學校から、進んで高等中學校に入つたが、幾許ならずして家事上の都

平木照雄
白星
詩集解題

あ、不遇！
可憐！

詩集解題

合で退學して了つた。遞信省の屬官を勤め乍ら、傍ら詩作を試みて居る。著書は『心中おさよ新七』『耶蘇の戀』『釋迦』などである。

出版 明治三十六年二月。四六版、百二十頁。附録三十頁。

目次 日本國歌。亞細亞。フランチェスカ。オフエリア。ロウレライ。西伯利亞。關のうち。全地球圖を展べて。新春。荆棘冠。朝のいましめ。戀の手ぶれ。ヴィ

クトリア。海のことは。アギナルド。薛錦琴。大光明に對して。機おり唄。圖

南の篇。望北の歌。處世の詩〔附録〕伊弉諾いざなみ。

備考 こけおどしの詩が多いとの評があつた。併し格調の雄健なるは晚翠と比肩

すべきであらう。七七調と八八調とが得意らしい。俗受のよかつたのは「處世

の詩」で、詩界の注目を惹いたのは「機おり唄」と「伊弉諾いざなみ」の二篇

であつた。

春雪集

著者 高安月郊。

出版 明治三十六年四月。菊版百五十四頁。

性質 新體詩、短歌、俳句の合集である。短歌二十一首、俳句七十六句。

目次 佐保姫。不識庵。芳野賦。裾野。惜春詞。セレイを弔ふ。杜少陵。雪行者

詞。明月。淀川。誰が文。濱邊の孟蘭盆。烟賦。三樹雜詩十首。嵐山の奥にて。

蟬の小川。應天門。西行庵。金福寺。詩仙堂。曾我蕭白。海雪賦。雜詩。

備考 『夜濤集』と同じく叙事的抒情詩が多く、格調は散文に近い交錯調が多い。

情熱は乏しいが、脱俗な處がある。短歌と俳句とは大したものではない。

獨絃哀歌

著者 蒲原有明。

出版 明治三十六年五月。四六版、百四頁。山下幽香の挿畫四葉。

目次 獨絃哀歌（一、あだならまし。二、聖菜園。三、薔薇のおもへる。四、別

詩集解題

離。五、靜かに今見よ。六、浮世の戀。七、よきしほ。八、蓮華幻境。九、草やま。十、君も過ぎぬ。十一、頼るは愛よ。十二、同。十三、同。十四、運命。十五、天平の面影。明星〔キイツ〕。戀のながめ〔ロセツテイ〕。希望〔ロセツテイ〕。靈鳥の歌。佐太大神。新鶯曲。紫蘇。戀の園。歡樂。幻影。さいかし。星眸。小鳥。光の歌。名珠餘影（一、あひ日ぐるまや〔ブレエキ〕。二、述懷〔ランドル〕。三、そのかみ〔ロセツテイ〕。四、海邊の墓〔クリスチナ、ロセツテイ〕。獨語。

備考 渠の第二詩集である。その例言に「曾て『太陽』『明星』其他二三の雑誌に載せて公にしたるものなり、ここに或は數句或は數節改削して出せり。詩形に就ては多少の考慮を費せり、されど之を以て故らに異を樹てむとするにはあらず。」とある。「獨絃哀歌」の如きは格調の工夫に於て新機軸を出し、神秘熱烈の憧憬を披瀝し、又美と愛とに對する渴仰を以て貫いて居るとの評があつた。夢

幻的の幽情を傳へ、象徴的の趣致を帯びて居る所は、殊に注目すべき點である。詩の技巧と云ふことも、この頃から研究の歩を進めて來た。當時、譯詩はよく原詩の風韻を傳へたと云つて、評判がよかつたやうに思ふ。

▲花外詩集

著者 兒玉花外。

出版 明治三十七年二月。四六版、七十九頁。附録百三十七頁。

目次 波濤を望みて。蝶賣娘。平民の屍。斷腸。故園。英雄の碑。白菊に。雲に與ふ。朝顔に對して。葡萄酒。暮鴉。詩人の世。友に返す。紅葉。月と吾と。海濤。山茶花。夕陽。闇中田鼠に告ぐる歌。螢を放ちやりて。望と別るる歌。花と人生。戀しの雲。血、涙、心。雨雲。馬上哀吟。『長劍短刀』序詩。健腕。梅花。山上感吟。

備考 渠、曩に金尾文淵堂より『社會主義詩集』を出して、政府者の忌憚に觸れ

毒草

九八

發賣を禁止された。附録の「同情録」は、即ち渠の知友等が渠に寄せた慰藉の辭である。「闇中田鼠に告ぐる歌」は『帝國文學』に出で、「馬上哀吟」は『白百合』に出で、共に多少の好評を博したものだ。

▲毒草

著者 與謝野鐵幹。與謝野晶子。

出版 明治三十七年五月。菊半截大方形本、三百五頁。藤島武二の挿畫四葉。

性質 新體詩、短歌、美文、小説の合集である。

目次 鐵幹——哀歌。おもひで、清水詣。山寨。舊人。秋の夜。鳴鏑。あざみ草。

搖籃。すだまの歌。禍鳥。旅順封鎖隊。嗚呼廣瀬中佐。晶子——つみびと。ひ

とち琴。橘媛。

備考 目次には短歌以下の掲げない。「哀歌」「清水詣」などが評判のよかつた方である。

▲藤村詩集

著者 嶋崎藤村。

出版 明治三十七年九月。四六版、五百三十四頁。和田英作の挿畫四葉。

備考 曩に公にした『若菜集』『夏草』及び『一葉舟』『落梅集』の詩だけを抜いて

合集にしたものだ。「琵琶法師」「茶のけむり」「朱門のうれひ」は兎も角、「與作が馬」や「四つの袖」だけは、加へた方が可かつたらうと思ふ。

▲夕潮

著者 岩野泡鳴。

出版 明治三十七年十月。四六版、百六十頁。青木繁の挿畫三葉。

目次 女護海嶋。世外の獨白（一、磯姫の曲。二、無性斗神。三、嫦娥のうらみ）。

海邊雜吟（上）（明暗、海のなげき、君を思ひて、わが影法師、いさり火、蟹に寄す、高岸沈思）海邊雜吟（下）（朝出船、朝の夢、あしたの神、秘戀、倉吉、夏

藤村詩集、夕潮

九九

の眞晝。前田林外君に、夕べの神、高安月郊君に、遠つ島根、御富士。静思(あ
あ世の歡樂、湖畔の静思、圓き石、鳥の歌、有木の別所、散り行く紅葉、天の
橋立にて、童と少女、秋吟、二の笛。豊太閤(戰捷の祈、清正望岳賦、明使追
放、蔚山城、秀吉薨去、小海祠)。

備考。文字の排列が、ちよと風變りだ。「磯姫の曲」と「ああ世の歡樂」とが勝れ
て居る。語格の誤謬や、假名ちがひや、不穩當な振假名やが尠からず有る。

▲夏花少女

著者。前田林外。名は儀作。元治元年三月三日、播磨國青山に生る。東京専門學
校普通英語科の出身だが、泰西學館にも學んだ相である。東京市神田區三崎町
に湊屋と云ふ屋號の下に紙屋を營んで居る。家事萬端から新聞切抜などまで細
君がやつて、良人の爲に盡して居る。渠の處女作は「明星」の第二號に現はれ、
次で散文詩「アメリカ彦造の墓」が出て、「源九郎義經」の合作などが公にされ

著者儀作
林外

たので多少世に知られて來た。何かの衝突で、與謝野鐵幹の東京新詩社と絶ち、
新に岩野泡鳴等と東京純文社を組織して『白百合』を發刊するに至つて、世の
注目する所となつた。後、岩野泡鳴と衝突し、又あやめ會の野口米次郎と衝突
し、詩壇に多少の波瀾を起した。恚くて渠は病氣の爲に五年の生命を保つて來
た『白百合』を廢刊し、靜かに詩作に耽り、小説にも筆を染めて居るが、『明治
文學史』を大成せんの志があると云ふ。早稲田大学文学部
出版。明治三十八年三月。四六版、百二十八頁。和田英作の挿畫四葉。
目次。なつばなをとめ(一)、黄金の扉。二、尼少女。三、魔怨。四、孔雀石。五、
妖魔の泉。五、黄金薔薇。八、妖女。九、魔障。十、海燕。十一、誰とな問ひ
そ。十二、夏の夜の夢。金翅鳥王の歌。アメリカ彦造の墓。翡翠折れ。夢のは
のほ。法鼓。極樂鳥の賦。腰越驛。白鶴に。壁畫孔雀の賦。
備考。『明星』『白百合』などに公にしたのを集めたのであることは云ふまでもな

詩集解題

い。非常に色彩の鮮かな詩で、濃艶華麗と云はんよりは、寧ろ妖艶の趣致に富んで居る。藝術の爲の藝術を歌つた「壁畫孔雀の賦」や、ソネット風の「なつばなをとめ」十二篇は、詩壇の目を惹いた。變挺な振假名や、まゝ假名遣のあるのは、一寸いやな感じを起させる。

▲二十五 絃

著者 薄田泣菫。

出版 明治三十八年五月。四六版、三百四頁。岡田三郎助の挿畫七葉。

目次 公孫樹下に立ちて。二月の一夜。五月の一夜。翡翠の賦。雷神の歌。金剛山の歌。天馳使の歌（一、なかだえ。二、あまくだり）。おもひで。おもかげ。をろの鏡。戀ごころ。戀のわな。貧しき浦里にして。白膠木もみぢ。もぐらもち。霜月の一日。霜月の一夕。花うり女。おもかげ。澤瀉の歌。ことうた（一、待心。二、海女。三、紅梅）。暮秋野徑の石にもたれて。神無月の一夜。神無月

大ら
一〇〇
二、ニ
年

詩集解題

の一日。虹の歌（一、旅人。二、獵人。三、情人。四、海人。五、農人。六、
隠者）。
備考 長篇の多いのが、目立つ。「公樹下に立ちて」「翡翠の賦」「金剛山の歌」「暮秋野徑の石にもたれて」などは、雑誌に公にされた當時の作とは思はれぬまでに改削し、甚しきに至つては格調までも更めたのがある。之が爲に以前よりは悪くなつたとの評が、一般に多かつた。詩題は植物に因んだのが多く、又「おもかげ」と云ふ同題が二つまである。七五調は柔婉繊細の極、平板に陥つた傾きがある。而して古語の復活や、新造語やに骨を折つて居る跡が歴々と見え「羽むけ強に」「柔らに」「弱げさ」「こそろと」「そよろと」「乾反葉」と云つたやうな語が人目を引き、青年文學雑誌の投書家等の作は靡然として泣菫風になり、大に歓迎されるに至つた。併し、渠の詩作に對する煩悶は、この頃から仄見えて來たやうに思はれる。

詩集解題

▲白玉姫

著者 薄田泣菫。

出版 明治三十八年六月。四六版、二百四頁。滿谷國四郎の挿畫五葉。

性質 散文と詩歌との二篇に分つ。詩歌は唯七篇だけである。

目次 鶯と大原女。冬木のささやき。花賣女。桂女の歌。戀ぐさ。はすみ。夏の日。

備考 皆、口語體の詩である。

▲塔影

著者 河井醉茗。

出版 明治三十八年六月。四六版、百七十頁。三宅克巳の口繪一葉。

目次 塔影。天の高市。庭燎。破れし譜。はてなき森。仙媛。のろひ。失せたる針。汀のいのち。つまづき。戀物語。白き矢。鵲。繪師の後ろに。沓手鳥。温

室の花。稚子の夢。薄暮。銀河を讀む。畫ける琴。菩提樹の蔭。山守。都の富士。吾心は暗し。萎める百合。眠らしめよ。雷鳥。歌。彼は家を失へり。詩災。茶汲女。寺の鐘。靈芝。夕立。葛城の神。歌の故郷。初めの謎。刻める名。野の歩み。都に歸りて。人影。巷の木枯。さむ空。都はづれ。晴たる家。斯る人に。萩の若葉。さくら。母が奏づる。内裡雛。林檎を植うる歌。行く春の海邊に立ちて。

▲悲戀悲歌

著者 岩野泡鳴。

出版 明治三十八年六月。四六版、百七十六頁。

目次 三界獨白(一、燭のゆらぎ。二、闇の横木。三、ときはの泉)。叙事三篇(血ぬれる鐘、田戸の海ぬし、高地の靈語)。旭日吟。叙情五篇(伊吹の螢、螢を踏みつぶせる折、雲翳々、ねむりは醒めたり)。短曲(一、海の響。二、無言の石。

三、自然のあゆみ。四、残る憂。五、細き指輪。六、夢の子。七、薫ゆる火か
 げ。八、とはの寂み。九、檜の木。十、小暗き道。十一、まとふ怖れ。十二、
 うれひ一筋。十三、時劫の森かげ。十四、いさゝ聲。十五、鍵を與へよ。十六、
 鏡を碎けよ。十七、蛇の河姥。十八、熱き真砂。十九、酒興。二十、悲哀の俘。
 廿一、苦悶の鎖。脱營兵。

備考 「三界獨白」と「短曲」中の數篇がよかつた。先づ渠の出世作と見てよから
 う。

▲鐵幹子

著者 與謝野鐵幹。

出版 明治三十八年七月。菊半截、二百三十四頁。

性質 新體詩、短歌、美文の合集なり。新體詩三十篇。

目次 みやすどころ。暮鐘。廻燈籠。舞妓君子。落花吹面。人を戀ふる歌。劍銘。

江上曲。古香。今様豪傑。咒咀。紅賣。短篇五題（月、萩、木犀、歸去來、女）。
 血寫歌。斷雁。晚秋の歌。白鼠の歌。疎狂。零丁。春の惱み。盆祭。雀の賦。
 豊臣秀吉。懊惱。三人旅。斷霞。小題大做（江上吟、女ごころ、七里が濱、長
 刀、今様詩人、小唄）。小百合。出頭没頭。鏡影（一、今ぞ我が手に。二、うま
 ざけ）。

備考 三十四年の五月版のは、四六版であつたと思ふ。

▲春鳥集

著者 蒲原有明。

出版 明治三十八年七月。四六版、百九十六頁。青木繁の挿畫二葉。

目次 日のおちぼ。静かにさめし魂の。朝なり。遺曲。五月露。今宵のあるじ。
 わがおもひ。銀杏樹。みなといり。繫縛。これに充てむ。秋。樂しや、さあれ。
 沙門「不淨」。君にさゝぐ。末世に。人は人として。姫の曲。緑のかげ。夢の花。

詩集解題

沈丁花。束の間なりき。宿命。あまりりす。夏がは。夢のむすめ。『海のさち』。琴天會に寄す。それゆゑに。魂の夜。誰かは心伏せざる。家根の草。譯詩三章〔エルレエヌ〕〔甘睡よ。丘、垣ね——。樹だちの額のうへ〕。夏まつり。鏽斧。

備考。明治三十六年の夏より三十八年までの作を收めてある。十一頁に渡る長文の自序がついて居る。その一節に曰く、「かの音節、格調、措辭、造語の新意に適はむことを求むると共に、邦語の制約を寛うして、近代の幽致を寓せ易からしめむとするは、詢に已み難きに出づ。これあるが爲に晦澁の譏を受くるは素よりわが甘んずる所なり。視聽等の諸官能は常に鮮かならざるべからず、生意を保たざるべからず。然らずは胸臆沈滞して、補綴の外、踏襲の外、あるは激勵呼號の外、遂に文學なからむとす。」「自然を識るは「我」を識るなり。譬へば「自然」は豹の斑にして、「我」は豹の瞳子の如きか。「自然」は死豹の皮にあらざれば徒らに讒席に敷き難く、「我」はまた冷然たる他が眼にあらざれば決して空

漠の見を容れず。「われ」に生き「自然」に輝きて、一箇の靈豹は詩天の苑に入らむとするなり。」と。當時の詩壇の覺醒を促した文で、批評は四方に起つて、同するもの、駁するもの、一時の盛觀を呈した。「日のおちば」「朝なり」「銀杏樹」「秋」樂しや、さあれ「沈丁花」「鏽斧」などは最も注目すべき作で、「みなといり」は頗る難解だとの評があつた作である。後に、著者も其詩中の「あだ矢こそ飛ばめ」は「死の矢……」と改めてたいと言つて居た。本邦象徴詩の先頭に立つべき詩集だ。細評は『明星』に載つて居る、就て見るべしだ。

▲小野のわかれ

著者。小山内薫。文學士。撫子と號す。明治十四年七月二十六日、廣島市大手町に生る。第一高等學校から東京帝國大學文科大學に入り、英文學科を卒業した。大學生時代には雑誌『七人』を發刊し、卒業後は眞砂座の座附作者となつたが、夫れもよして了ひ、四十年に至つて『新思潮』の主幹となり、「この雑誌は僕の

詩集解題

小野のわかれ

妻である。……更に言ふ。この雑誌は僕の脳髓である、僕の胃腑である、僕の心臓である——この雑誌は僕の生涯である。」と云つて、熱心に經營して居たが、翌年到頭廢刊した。『夢見草』の著あり。妹に、小説家がある。名は八千代、號は芹影。明治十六年生れた。今は畫家岡田三郎助の夫人である。

出版 明治三十八年九月雑誌『七人』の特別號として出で、四十年三月單行となる。菊版、百十八頁。全篇四號活字で刷つてある。之から、この刷り方が詩集の一流行とつた。併し、すつと以前に出た『新體梅花詩集』も四號活字刷であつた。

目次 虹。朝雲。君が憂。蚯蚓の歌。春宵。晚鐘。古城。小野のわかれ。狂人の歌へる秋の歌。弱き人。舟の歌。人形。鳥籠。月見草。よばへども。落葉歌。水葬。亡弟。うらみ顔。小鳥。悲しき朝。まよひ。川やなぎ。黒き影。いたくなせめそ。なげき。朽木。周行。さめがたき夢。おもかげ。繪すがた(一、戀

の泉。二、鳥にしあらば。三、車のひびき。月下白屋。

備考 「狂人の歌へる秋の歌」が、中でも勝れて居るやうだ。この集を讀むには、秋雨の夜が一番可いと誰やらが云つた。

▲海潮音

譯者 上田敏。文學士。柳村と號す。舊幕臣上田鋼二の男で。明治七年十月、静岡に生る。戸川秋骨、佐々醒雪等と共に、『文學界』によつて始めて文壇に出た。帝國大學文科大學英文科の出身で、東京高等師範學校教授兼東京帝國大學文科大學講師となり、後、京都帝國大學文科大學教授となつた。『みをつくし』『文藝論集』『最近海外文學』などの著があつて、重に翻譯をやつたり、海外文學紹介の勞を取つたりして居たが、近時新體詩の創作を試みるに至つた。明治四十年十一月、歐米觀光の途に上つた。以前は大に酒を呷つたが、今は慎んで居るさうな。言語應對は、その詩文の如く婉曲で名がある。

今の中野のわかれ

上野柳村、名敏

詩集解題

出版 明治三十八年十月。四六版、二百五十頁。表装の背の金字は自筆だ。

目次 燕の歌、聲曲〔ダンヌンチオ〕。眞晝、大饑餓、象〔ルコント・ドゥ・リイル〕。珊瑚礁、床、出征〔ホセ・マリヤ・デ・エレデイヤ〕。夢〔シュリ・プリュドン〕。信天翁、薄暮の曲、破鐘、人と海、梟〔ボドレエル〕。譬喩、よくみるゆめ、落葉〔エール・レエヌ〕。良心〔ギクトル・ユウゴオ〕。禮拜〔フランソア・コペエ〕。わすれなくさ〔キルヘルム・アレン〕。山のあなた〔カアル・ブッセ〕。春〔パウウル・バルシュ〕。秋〔オイゲン・クロアサン〕。わかれ〔ヘリベルタ・フォン・ポシンドル〕。水無月〔テオドル・ストルム〕。花のをとめ〔ハイネ〕。瞻望、出現、岩陰に、春の朝、至善〔ブラウニング〕。花くらべ〔シェイクスピア〕。花の教〔クリスティナ・ロセッティ〕。小曲、戀の玉座、春の貢〔ダンテ・ゲブリエル・ロセッティ〕。心も空に〔ダンテ・アリギエリ〕。鶯の歌、法の夕、水かひば、畏怖、火宅、時鐘〔エミール・エルハレン〕。黄昏〔ジョルジュ・ロオデンバッハ〕。銘文、愛の教、花冠〔アンリ・ドゥ・レ

ニエ〕。延びあくびせよ〔ギエン・グリフィン〕。伴奏〔アルペエル・サマン〕。賦〔ジャン・モレアス〕。嗟嘆〔マラルメ〕。白楊、故國、海のあなたの〔オオバネル〕。解悟〔アルトゥロ・グラアフ〕。篠懸、海光〔ダンヌンチオ〕。

備考 序に曰く「卷中收むる所の詩五十七章、詩家二十九人、伊太利亞に三人、英吉利に四人、獨逸に七人、プロヴンスに一人、而して佛蘭西には十四人の多きに達し、曩の高踏派と今の象徴派とに屬する者其大部を占む。高踏派の莊麗體を譯すに當りて、多く所謂七五調を基としたる詩形を用ゐ、象徴派の幽婉體を翻するに多少の變格を敢てしたるは、其各の原調に適合せしめむが爲なり云々」とある。象徴派の詩の譯は餘り拮据すぎるやうだ。我が詩壇の象徴詩の勃興には、本書の如きも與つて力があることを忘れてはならぬ。

ゆ く 雲

著者 兒玉花外。

詩集解題

ゆ く 雲

出版 明治三十九年一月。四六版、百五十一頁。

目次 糸車。雲髪。雪の家。米磨ぐ女。石わる子。秋の夜。河邊の嘆。支那パイ
ブ賣。少女と雀。血歌。同情。春野のうれひ。梅花。花賣女。小囚。孤憤吟。
犠牲。紡績工女。葡萄酒。星。袖はいとはじ。空塚賣。心は胸に。日向葵と人
生。森のさすらひ。雞の歌。墳墓を撫して。馬上哀吟。蝶賣娘。白菊に。闇中
田鼠に告ぐる歌。月と吾と。望と別るゝ歌。波濤を望みて。山茶花。雲に與ふ。
螢を放ちやりて。故園。血、涙、心。雨雲。戀しの雲。

備考 「森のさすらひ」以下二篇は『風月萬象』に載り、「馬上哀吟」以下十三篇
は『花外詩集』に收められて居る。卷末に著作年表を附してある。つまり此の
集は、渠の自選詩集と見るも可なりだ。

▲白羊宮

著者 薄田泣菫。

出版 明治三十九年五月。四六版、二百九十二頁。滿谷國四郎、鹿子木孟郎の挿

畫二葉。

目次 わがゆく海。あゝ大和にしあらましかば。魂の常井。ひとづま。冬の日。
零餘子。鶏の歌。望郷の歌。金星草の歌。夕聲。師走のひと日。妖魔『自我』。
日ざかり。笛の音。鴉の淨め。をとめごころ。忘れぬまみ。離別。香のさゝや
き。時のつぐのひ。美き名。牧のおもひで。くちづけ。大葉黃蘗。無花果。心
げさう。わかれ。幻なりき。月見草の歌へる。夢ざめしをり。海のおもひで。
はこやなぎ。難波うばら。白すみれ。都大路。希望。聖り心。新生。樹の間の
まぼろし。片かづら。忘れがたみ。枯薔薇。戀のものいみ。小木曾女の歌。夏
の朝。さざめ雪。烟。寂寥。隠り沼。江林。睡蓮の歌。海のはとりにて。知ら
ぬかなた。夕とどろき。涙の門をゆきすぎて。朝顔姫の嘆き。筑波紫。樂のす
ずろぎ。藝の許され。鈴蘭の歌。三の百合。雛罌粟。小雀と桂女。

備考 『二十五絃』より進んで該集に入り、象徴的傾向愈著しく、技巧殆んど圓熟の境に達し、夫れと共に活氣と生彩とは見ることが出来なくなつた。卷頭の「わがゆく海」は序とも見るべき詩で、慈悲と努力とを讃へて居る。「あゝ大和にしがあらしかば」望郷の歌。「鈴蘭の歌」「枯薔薇」などは何れも見るとべき作だ。細評及び其細評に答へた著者の異見は、當時の『明星』に載つて居る、參考の價值があると思ふ。又、注目すべきは、詩題のつけ方で、「妖魔」「自我」は有明の「沙門」「不淨」と似寄つて居るから先づ別として、「鴉の淨め」「樂のすすろぎ」「藝の許され」などは、未だ在來の詩題に見えなかつたものである。

▲東海遊子吟

著者 土井晚翠。

出版 明治三十九年六月。四六版、二百六頁。中村不折の挿畫七葉、ミロのエーナスの寫真一葉。

目次 あげぼの。松島。亞細亞大陸回顧の歌。瑞士。佛蘭西。土耳其。日本の女性。プルヂエ湖畔月夜の曲。アルノウ。フロートレンスの遠望。セイヌ江上の別離。タオルミナ希臘劇場古跡。カムバニヤの大野。司馬子長名山藏書歌。懷郷。『ノートルダム』。『ミロのエーナス』。哀歌。羅馬郊外にシエリーの墓を訪へる後モンテ・テタスチヨの丘に登りて。羅馬カンパニヤの『クオ・ワーデス』寺院。深夜。永劫の戀。『愁』。凱旋。ドナウ江上の吟。サレブ峯頭の吟。ライプチヒ郊外ナポレオン紀念碑。バイロン。歐羅巴大陸回顧の歌。〔附録〕光榮の追想。

備考 附録の一篇を除く外は、悉く歐洲留學中の作である。固有名詞の多きに驚くとの評が大分あつたやうに思ふ。以前の作に比べると格調の用意に於て多少異り、措辭にも大に注意を拂つて來たやうだが、却て之が爲に失敗したのもある。雄大高渾はどこまでも渠の特色である。

詩集解題

▲花妻

著者 前田林外。

出版 明治三十九年六月。四六版、百二十一頁。挿畫二葉。

目次 若き尼。孔雀の玉座。戀塚。白象の歌。毒は金杯より。雛遊び。あゆみを
とめて。多情多恨。我が死相。樂園追放。ふたへのかむり。杜鵑に。青雀。尼
の歌へる。破鏡鳥の賦。我が故郷。戀のわづらひ。悲嘆。愛の屍。

▲寢覺草

著者 高安月郊。

出版 明治三十九年六月。菊版、百九十頁。淺井忠の挿畫三葉。

性質 散文劇「嵯峨の露」、樂劇「後の羽衣」の外は、皆新體詩である。

目次 胡蝶軍。花賣。妻あらそひ。晝の夢。花の涙。夢のまこと。木連の一ひら。
芭蕉の葉。羅浮仙女の嘆。醍醐賦。親不知。姨捨山。桔梗原。飛雲辭。新盧遮

那佛賦。

備考 民謡詩風の「花賣」及び「羅浮仙女の嘆」は評判の作、他は餘り感服すべ
き作でないやうだ。

▲あやめ草

編者 野口米次郎。英詩人で、常に Yone Noguchi と署して居る。明治九年十二
月八日、尾張國海東郡津島町に生る。年少にして米國に赴き、詩人オーキン・ミ
ラーに師事した。歐米の詩壇に名を馳せて後、歸朝し、今は外國新聞の通信員
となつて居る外、慶應義塾文學部の講師をやつて居る。夫人は米國人である。

『東海より』『夏雲』『歸朝日記』『日本少女の米國日記』ミラーと合著の『劍と戀と
の日本』などを著した。あやめ會は渠の肝煎役で明治三十九年の春成立つたの
で、岩野泡鳴、ロールエンス・ビンヨン、ロールエンス・ハウスマン、土井晚翠、
トーマス・ハーデー、チャールス・ワールエン・スタグード、リュキス・モーリス

詩集解題

あやめ草

一一〇

卿、ルイス・イモジーン・グイネー、小山内薫、オーキン・ミラー、蒲原有明、河井醉茗、高安月郊、ダヌタン男爵夫人、上田敏、ウキリヤム・バトラー・イーツ、マリー・マクローネル・フエネロサ、前田林外、マデソン・カウエイン、ブリス・カーマン、フランク・ブトナム、兒玉花外、エデス・エム・トマス、山本露葉、アルフレッド・オースチン、アーサー・シモンズ、サザランド侯爵夫人、デヨセフキン・ブレンドン・ピーボデー、ジョン・ビー・タップ、メーネル夫人、平木白星、薄田泣菫等の日英米の詩人を網羅して居る。幾許ならずして同會に内訌起つて、遂に立消の姿となつて了つた。

出版 明治三十九年六月。菊版、新體詩九十二頁、英詩二十一頁。中澤弘光の挿

畫一葉、外に挿畫一葉、肖像一葉、

目次 海音獨白、闇の盃盤、寄する戀浪、死獸（岩野泡鳴）。冬の夢、夏の戀（平木白星）。めぐみの影、追憶（蒲原有明）。印度哀歌（前田林外）。雲の座（兒玉花

外）。夏の朝（薄田泣菫）。孤兒（小山内薫）。汽車に乗りて、ちやるめら（上田敏）。備考 英詩は目次より省いた。「新體詩と英詩とを併載するのは無意味だ、眞に趣味の普及を謀るならば、英詩を日本譯し、新體詩を英譯して併載すべきだ、かくてこそ忠實なやり方だ」との評が多かつた。「ちやるめら」は、注目すべき作である。

▲泡鳴詩集

著者 岩野泡鳴。

出版 明治三十九年十一月。四六版、三百三十八頁。

備考 曩に公にした『夕潮』と『悲戀悲歌』との合集だ。はしがきの中に「他日、日本文學史を編するもの出でん時、必ず、明治聖代に於て、國家の根本生命を掌握せる活靈ありしと雖も、之を知得する識者少なかりしを笑ふらん。」と云ふ一節がある。

泡鳴詩集

一一一

詩集解題

▲豊旗雲

編者 野口米次郎。

出版 明治三十九年十二月。菊版、新體詩五十四頁、英詩三十二頁。齋藤松洲の

挿畫一葉。肖像一葉。

目次 踏繪（上田敏）。炎の城（高安月郊）。夢なり魂なり、肉なる香にこそ、醉

中吟、穂とる君（岩野泡鳴）。一葉（小山内薫）。靜なる日の海（山本露葉）。不

安（河井醉茗）。やまうど（蒲原有明）。

備考 英詩は茲にあげない。内証後、辛うじて出た、あやめ會の第二詩集である。

この詩集を出版する際にも障礙が起つた。开は、卷頭に載せることになつて、既に印刷に附した平木白星の詩は、印刷の途中で白星から掲載見合の事を申込んで來たので除かねばならぬ事になつたのであるさうな。第一集に比して見劣りするものも、全く這麼事情のあつた爲であらう。「靜なる日の海」「不安」「やま

うど」などは比較的好評であつた。

▲天風魔帆

著者 兒玉花外。

出版 明治四十年一月。菊半截、百五十二頁。口繪一葉。

目次 白帆に寄する詩。冬空。鶯と自由。松を刺して。世潮。野の少女。木葉の

使者。祈禱。柳を植ゑよ。旅に鶉を見てよめる。涙の河。白雲。蚕へのねがひ。

本能寺の跡に立ちて。天人。松露。可憐兒。雪女。傷める鷗。ラサールの死顔

に。秋雲。天露。やまと花。死出の凄。苦熱。越中島の朝。感應。遼東の墓。

鳥屋の娘。火國。新聞幼工の歌。仇浪。詩魔。詩と絲。海に走りて。雲甕。秋

思。詩人塚。春恨。海王。大鹽中齋先生の靈に告ぐる歌。

備考 『東京獨立雜誌』時代の作もあれば、明治三十八九年頃の作もある。「大鹽中

齋先生の靈に告ぐる歌」と「苦熱」とでは、格調の用意に於て、措辭の工夫に

詩集解題

於て、大なる徑庭がある。新作に於ては技巧を弄せんとして、却て失敗した作が多いやうだ。

▲うた日記

著者 森鷗外。名は林太郎。醫學博士で、軍人で、文學家である。座談の時に上を向いて、ふふんと笑ふ癖がある。萬延元年、石見國津和野に生れ、獨逸語を進文學舎に、漢文を依田學海に、和文和歌を福羽美靜に學んだ。深く獨逸文學に通じ、かの邦の美學に明らかである。明治二十二年頃より筆を翻譯に染め、自ら『しがらみ草紙』を經營して評論をも試み、千朶山房將軍の御姿いと目ざましいものがあると稱せられた。『しがらみ草紙』を廢刊してからも『めざまし草』や、『萬年草』など云ふ雜誌を時々刊行したが、何れも永續はしなかつた。『水沫集』『つき草』『即興詩人』『かげ草』『審美綱領』『審美新説』『玉匣二人浦島』などの著書があつて、皆世に行はれて居る。滿洲より凱旋の後には、腰辨當の匿名

詩集解題

の下に市井詩を試み、一の新詩風を起した。明治四十年十一月十三日、陸軍軍醫總監に任せられ、陸軍省醫務局長に補せられた。
出版 明治四十年十月。四六版、四百八十七頁。蘆原綠子、寺崎廣業等の挿畫及び寫眞四十五葉。 *うた日記*

性質 短歌、俳句、新體詩の合集である。

目次 自題。ねぎごと。第二軍。さくら。でつくのひる。老船長。浪のおと。馬賊。梨のはな。擡頭見喜。いもの苗。敵襲。けふのあらし。唇の血。扣鈕。大野縫殿之助。あすのやぶれ。馬の影。我馬痛めり。罌粟人糞。かりやのなごり。拂子賛。黃禍。秋。ふた夜。遼陽。ひくほまれ。夢か現。兒啼く。たまくところ。ほりのうち。ぶろしゆちやい。學校。新墓。ものの音。石田治作。小金井壽慧造を弔ふ。乃木將軍。犬の聲。巨藜。朱果。春。滿州翁草。蛙。前途遠。あこがれ。胡桃。水。古城堡。せめては草。十人。三騎。子もり歌。喇叭。

詩集解題

基督の木。鼓手。みづうみ。金鼓。一夜のやど。夢。風と水と。わが墓。花園。笑。まへの夜。寫眞。ねよわがこ。えのしま。しこのるすきい。琥珀枕。影。海。

備考 明治三十七八年戦役の際満州に於て作つたもので、佳作は少ないが、一の新詩風として注意を拂ふ價值はあらう。

▲有明集 装幀者 齋藤松洲

著者 蒲原有明。

出版 明治四十一年一月。四六版、二百二十三頁。著者肖像一葉。

目次 豹の血（智慧の相者は我を見て、若葉のかげ、靈の日の蝕、月しろ、蠱の露、茉莉花、寂靜、晝のおもひ）。偶感。秋のこころ。大河。甕の水。朱のまだら。坂路。不安。絶望。燈火。草びら。孤寂。この時。音もなし。夏の歌。秋の歌。苦惱。癡夢。滅の香。底の底。灰色。われ迷ふ。穎割葉。沙は燬けぬ。

海蛆。大踞。淨妙華。信樂。惡の秘所。どくだみ。碑銘。かかる日を冬もこそゆけ。橡の雨。皁月の歌。晚秋。序のしらべ。やまうど。鍾は鳴り出づ。水のおも。おもで。眞晝〔ロセチ〕。聖燈〔ロセチ〕。ルバイヤットより。蠅〔ブレエク〕。人魚の海。

備考 渠が象徴的技巧の殆ど頂點に達した作と見てよからう。音樂的要素を含んで居るのは、注意を値する。が、渠の詩を批難するものが漸く多くなつたやうだ。肖像は渠が腎臟炎にて病臥する前一日の撮影であるから、脹れぼつたい顔をして居るのださうな。

▲明治詩集

編者 吉野臥城。

出版 明治四十一年一月。四六版、二百八十頁。肖像及び筆蹟十六葉。附録二十頁。

詩集解題

ちのきやん
あまのこ
あまのこ
あまのこ
あまのこ

目次 嶋崎藤村——深林の逍遙。春の曲。常盤樹。土井晚翠——暮鐘。富嶽の歌。
 セイヤ江上の別離。薄田泣菫——公孫樹下に立ちて。神無月の一日。望郷の歌。
 蒲原有明——聖菜園。幻影。朝なり。朱のまだら。河井醉茗——仙媛。暗示。
 葉。兒玉花外——馬上哀吟。雞の歌。白帆に寄する詩。平木白星——笹龍膽
 (上、鞍馬。下、凱旋)。廓がよひ。岩野泡鳴——磯姫の曲。燭のゆらぎ。無言
 の石。前田林外——法鼓。我が死相。蛇いちご。高安月郊——羅浮仙女の嘆。
 花賣。上田敏——ちやるめら。踏繪。馬場孤蝶——山火。夜半の街。小山内薫
 ——狂人の歌へる秋の歌。朽木。おもかげ。山本露葉——靜なる日の海。五月
 晴。森鷗外——旗ふり。火。吉野臥城——埋火三律。松林。天若彦。附録——
 新體詩年表。

備考 『太陽』は「本書は明治文學史の材料として最も有益なる者にて、且將來の
 詩界發展にも、尠からの参考となるべし。」と評した。

作讀
詩
眼

讀詩の心得

一 詩を味ふ力

今日、新體詩を讀むに論文か書簡文でも讀むやうな心持で、「解る」「解らぬ」の定規で、新體詩をけなして居るものが多い。新體詩は他の韻文と同じく一々理解すべきものではなく、感ずべきものである。口腹の欲を滿せばよい三度の食事とは違つて、茶うけのやうに靜かに味ふべきものである。で、新體詩を讀み、新體詩を味ふには、相當の用意がなければならぬのである。

相當の用意と云つた處で、何も改めて高等の教育を受けねばならぬの、金縁眼鏡を掛けねばならぬと云ふ事ではない。教育程度は高ければ高いに増した事はないが普通の讀書力さへあれば味ふことが出来る。併し、詩は新聞の雜報のやうに達意を主としたものではないから、想像力も相應に働かせねばならず、推理力もなけ

讀 詩 の 眼

ればならず、又、鑑識力もなければならぬのである。であるから、詩を解するに
は是等の力を養つて行かねばならぬ。その上で、詩には詩の上に定つた約束と云
ふものがあるから、夫れを心得て行く。

そして、名家の作を多く讀んで見る。讀みツ放しでなく、よく味うて見る。むづ
かしいからと云つて、うちやつて了つては不可い。『萬葉集』を讀むに、『萬葉
集古義』や『萬葉集略解』を相手にして讀むの根氣を以て讀み、『蕪村句集』を味
ふに『蕪村句集講義』を繙くの熱心を以て味はねばならぬ。

この根氣と熱心とだにあつたならば、詩の滋味を嘗めて、多大なる慰藉を得、卑
俗なる社會を脱して心靈の向上を覺ゆるであらう。

二 詩の解釋

初學者の爲に解釋したのは、短歌や俳句には甚だ多いが、新體詩にはまだ纏つた
ものは無い。唯河井醉茗の『詩人』には、新體詩の解釋が載つて居る。その解釋

の仕方が如何にも忠實で、丁寧親切であるから、始めて詩を讀まうとする人や、
始めて詩を作らうと思ふ人には最良の手引である。

今、『詩人』第六號に載つて居る「わがゆく海」の解釋を示さう。

わがゆくかたは、月明りさし入るなべに、

さはら木は腕たるげに伏し沈み、

赤目柏はしのび音に葉ぞ泣きそぼち、

石楠花は息づく深山、——『寂靜』と、

『沈黙』のあぐむ森ならじ。

(言葉の解釋) ○「さし入るなべに」なべには、まゝにと云ふ言葉に似て、と
共にと云ふやうな意味、月明りがさしてくるとこれくだと云ふ事になる ○
「さはら木」榎と云ふ樹、山の樹であらう、『言海』には榎、木の名、大木とも
なる、枝、葉甚だヒノキに似て稍密なり、葉の背白し、材良くして強く水に

堪ふるを以て桶などに作る、花柏とある、果も出来るさうだ○「腕だるげ」
 だるげはだるさうに○「赤目柏」山野に生ずる喬木で、之も良材となる、莖
 も芽も赤い、葉は鋸状である、支那で梓と云ふのは此木の古名で梓の弓など
 は此木から造つたから云ふのであらう○「泣きそぼち」のそぼちは濡れて濕
 ること○「石楠花」山に多い灌木、美しい花が咲く○「息づく」息を吐く
 こと○「あぐむ」待ちあぐむなど云ふあぐむで倦むこと

(一聯の大意) 寂靜と沈黙は必ずしも我が行く途の理想でない——寂靜と沈
 黙の境ひを比喻するに深山の森を以てした、樾の木だるさうに鬱々と沈んで
 居る、柏の葉の露雫に濡れてしのび音に泣いて居る、石楠花のホット息を吐
 いて居る——やうな餘り寂しい、靜かな境地は我が理想でない、後の三聯も
 然うであるが此詩は、——(だっしゆ)を以て比喻の意味を明かに區分して居
 る、——より前は皆「寂靜」とか「沈黙」とか「休息」とかの比喻になつて

ある。

わがゆくかたは、野胡桃の實は笑みこぼれ、

黄金なす柑子は枝にたわわなる。

新墾小野のあらし畑、草くだものの

醸酒は小甕にかをる、——「休息」と

「うまし宴會」の場ならじ。

(言葉の解釋) ○「野胡桃」胡桃は桃の實に似た果樹で、野に多いから野胡桃
 と言つたものである○「笑みこぼれ」栗の實などの弾けて落つるのを笑みて
 こぼれると云ふ。胡桃の實も外皮が裂け割れて中の仁核が現れる○「柑子」蜜
 柑や橙の柑類と見てもよい、單に柑子と云へば蜜柑のこと○「たわわ」たわ
 みしなえること、實が累累と熟つて枝が撓む○「新墾小野」新たに開墾され
 たる野、次の荒き畑も同じく果樹など栽培された畑で未だ整然と畑らしくな

つて居ないと見る方が趣ある○「釀酒」醸造されたる酒○「うまし宴會」好
き宴會であるが、此場合の意味は平和、圓滿、満足、歡會など欣びの意が含
まれて居やう。

(一聯の大意) 休息や安息も我が理想でないと云ふので其比喻に野のさまを
叙した、殆んど解釋を俟たない、胡桃や蜜柑や果樹の小甕には旨い酒が醸さ
れてある、野の和らぎ、野の安らひは如何にも平穩であるがなほ我が理想と
する場所ではない。

わがゆくかたは、末枯の葦の葉ごしに

爛眼の入日の日ざしひたひたと、

水鏡の面にまたたくに見ぞ酔ひしれて、

姥鷺はさしぐむ水沼、——『歎かひ』と、

追懷のすむ郷ならじ。

(言葉の解釋)「末枯」冬になつて草木の葉の赤く枯れかゝること○「爛眼」元
來は眼のたゞれたることであるが入日の日ざしなどに使ふ時は爛眼の如くと
解して、落陽のきら／＼しきを指す○「ひたひた」波紋の形容○「水鏡」沼
とか池とか、古い水の面には無数の苔花植物が覆うて鏡のやうに見える、そ
れである○「またたく」瞬くは眼をたゞくの意であるが灯火がまたたく、星
がまたたくなど使はれる方面は廣くなつた○「姥鷺」青鷺の一種、嘴は長い
○「さしぐむ」涙ぐむこと○「水沼」沼のこと○『歎かひ』歎きを延ばした
言語。

(一聯の大意) さればと云つて『歎息』や『追懷』も我が理想を住まはせる
故郷でない、『歎かひ』と『追懷』の中には哀愁、悲痛、後悔、絶望など多く
の意味もあらう、喩へば冬の日落ちんとして古き沼の枯葦ごしに、錆びた水
の面に弱い光りを映する時、其景色に酔ひみとれてあの鷺が物思はしさうに

うつむいて居るさま、其處には昔を想ふ情と、歎息の思ひはあらうけれど、なほわが理想の境地ではない。

わがゆくかたは、八百合の潮あひさるどよむ

遠つ海や、—— ああ、朝發あさびらき、水脈み曳びきの

神こそ立てれ、荒御魂あらかみたま、勇魚いさなとる子が

日黒みの廣き肩して、いざ『慈悲』と、

『努力』の帆をと呼びたまふ。

(言葉の解釋) ○「八百合」潮の落合ふ處、八百雲、八百汐など皆同じ多くを形容する○「潮さる」潮の騒ぎで、八百汐の落合ふ時に浪の騒ぐこと○「どよむ」動搖して鳴響く○「朝發き」朝早く船が港を出づることを云ふので朝ぼらけとは違ふ○「水脈曳」水脈は漚うとも書く、船路を云ふ、みをびきは水案内とも見るべく、みをびきの船なども云ふ、但し水脈曳の神と云ふ神名

はあるか何うか今一寸分らない、水を守る神なら澤山あるから多分それらを指して言つたものと見ても宜からう○「荒御魂」神の靈魂、殊に雄々しき神の魂○「勇魚」は鯨の古言○「日黒み」日光に焼けて黒くなつた廣い肩。
(一聯の大意) 前の三聯では皆さうでないさうでないと打消しの句を使つてあるから、此處で我が理想は斯うであると一篇を収めたものである。譬へば八百汐高き海の上、いさなとりの日に焼けた廣い肩を見る如く、頼母しく、男々しく、神は水脈曳となつて、慈悲の揖を取れ、努力の帆を張れよと呼びたまふ境、あゝわが理想として向ふべきは此境である、寂しき森や、休らひの野や、歎きの沼ではない、福音を傳へ慈愛を讃ふる海のはとり、向上、努力の神が現示する潮の響にぞ、わが詩の力、わが生の地は見出されるのである。

(一篇の主意) 此の『わがゆく海』は薄田泣菫氏の作で、詩集『白羊宮』の

卷頭を飾つてゐる、『春鳥集』の『日のおちぼ』と對立して共に一集の序とも見るべきもの、整つて、力のある詩である。一篇の主意は即ち最後の一聯の主意で、殊に『努力』の精神は此一作を貫いて居る。氏が技巧の最も熟練した頃の作であるから、模範として推重するにはづかしくない。恚う解釋してあると、詞の意味も解れば、一篇の大意も解る。併し、その甚深な趣味と含蓄とは到底説明する事の出来るものでないから、讀者は再三再四熟讀玩味して、その靈感に打たるべきであらう。

三 熟讀玩味

前の解釋を見たならば、讀詩の呼吸が自ら解り、熟讀玩味の必要も悟つたであらう。

唯茲に一つ云つて置きたいのは、熟讀玩味の方便である。詩を讀んで、むづかしい詞に逢著したならば、必ず大槻文彦の『言海』なり、物集高見の『日本大辭林』なりを引いて見ること忘れてはならぬ。辭書を引きさへすれば解るものを、引いても見ずに解らないなりに捨てて置くのは愚の極である。次に一聯の主意、一篇の精神を色讀するのである。餘りに字句や文法に拘泥すると、一篇の主意をとり損ねることがある。

讀詩餘錄

讀詩餘錄

一 「あゝあゝ」の系統

睡ねむにしるせし文字もじなれば

ひとしれすこそ乾きけれ

あゝあゝ白しろ壁かべに

わがうれひありなみだあり

〔若菜集〕——「白壁」

藤村の『若菜集』を讀んだものは、まづ「あゝ」若くは「あゝあゝ」の多いに氣が付くだらう。「あゝ」は普通に用ゐられて居るから左程には感じないが、「あゝあゝ」は目新しいので一寸妙に感ずる。で、當時『若菜集』には生なま欠あ伸のびを嚙かみ殺ころしたやうな聲を寫した感歎詞が多いと云つて嘲つたものもあつたが、追々之を襲用

讀詩餘錄

する人が出て來た爲に、今日では餘り耳障りがしないやうになつた。併し、藤村の如く好んで之を多く用ゐた詩人は、恐く無からうと思ふ。

われ今秋いまの野のにいでて

奥山おくやま高くのぼり行き

都みやこのかたを眺ながむれば

あゝあゝ熱あつきなみだかな

〔若菜集〕——「懷古」

あゝあゝ熱あつき涙なみだかな

あるに甲斐かひなき妻鳥つまどりは

せめて一聲いっせい鳴なげかすと

屍かばねに嘆なげくさまあはれ

〔同上〕——「雞」

眼 詩 讀

讀詩餘錄

あゝあゝはなの

つゆに酔ひ

ふかきはやしに

うたへかし

(同上——「深林の逍遙」)

あゝあゝ清き白雪は

つもりもあへず消ゆるごと

なつかかりかりし友の身は

われをのこしてうせにけり

(「一葉舟」——「白磁花瓶賦」)

『夏草』や『落梅集』にも相變らず「あゝ」は時めいて居るが、「あゝあゝ」は影も
見せなくなつた。夫れと同時に藤村の情熱は、灰色の夕空に消える雲のやうに冷

眼 詩 讀

讀詩餘錄

えてしまつたのである。

さて、この「あゝあゝ」は、藤村によつて詩界に産聲をあげたやうに思はれたが
決して左様ではない。抑も其の系統をたづねて見ると、梅花道人の『新體梅花詩
集』から出て居る「九十九の嫗」の中に、

ア、ア、ア、我身若し

昔ながらの滋賀の里、

淨行寺門前に、

細くあけたる煙にふすび、

氏なきものゝ娘にて、

花賣爺の子と呼ばれ、

其のまゝ其處に埋れなば、

とある。これが、即ち「あゝあゝ」の祖先だらうと思ふ。又、同じ詩の中に、

眼 詩 讀

讀詩餘錄

一四四

△△△△△△△△△△
ア、ア、ア、ア、

やまにらの葉に置露は、

消なばふたゝび結ぶべし、

かたぶく月も來ん秋は、

また此峯にとたのしめど、

零ちて碎けし人の身は、

鳥部のやまのゆふけぶり、

と云ふのがあつて、「あゝあゝ」に、も一つおまけに「あゝ」を附け加へてある。

之は餘りに引き伸したので、却て諧調を破るの恐れがあり、その後の詩には全く用ゐられなかつた。

倅く、梅花道人から出た「あゝあゝ」は、藤村の時に至つて世に顯れ、晚翠に至つて振ひ、追々と世間に廣まつたのである。今、晚翠の詩集から、その例を示さ

う。

△△△△△△△△△△
あゝあゝ細く光ある雙眸の星消え落ちて

かたみと残る一塊の灰のみ郷に今歸る

火輪大地を驅けり行く東海の驛五十三、

生時のむかし仰ぎ見し企望のかげの富士の嶺

今は愁の雲閉ちて神秘の色や深からむ。

〔「曉鐘」——「弔吉國樟堂」〕

△△△△△△△△△△
あゝあゝ高し理想の美、

これやアゼンの肩廣さ

聖者に見えし幻か、

〔「東海遊子吟」——「ミロのエーナス」〕

夕の雲の上しづかにかくる

眼 詩 讀

讀詩餘錄

一四五

眼 詩 讀

あゝあゝやさしの『愁』の影や。

(同上——「愁」)

晚翠は藤村と反對に、最初の詩集『天地有情』にはなかつたが、『曉鐘』、『東海遊子吟』と段々に多くなつた。

二 詩に現れたる笑聲

梅花道人は、無造作に「アレ〜」だとか、「エ、」だとか、「オ、」だとか云ふ聲音を詠み込んで居る位であるから、笑聲などは矢張その儘詩中に挿入して居る。

△△、笑止、

我身、ものに狂へりと、

里の小供にはやさるゝは、

一途いちじゆにものを思へばぞ、

〔新體梅花詩集〕——「九十九の姫」

我身は誰としら綾の、

かさね小袖もけふきのふ、

萩の葉風のすゞしさに、

小簾垂れ籠めて琴とうで、

△△、はづかしの線言よ、

(同上——同其七)

などは、即ち其の一例で、狂人の笑を寫して居る。

狂人の笑と云ふことで思ひ出したが、小山内薫の『小野のわかれ』の「狂人の歌へる秋の歌」には、よく此の狂人の笑を寫し、この笑聲をきかせた處に無限の情趣と凄味とがある。

花野迷ふは花野のあるじ——

狂ひ誇れる手をとりにて

眼 詩 讀

隣家の妻よ何を泣く

あはははあははは

をかしの秋や

これは、その結末の一聯である。「あはははあははは」の笑聲のわざとらしくない處は手際だ。併し、恁く笑聲をきかせたのは、必ずしも蕪の創意ではない。素より此の詩とは比較にはならぬが、梅花道人の「出放題」に笑聲をきかせた處がある。左に之を摘録しやう。

ふりかへれば我年は、

かぞふれば我としは、

四五千年にやなりぬ覽、

進みきたりぬ、我知慧は、

殖てきたりぬ、我知慧は、

進みきたればこそ、

ふえきたればこそ、

名も無きに名をつけて、

理學、哲學、猫、杓子、

アハハ、アツ、ハツ、ハ

我知慧は凄まじ、

わが知慧えらし、

それでこそ理學、哲學、猫、杓子、

唯いろくくに名を附て、

底無き穴によつ這ひて、

頭は、蜘蛛の圍に、

顔は、かはほりに、

眼 詩 讀

讀 詩 餘 錄

息もたえなく迷ふ人、

あはれく、アナあはれ」

見來れば、我身世に出で、

白絲の有無をだに知らぬ、

えぞ知らぬ、まだ幼い頃より、

今は頭に霜ふりて、

△△△△△△△△△△△△
アハ、アツ、ハツ、ハ、

まだ霜などは降らねども、

四五千年の今日が日まで、

石は石、花は花、竹は竹、

花が石にも咲きはせじ、

竹が花にもなりはせじ、

眼 詩 讀

讀 詩 餘 錄

わからぬものゝ詮索を、

分らぬものに爲るとは、

△△△△△△△△△△△△
アハ、アツ、ハツ、ハ

唯笑へ、笑うて遊べ、

世の中は、

唯現在の今日の外、

明日も明後日も無きものを、

止めや蝶々、菜の葉へ止め、

菜の葉があいたら、

よしの先きへ止め、

止まるところを忘れなば、

猫に追はれし蝶々の、

眼 詩 讀

莊子は夢にうなされやせん、

眞個ほんごとに「出放題」であるが、暫く巧拙を問はずとすれば、「出放題」は「狂人の歌へる秋の歌」の先輩であらう。

三 題のつけ方

新體詩のまだ幼稚であつた時代には、詩題は極めて露骨で、無趣味であつた。題を一目見ただけで、内容が讀ますとも大方おほかた分ると云ふやり方である。「新體詩抄」の「勸學の詩」でも、「社會學の原理に題す」でも、御多分には洩れなからう。譯詩にしても、「海潮音」などは「眞晝」だとか、「至上善」だとか、「心も空に」だとか、何とか床しい題を冠し、詩の終末に原作者の氏名を書いてあるが、「新體詩抄」のは「カムプベル氏英國海軍の詩」だとか、「テニソン氏輕騎隊進撃の詩」だとか無造作なやり方で、ちつとも面白くない。

恚いかう云ふやり方は、長歌の命題の仕方から來たので、因習が牢として抜くことが

眼 詩 讀

出來なかつたのであらう。彼の詩人でない、所謂學者肌の人々の作つた『新體詩抄』は兎も角として、熱狂詩人の『新體梅花詩集』ですら、この舊套を脱するところが出來なかつた。中には「九十九の姫」、「滴々露」、「對空吟」と云つたやうな趣味のある命題も試みてあるが、多くは「毒湛禪師を辞し虎溪山を出るとて」、「李青蓮が菩薩の意を譯す」、「米僊子の西京に行かれしと聞き想鴨河の納涼に走せて」と云ふ菅の根の長々しい題で、題そのものが既に内容を説明して居るのだ。短歌の月並者流が、「對月陳思」とか、「虫聲非一」とか、「社頭の松折れたり」とか云ふ御註文に依つて、その御註文通り題意に協ふやうに製造して居ると何の異なる所がない。這麼やり方は疾うに新詩人の氣がついて改めねばならぬ所なのであるが、山田美妙齋なども、梅花道人と同じく古臭い題の付け方をやつて居た。とは云ふものの、美妙齋のやり方は梅花道人に比して少からず進歩して居たと思ふ。今『青年唱歌集』を見ると、「庭前の女郎花」、「岩本善治氏舉兒の賀」、「露國皇太子

讀詩眼

を送り奉るとて」と云ふやうなものもあるが、「夜の霧」、「薔薇のつかひ」、「たのしかれとて」、「つぼすみれ」などと、新しい詩らしい題を付けたのも少くない。處が、この題の付け方が『文學界』の詩人や、『帝國文學』の詩人等に依つて一變された。鹽井雨江は「磯の笛竹」、「たゆたふ駒」、武島羽衣は「ぬれ燕」、「詩神」などと優しくも、新しくも名づけたものである。夫れが島崎藤村のになると、「潮音」、「蓮花舟」、「葡萄の樹のかげ」、「狐のわざ」などと清新の趣致ある題のつけ方をやつた。題そのものに接しただけでも、既にチャームされて了ふ。恁くてこそ詩題らしい詩題と云ふべけれどある。

この頃になつても、まだ陳腐なつけ方をやつて居たのは『天地玄黃』で、「洛北の山栖梅花鶴瘦堂に題す」、「仙臺の新歌人佐々木獨尊と話す」などと長たらしき氣の利かない題をつけて居た。又、『露じも』にも這麼風のある。「湖上を渡り艱みし蜻蛉に寄す」、「わが稚き弟を残して母の身まかりし時」、「無花果の落つるを見

て世の終を觀ず」などは、即ちその一例である。

詩の進歩と共に命題にも苦心する事となり、「無花果の落つるを見て世の終を觀ず」と云つたやうな題は、誰も顧みるものがなくなつた。で、題は成るべく詩趣のある、面白味のある、氣の利いたものを選ぶ事になつた結果、長かるべき題も簡単な題で間に合せる風が生じた。例へば、「佐々木信綱君の南清に赴くを送る」と命すべきを「ゆく雲の歌」とし、題の傍に括弧して佐々木信綱君云々と現すのである。泡鳴も追々悟る所があつたと見えて、『夕潮』以後は多く此の例に依つた。「董と少女」（お俊傳兵衛の墓に少女の董をつむを見て）、「苦悶の鎖」（故野口寧齋君に）などは、即ち夫れである。林外は最も多く之を用ひ、「金翅鳥王の歌」（天上の花祭を敍べたる）、「翡翠折れ」（源九郎義經の初戀を詠じたる）、その他いくらかもある。總じて命題の苦心は、各詩人を通じての苦心であつた。

晚翠は内容と相適ふべき雄大な題を、好んで其の詩に冠した。この風は『天地有

讀詩眼

讀詩眼

情』の「星落秋風五丈原」に始まり、『曉鐘』の「萬里長城の歌」、「黑龍江上の悲劇」、「東海遊子吟」の「亞細亞大陸回顧の歌」、「セイヌ江上の別離」、「司馬子長名山藏書歌」に至つて、殆んど其の極に達して居る。中には「羅馬郊外にシエリーの墓を訪へる後モンテ・テラスチヨの丘に登りて」と云ふ、新體詩あつて以來の山鳥の尾のしだり尾の長々し尾の長々しい題や、「ライプチヒ郊外ナポレオン紀念碑」と云ふのがあるが、何だか後戻りがしたやうて、感服が出来ぬ。之に反して、泣菫、有明等は抽象的な題を命ずる事が多くなつた。

泣菫の『白羊宮』に至つては、又一轉して「鶉の歌」、「鴉の淨め」、「金星草の歌」、「難波うばら」、「大葉黃菫」の如く動植物の名が多くなり、有明は「靈の日の蝕」、「蠶の露」、「滅の香」、「信樂」の如き題をつけ、市井詩の歌ふ人々の間には、「旗ふり」、「機關車の歌」などと云ふ題が漸く流行して來た。

作詩の經驗

一 感興

詩は興來の刹那に成る。——これ、總ての詩人の領く所であらう。——自分は感興が湧かねば、一行半句も筆にすることが出来ぬ。で、感興が湧いて來るまで、一日でも二日でも作らぬ。作らうとしても作れないからである。

併し、感興と云ふものは、潮などのやうに時を定めて湧いて來るものでない。飛ぶ鳥のやうに來たかと思ふと去つて了しまひ、ゆく雲のやうに影がさしたと思ふと散つて了ふ。ふと興來の時に逢つて、そそくさと筆を執つて書き止めやうとすると幻影のやうにはと消えて還らぬことがある。その時は詮方なしに、いたづら書きを始める。して居るうちに感興が湧いて來る、此度こそは逃してはならんと思つて捉へやうとすると、又逃げて行つて了ふ。這麼風に一詩に二三日も苦む事は尠く

作詩眼

作 詩 眼

ない。
愆^かう苦む時は、いつも作らう、必ず何日までには作らねばならんとあせる時で、さもない時は感興さへ浮んで来れば、譯もなく出来る。

二 推 敲

譯もなく出来ても、譯もなく發表する譯には行かんから推敲する。推敲するには、餘り時日が経たない方が可い。

時日が経つて了ふと、その作詩當時の感興を再び得ることが出来ない。感興が全く去つて了つた後では、推敲も添削も容易ではない。であるから、推敲にも添削にも或度までは興來を要するのである。

興來の時に於ける添削は、石を化して金とする事が出来る。

三 長篇詩の苦心

ふとした機會から、天日槍を詠じて見やうと思つたことがある。その時は、天日

槍が目に髣髴いて離れぬ。寐ても起きても天日槍を思ひ、その結構を考へたのであつた。

而して、『古風土記』を基礎として『古事記』や『日本書紀』や、その他天日槍に關する事歴を及ぶだけ調べた。調査が終り、大體の結構も成つたので筆を執らうとした。

頭^{あたま}に想が浮んで居ながら、什麼しても出て来ない。掴み出さうとしても、什麼しても出て来ない。數日間を空しく過して、冒頭の一行も成らない。原稿紙を見ると「天日槍」と題が書かれてあるだけで、他の文字は幾行か墨黒々と消されてある。自分で自分を疑つた。或眞夜中、ひよつとして想が浮んで来た、思は胸を衝いて「書け、早く書け。」と迫つて来た。床を刎ね除けて起き上り、洋燈の心を衝と捻つた。一室がばつと明くなつて、心は花やかな世界に放たれたのであつた。

その夜の感興は第一章にして去つて了つたが、自分の平常の癖として、これだけ

作 詩 眼

作詩の眼

出来れば後は容易く出来るのである。恁う信じて居るから、その夜は安らかに眠つた。日中に吹き荒れた風の和いだ静夜のやうに安らかに眠つた。興來の數日にして遂に脱稿したのであつたが、讀み直し乍ら筆を入れるの苦みは眞に尋常では無かつたのである。けれども、一人の兒を得た満足は、何物にも代へる事が出来なかつた。

四 逍遙と詩

薄田泣菫の『白玉姫』に、こんな事が書いてある。

西風のわたりに心あがりを感じて、微笑を禁せざりしとは、これをシユレエに見、机の抽斗に藏めたる腐れ林檎の香氣に感興得たりとは、これをシルルに聞きしが、今日人は來て、腹稿調ふるは眞闇なる戸棚のうちに、頭突き入れたる上ならではと語る、世に珍しき習慣もあるものかな。吾はまた三行の句をすら、逍遙のすがらならでは容易に得難かり。

自分は必ずしも逍遙の折とは限らんが、逍遙の折は比較的詩を得ることが多い。仙臺に居る時分には、彼の宮城野に遊び、瑞鳳殿の杉林を彷徨ひ、柳の芽を吹く頃には南町通の夕を歩んだ。晚翠君とは屢廣瀬川の畔を逍遙し、愛宕山の緑を踏んだ。「松林」や、「廣瀬川」と云ふ律詩や、「冬溜沼」などは其の頃の作である。室内に在つては書を読んだ時に感興を得、或は何物かに感じて詩を思ふ事もあるが、逍遙は最も多く詩を得る機會を與へるから、詩人に取つては貴重なもの一つであらう。

五 好奇心と詩

まあ好奇心とでも云ふのであらうか、何か珍しい植物の名や、自分の氣に入つた熟語などに逢著すると、夫れを用ゐて詩を作つて見やうと思ふことがあつて、人には明白には言はないが内々試つたこともある。處が、什麼かすると非常に興が乗つて來て、案外佳い詩が出来たこともあつた。併し、這麼やり方は今日では、

作詩の眼

わざと避けるやうになつた。什麼いふ譯が自分でも分らぬ。

六 目に訴へる詩

一時は誰にもあることで、目に訴へる奇麗な文字や、むづかしい漢字を用ゐたり、或は變挺な文字を並べて得手勝手な振假名をやつたりするが、これは甚だ宜しくない事である。宜しくない事であると知つた自分は、成るべく是等の弊から脱するやうに勉めて居る。

現今の青年詩人には随分と珍妙なあて字に最もらしい振假名をして、振假名だけで、しか讀ませて居るのがある。平木白星などは好んでむづかしい文字を排列するやうだが、最^もう悟る處あつて然るべきだと思ふ。

七 詩題

題が先づ浮んで後に詩を作ることあれば、詩が成つてから後に題を命ずることもある。併し、詩が成つてから後に題を命ずるのが、非常な樂みである。

題によつて詩は活きもし、死にもする事があるから——これは些と大袈裟だが——詩題の選定は餘程考慮を費すべきものである。従つて、詩集の名の如きも慎重な態度を以て選定すべきであらう。

八 取材の範圍

天地の廣さが如く詩の天地も廣い、自然の大なるが如く詩の境地も亦大である。故らに天地に踟躕して、取材の範圍を狭めるの要がない。詩の材料は到る所にあ^る。自分は悉く取つて、之を詩囊に收めて置く。活きたる詩は、決して机上の小宇宙には無い。

九 觀察

空想のみで、詩は捻り出せるもので無いと悟つてから、自分は成るべく諸般の觀察に努めて居る。成るべく現實の生活に接近して、現實の脈に動いて居る眞生命を捉へやうと心掛けて居る。貧民窟や風顛病院と云ふやうな別世界——常人の所

作詩眼

謂——も観察する。繩暖簾もくぐつて見れば、おでん屋も覗いて見る。そこには、一種云ふべからざる無限の詩趣があるやうだ。詩は高樓臺閣の粉黛と、花鳥風月の美のみには止まら無い。

十 作詩の覺悟

「詩は、戯れに非ず。」

念頭を離れないのは唯この一語である。

分類詩例

叙事詩

所謂客観詩の一種で、事實事象を叙したものだ。又、神話を叙したものは神話詩、史上の或事實を叙したものは史詩、その夢幻的なのは夢幻史詩とも云つて居る。蒲原有明の『佐太大神』『鑿斧』『薄田泣菫』『天馳使の歌』『葛城の神』、吉野臥城の『天日槍』及び茲に掲げた『牧羊神』などは神話詩で、岩野泡鳴の『豊太閤』與謝野鐵幹平木白星前田林外の『源九郎義経』及び茲に掲げた『不識庵』などは史詩で、岩野泡鳴の『鳴門姫』は夢幻史詩である。この叙事詩に劇的分子を加へたものは劇的叙事詩で、吉野臥城の『天岩戸』『天若彦』などは即ち夫れだ。岩野泡鳴の『田戸の海ぬし』なども叙事詩の一體である。

牧羊神

上田 敏

阜の上の森蔭に直立ちて、
牧羊の神バアン笙を吹く。
晝下、日暖かに、風も吹きやみぬ。
天青し、雲白し、野山影短き
音無の世に、ただ笙の聲、

分類詩例

叙事詩

例詩類分

叙事詩

ちよう、りよう、ふりよう、
 ひうやりやに、ひやるる、
 あら、よい、ふりよう、るり、
 ひよう、ふりよう、
 蘆笛の管の簧
 震ひ響きていづる音に、
 神も昔やおもふらむ、
 髻そそけたる相好は
 翁さびたる咲まひがほ、
 角さへ見ゆる額髪、
 髪はららぎて、さばらかに、
 風雅の心うかべたる

例詩類分

叙事詩

耳も山羊、脚も山羊
 半獸の姿ぞなつかしき。
 音の程らひの揺曳に、
 憧れごころ、夢に入るを
 きけば昔の戀がたり。
 「細谷川の丸木橋、
 ふみかへしては、かへしては、
 あの山みるにおもひだす。
 わかき心のはやりぎに、
 森の女神のシリンクス
 追ひしその日の雄詰を。

例詩類分

叙事詩

岩の峽間の白樫の
 枝かきわけて、ラウラ木や、
 ミユルトスの森すぎゆけば、
 木蔦の蔓に絡まるる
 山葡萄こそうるさけれ。
 去年の落栗毬栗は、
 蹄の割に挟まれど、
 君を思へば正體なしや、
 岩角、木株、細流を
 踏みしめ、飛びこえ、徒わたり、
 雲の御髪や白妙の
 肌理こまやかな肉置の

例詩類分

叙事詩

肩や抱めむと喘ぎゆく。
 やがてぞ谷は極まりて、
 鳶尾草の濃紫、
 にほひすみれのしほ鹿子、
 春山祇の來て遊ぶ
 泉のもとにつきぬれば、
 胸もとどろにかの君を
 今こそ終に得てしかと、
 思ふ心のそらだのめ、
 浅澤水の中島に
 仆れてつかむ蘆の根よ。
 あまりに物の儂さに

例詩類分

叙事詩

空手をしめて、よよと泣く
吐息ためいきとめあへず、
愁ひ嘯くをりしもあれ、
ふしぎや音のしみじめと、
うつろ蘆莖鳴りいでぬ、
蘆葦響き鳴り出でぬ。
さては抱けるこの草は
君が心のやどり草、
戀は草、草は戀、
せめてはこれぞわが物と
笙にしつらひ、年來の
つもる思を口うつし、

例詩類分

叙事詩

移して吹けば片岡に
夫呼ぶ雉子の雌鳥も、
胡桃に耽ける友鳥も、
原ににれがむ黄牛も、
牧に嘶く黒駒も、
埒にむれる小羊も、
聞惚れ、見惚れ、あこがれ
蟬の連節のどやかに、
蜥蜴も石に眠るなる
世の寂寥の真晝時、
蘆に變りしわが戀と
おのれもいつか一つなる

例詩類分

叙
事
詩

うつら心や、のんやほ、のんやほ、
常春藤のいつまでも
うれし愁にまぎれむと、
けふも日影の長閑さに、
心をこめて吹き吹けば、
つもる思も口うつし、
噫、蘆の笛、蘆の笙の笛。』

日はややに傾きて、遠里に
靄はたち、中空の温りに、
草の香のいや高き片岡、
夢薫り、現は匂ふ今、

眠眼の牧羊神、笙を吹きやみぬ。
森蔭に音も無し。

例詩類分

叙
事
詩

村雨ははららほろ、
山梨の枝にかかれば、
けん、けん、ほろろうつ
雉子の聲にも覺されて
磐床いづる牧羊の神バアン、
胸毛の露をはらひつつ
延欠伸して仰ぎ見れば、
有無雲の中天を
ひとり寂しく鶴の鳥、

分類詩例

叙事詩

遠の柴山かけて飛ぶ。
 かへりみすれば、川添の
 根白柳を濡燕
 掠めて飛ぶや、雨あがり、
 今夕影のしるけきに、
 生のこの世の忙しさを。
 地には蟻のいとなみを、
 空には蜂の分封を
 つくづく見れば宿命の
 かたき掟ぞいちじるき。
 水の面に映りたる
 おのが姿に戀じにの

分類詩例

叙事詩

玉玲瓏の水仙花、
 花は散りてし葉の上を、
 蟻は斜にまじくりに
 生いの力ちからに驅かられたり。
 またある時は糧運ぶ
 いそしき業わざのみなかにも
 蟻塚あな近ちかき砂すなの上、
 ふたつの蟻あなの足あしとめて
 なに語かたりあふ、たゆたへる
 虫むしの世よ界かいのまつりごと、
 遇あふさ離きるさのみち惑まどひ、

例詩類分

叙事詩

健氣にも、はた傷ましや。
 空は今何の反橋ぞ、
 天馳使わたらすか、
 東の山に虹かかり、
 更に黄金の一帶の
 霓わたせるけしきにて、
 鹿とり靡く弓雄等が
 鳴鏑射放つ音すなる
 蜂の巢立の子別に
 父蜂さそふ細工蜂、
 七歩ばかりの後よりぞ
 やや高く飛ぶ女王蜂、

例詩類分

叙事詩

たとへば修羅の巷にて、
 亂飛、亂廻、虎走
 勇猛たぐひ無き兵も、
 パアンふと脅かしぬれば、
 人崩つきて、人馬落ちかさなり、
 惑ひ、ふためき走ること、
 大騷亂のわたましや、
 生の力の仕業なる。
 遙かに山のあなたには
 人の築きし城のうち、
 國富み榮え、民繁き
 都はあれど、ものみなは

例詩類分

叙事詩

かたみにつらき犠牲の
 圃のさだめを免れあへず、
 青人草は細工蜂、
 黄泉の坂路のさかしきに、
 とはば盤石押しあぐる
 シシユフオス王の姿かな。
 種とり蜂のふところ手、
 夢の浮世のぬめり男の、
 しやらりしやらりとしたる身も
 子別過ぎし初秋の
 朝の命を知らざるや、
 イクシオオンのたえまなく

例詩類分

叙事詩

車輪に廻るあはれさよ。
 それにひきかへ王蜂の
 満ち足らひたる幸は
 こよなき物と見えながら
 ウラノスはクロノスに、クロノスは
 其子ジウスに滅され、
 ジウスの代さへ危きを
 プロメエチウス知るといふ
 流轉の世こそ悲しけれ。
 噫勢力の強くとも、
 命の掟になに克たむ。
 理を知る心深ければ、

例詩類分

叙事詩

悲かなしみさららに深ふかまさる。
 慰なぐさめはただこの笙しやうの笛ふえ、
 牧はく羊やう神しんの笛ふえの音ねに
 世よの秘ひ事ごとぞかくれたる。
 名なに負おふバアン吹かく笛ふえの音ねに
 この天あま地つちのものみなは
 舉こりて群むれ居ゐ含そまれて、
 身みも世よも忘わすれ、處とこ、時ときの
 辨わ別べつもなき醉あひ心こころ地ち、
 夢ゆめ見み心こころ地ちに憧あこがるる
 不ふ思し議ぎの笙しやうの笛ふえの聲こゑ、
 悠のびやかに、朗はかかに、あんなら緩ゆるやかに、

例詩類分

叙事詩

森もりの泉いづみに來きて歎なげく
 衙こたまひめ姫ひめさへほほゑませ
 谷たにの八や十じゆ限ぎん吹かき靡なけ
 人ひと里さと遠とほく傳つたはれば、
 牧ぼく人じん笳ふえを擲なげちて
 羊ひつじ踊をどりをひとをどり、
 生いきの悦よろこびみちわたる
 面おもてにしばし夕ゆふづく日ひ
 耀かう見みれば宿しゆく命めいの
 羈き絆はなはいつか解とかれたり。
 をちこち山やまの影かげ長ながく
 夕ゆふの空そらの艶えんなるに、

例詩類分

叙事詩

なほも笛吹く牧羊神、
 雲の溱の漁火か、
 ちろり、ちろりと長庚は
 朝が散らせるよき物を、
 羊を、山羊を集むるか、
 母の乳房に髻髪兒を
 呼びかへすなるひとつ星。
 ああ二つ星三つ星と
 敷そふ空の縹色
 深まさりゆく夕まぐれ、
 羊の鈴の音も絶えて、
 いづこの野邊の花垣か、

例詩類分

叙事詩

燕の妹、雉子の叔母
 舌を絶たれし弟姫の
 あの容鳥の歌の聲、
 間なく繁鳴く恨さへ、
 和ぎたりやこの夕
 ここにパンも今はとて
 さらばの音取、末長く
 『さらば明日参らう。』
 うえうちり、たちえろ。』
 白樺木立わけ入れば、
 東の阜に月はのぼりぬ。

『讀賣新聞』

例詩類分

叙
事
詩

不識菴
 霜は越路に満ちぬらん、
 能登は早くも秋ふけて、
 城も砕くる波の音、
 月は旗より登るなり。
 馬も眠るか篝火の陣、
 はせて静まる夜の陣、
 晝のいくさに飽き足らで、
 夢はいづくを襲ふらん。
 雁はいづくに行くやらん。
 茲も吾手に落ちにけり。
 越の古巢に誰か待つ。

一八四
高安月郊

例詩類分

叙
事
詩

げにや我にも郷ありき。
 我に從ふつはものも
 月に忍ぶか面影の
 千々にくだくる思には、
 雁の翼も重からん。
 あはれ錦も夜の花、
 草を染めしはいくばくぞ。
 待てど歸らぬふるさとの
 人はいつまで憶ふらん。
 髪は剃りても春日山
 菴のあるじは太刀佩きて、
 去りつ、來りつ、法の道

一八五

例詩類分

叙
事
詩

馬に鞭うつ二十年。
 我も涙はあるものを、
 何か惜まんものゝふの
 敵も味方も隔無き
 月を魂とも弔はん。
 雲は迷ふか影隠す
 闇に起るは笛の聲。
 我も漸く別れ行く、
 君はこれにぞ打たれける。
 君の常には似ざりけり、
 似ねどすすしき最期には、
 君も憾は無かるらん。

例詩類分

叙
事
詩

我は獨ぞ恨むなる。
 天狗東魚を噛みてより、
 北に南に足利の
 鼎泡立つ秋津島、
 蜂と起るはいくばくぞ。
 無字の法知る新九郎、
 跡はわつばぞ守るなる。
 頭陀の仇討つ嚴島、
 鄙のいくさに終るらん。
 何を傲るか桶峽間
 夜半の嵐に裂けてより
 美濃の近江の鹿逐うて、

例詩類分

叙
事
詩

京きやうに先まづ入いる吉きち法ほふ師し、
 足あしはかかむか皮かわ履ぐつに
 越この白しろ雪ゆき能よく踏ふむや。
 げにも睨にらめば天あめが下したり。
 君きみと我われとの世よなりけり。
 君きみは静しづかに地ちを開ひらき、
 我われは動うごきて山やま碎くだく
 鋒きりは相あひ合あふ川かは中なかの
 島しまぞ二ふた人りの獲と物ものなる。
 霧きりも晴はれ行ゆく筑つく摩ま川がは、
 君きみはうしろを襲おそひけり。
 我われは前まより水みづ越こえて、

例詩類分

叙
事
詩

見みゆる日ひかげに八はち千せん騎き、
 旗はたも躍をどりて風かぜ早はやく
 突つけば亂みだるる水みづ音ねに
 山やまも大おほ浪なみ打うちけり。
 君きみは早はやくも遁のがれしな。
 残のこり惜をしさは犀さい川がはに、
 君きみの頭かしらを得えんもの、
 面おもて包つつみて白しろぎぬに
 君きみはいづくと呼よびし時とき。
 劍つるぎ稻いな妻つま飛とびにけり。
 團うら扇あふ月つき影かげ裂さけにけり。
 またもかざせば駒こま躍をどり、

例詩類分

叙事詩

君と白浪立ちにけり。
 時に望みし君が身も
 今は中々惜まるる
 諏訪の湖底深く、
 我はひとりとなりにけり。
 さてもいくさぞ命なる。
 かたき無くては波白く、
 草を焼くとも山寒し。
 我も今歳は瘦せにけり。
 今ぞ望むは中原の
 君も心はありけるに、
 我も空しく時過し

例詩類分

叙事詩

よその小猿に與へけり。
 いでや、これより八州と、
 北のつはもの皆連れて
 富士を震はす木がらしに、
 京の木の葉を試みん。
 あはれ、雪こそ降り來れ。
 城も砦も破り行く
 途をふさぐは是非もなや。
 天のてだてぞ攻め難き。
 これは織田より、武田より、
 討てど破れて、破られぬ
 敵は空しく、また堅き

例詩類分

有無の間のあやしきよ。
我も破れぬ陣立てて
有無の間も不識菴、
誰ぞや虚空の大將と
呼べは月こそ静かなれ。

〔春雪集〕

劇詩

所謂主客観詩である。北村透谷の『蓬萊曲』嶋崎藤村の『朱門のうれひ』森鷗外の『玉匣兩浦島』吉野臥城の『草月夜』、平木白星の『心中おさよ新七』岩野泡鳴の『海堡技師』などは、即ちこれである。

佐波遅媛

第一齣（節録）

第一場 狭穂彦の館

（彦、空想に耽りて、獨語の跡よろしくある。）

吉野臥城

例詩類分

彦
さきの吾が身は、荒鷲の
亂るる雲を打ち羽吹き、
天軍の列おしわきて、
狂ふ疾風を空に蹴る、

例詩類分

劇詩

威を白日に揮ひしが、
 人界に生れて、小雀の
 竹村離り、千町田の
 足穂の稻を啄むごとく、
 影に怖れて聲ひそむ、
 苦しき息を吐くごとに、
 前生の自由ぞ憊ばるる。
 彼の任那人、相を見て、
 「草に埋るる玉ならず、
 やがて光彩は六合に
 照り瀾らむ。」と、長みき。
 酒甕に秘めし古酒の

例詩類分

劇詩

味深き言の葉に、
 酔うて玉とし砕くるも、
 全き瓦を願はじな。
 (獨笑みつつ膝を打ち)
 さなり、妹に今日こそは
 此の狭穂彦が胸のうち、
 瓜を二つに割るごとく
 割りて訴へめ。——事成らば、
 秋津島根をしるすべく。——
 ああ吾が虫のたかぶりて、
 彼の青雲を望むかな。
 (氣、天を衝き、喜色面に現はる。佐波遅媛登場。)

例詩類分

劇
詩

媛
げにや静けき大御世は、
空飛ぶ鳥もはね軽く、
荒ぶ嵐もあらざれば、
狭山の池のさざ波に
君ことほぎの樂清く、
高津の池の水の面に
映るは千代の姿かな。
かくも治まる草原の
瑞穂の國の蒼生に、
母と崇敬仰がるる
吾が身の幸を喜ぶか、

例詩類分

劇
詩

兄のことに麗しく
笑みかたぶけて待ち給ふ、
顔容に遇ふ嬉しさよ。
眞晝の夢の香に酔ひて、
沈みし精神よみがへり、
高き希望を慕ひゆく
道はひとすぢ、唯汝の
腕を杖と倚頼むのみ。
いかで許すの一言を、
堅く手握り誓はずや。

(思ひ設けぬ言葉に、思ひ感ふ介ありて。)

例詩類分

劇詩

媛
……それは又何と宣ふか。
宮居の庭に植ゑられて、
恵の露に咲く百合の
吾が身に叶ふそれならば。――

彦
高照す日のみひかりに、
もれてうつむく日蔭草、
韻もあらぬ狭穂彦と、
稜威普きすめろぎの
夫の尊と孰れをか
あな愛しと見給ふぞ。
(彦、いと心安からぬ妹。媛、胸中の苦悶を抑へて。強ひて笑顔を作り。)

例詩類分

劇詩

媛
家の兄を措きて、世に
愛しかるは、

あらずとか。
さらば語らむ、吾が妹、
御苑に匂ふ花に見よ、
咲きの盛り香美しき
狭丹顔の色をこそ愛でめ、
やがて朱唇褪せ行かば、
接吻く鶯もあらざらむ。
寵は開き落ちる花に似て、

例詩類分

劇詩

明日の風をも待ち難し。
 いかにかに妹よ危惧の
 御袖によりてあらむより、
 わが謀略——おゝ汝も
 とはに時めき榮ゆべき……。

媛
 その謀略とまをすは、
 兄のため愛情の
 絆を断てとのたまふや。
 産
 寔にわれを愛しと
 思ひたまはば、天が下

例詩類分

劇詩

汝としろさむはかりごと
 謀るに何を躊躇ふか。
 映さば底に輝きて
 顔も映らむ小刀これ、
 虚空に浮ぶ白虹も
 斫りて二つになしつべく、
 八鹽に折りし鋭刃に、
 (愛しき妹よ雄々しくも)
 神の御末のすめろぎの
 御寝まさむを窺ひて、
 その電光を飛ばしめよ。

(八塩折の紐小刀を取り出でて)

例詩類分

劇詩

(授けむとす。媛の手、痛く震ひ、誤り紐小刀を取り落す。
音、憂然として空中に響く。彦、不審の思入。)
(雑誌「心の花」)

散文詩

散文的形式と詩的内容とを有つて居るもので、つもり格調の拘束から脱した詩である。中西梅花の「九十九の廻」、前田林外の『アメリカ彦造の墓』、その他にも幾らもあらうと思ふ。又、近來は、口語體の散文詩が漸く試みられ、爲に詩界に一變化を興へやうとして居る。『甘藷畑』は小説詩と云ふ、一新體である。

山林に自由存す

國木田獨歩

山林に自由存す、

われ此句を吟じて血のわくを覺ゆ。

嗚呼山林に自由存す、

いかなればわれ山林をみすてし。

例詩類分

散文詩

あくがれて虚榮の途にのぼりしより、
十年の月日塵のうちに過ぎぬ。

例詩類分

散文詩

ふりさけ見れば、自由の里は、
すでに雲山千里の外にある心地す。

皆を決して天外を望めば、
をちかたの高峰の雪の朝日影、

嗚呼山林に自由存す、
われ此句を吟じて血のわくを覺ゆ。

なつかしきわが故郷は何處ぞや、
彼處にわれは山林の兒なりき。

願みれば千里江山、
自由の郷は雲底に没せんとす。

〔抒情詩〕

例詩類分

散文詩

動いてる、黒いものが動いてる。
何だらう。

狐？ 貉？ 其様ものでないらしい。
偶ッとしたら、犬か知ら。

犬なら逐ふに譯は無。
と思つて路を急いだ。

吃驚した刹那には、
腹の減つたも忘れてあつたが、

一寸安心して來ると、
へとくと腹の肉が落ちて行く。

吉野臥城

例詩類分

散文詩

最^もう直^ちき其^そ處^こは甘^い諸^も畑^{はたけ}だ！

おや、不思議^{ふしぎ}、

犬^{いぬ}ぢやない。

動^{うご}いた、動^{うご}いた、蹣^{もろ}跚^かいた。

曲^{まが}つた影^{かげ}が縦^{たて}に伸^のび、

幽^{ゆう}霊^{れい}の顔^{かほ}が朦^{ぼん}朧^{りやう}と……。

足^{あし}がある。

足^{あし}は確^{たし}かに地^ち上^{じやう}にある。

耶^や蘇^そ坊^{ぼう}主^すの説^とく靈^{れい}のやうに、

ふわ／＼したものでない。

あゝ人^{ひと}だ！

例詩類分

散文詩

逃^にげな／＼、自^ご分^{ぶん}は怖^{こら}いものぢや無^ない。
矢^や張^{はり}甘^い諸^もを盗^{ぬす}み食^くふ奴^{やつ}。――

あゝ辛^ちと安^{あん}心^{しん}した。

腹^{はら}が無^む上^{じやう}に減^へつて來^きた。

土^{つち}をこしツと一^{ひと}拭^{ぬぐ}ひ、

前^{まへ}齒^ばでがり／＼皮^{かわ}を剥^むき、

大^{おほ}口^{くち}に頬^ほ張^はつた。

旨^{うま}い、旨^{うま}い、實^{じつ}に旨^{うま}い。

甘^{かん}露^ろで舌^{した}が溶^とけさうだ。

腹^{はら}がやうやく満^みちたので、

例詩類分

散文詩

偶と四圍を見廻すと、
人が自分の側に居る。
色白の丸ぼちやだ！
まア美しい女！
若い心をそよるやうな、
髪の香がする。

空は半面雲を帯び、
星がびかり〜眼のやうに光つてる。
暗黒な甘藷畑の向うには、
小川の音がさら〜と夜氣を揺り、
草村で虫が啼く。

例詩類分

散文詩

「貴郎何して被入る？」
女の氣息は喘んで居た。
自分は様子を凝と見て、
「私は甘藷を食つて居る。
して、貴女は何誰？」
何うして居らしたの？」
「妾も頂いてよ、
お腹が空いて堪らなかつたんですもの！」
「お互ですな。はゝはゝ。」
苦笑して、霎時黙つた。

りん……りん……りん……りん……

例詩類分

散文詩

凄い風がざわ／＼、
畑の青葉を吹いて來ると、
毒々しい黒雲がもり／＼と膨れ立ち、
空は一面暗くなり、
ぴか／＼と電
どろ／＼と雷が鳴る。――
今にも雨が降りさうだ。

「あれ怖い！」
女は自分にびったりと寄り添ひ、
「貴郎の被行る所まで、
何卒連れてつて頂戴な。」

例詩類分

散文詩

「えい。――でも私に宿は無、
貴女の家まで送りませう。」
女は自分を凝と見て、
「妾にも宿が無くつてよ。」

「宿が無い？」
今まで何うして居たんです。」
「學校を失敗つて、暗い心の呻き……
自由戀愛……ふと角帽に思はれて、
自炊して居ましたが、
もう喧嘩して別れてよ。
妾に家が無くつてよ。」

例詩類分

散文詩

「えい。私にも宿は無ない。」

「ちや、何どう致いたしませう……?」

あれ怖こい。」

いよゝゝ雷らいは轟とどろいて、

電いなびかりと雷らいとの間あひは一秒びゅうも無ない。

天てんと地ちとが接つきさうだ。

風かぜがざわゝ吹かき荒あれて、

雨あめがぼつゝ降ふり出だした。

「こんなにしては居をられない。」
自分おれは女をんなの手てを腕しかと執とつて、

甘い諸ち畑はたけを駈かけて行く。

と、川がは添そばの小こ屋やに出でた。

灯ひが無ない。

人ひとも居みない。

四よつ手てが空そらしく掛かつて居みた。

寒さむい、寒さむい、身みを切きるやうに寒さむい。

電へうまじりの雨あめが降ふつて來きた。

地つちに喰くひ入いる音おとがする。

水みづをうち割わる音おとがする。

紫むらさきの柱はしらのやうな電いなびかり、

雷らいどろゝと轟とどろいて、

散文詩

例詩類分

散文詩

「えい。私わたしにも宿やどは無ない。」

「ちや、何どう致いたしませう……?」

あれ怖こい。」

いよゝゝ雷らいは轟とどろいて、

電いなびかりと雷らいとの間あひは一秒びゅうも無ない。

天てんと地ちとが接つきさうだ。

風かぜがざわゝ吹かき荒あれて、

雨あめがぼつゝ降ふり出だした。

「こんなにしては居をられない。」
自分おれは女をんなの手てを腕しかと執とつて、

甘い諸ち畑はたけを駈かけて行く。

と、川がは添そばの小こ屋やに出でた。

灯ひが無ない。

人ひとも居みない。

四よつ手てが空そらしく掛かつて居みた。

寒さむい、寒さむい、身みを切きるやうに寒さむい。

電へうまじりの雨あめが降ふつて來きた。

地つちに喰くひ入いる音おとがする。

水みづをうち割わる音おとがする。

紫むらさきの柱はしらのやうな電いなびかり、

雷らいどろゝと轟とどろいて、

散文詩

例詩類分

散文詩

世の絶滅が近いた。

濕ッぽい寒い風が吹き込んで、

電は激しく降りしきる。

電いなびかり 雷かみかみ 悪魔！

光ひかり 音おと 凄じい。

女をんなはがたく身を顫はして、

眩くらと抱きついて離れない。

颯さと走る電いなびかりに透すかして見れば、

白粉おしろい禿はげた蒼あをい顔かほ。

頬ほに當あたる風かぜは寒さむい……が、

例詩類分

散文詩

身みの内うちはねち〜と汗あせが出て、

堪たらなくほてる。

雷らいもだん〜遠とほのいて、

電へも雨あめも晴はれかゝる。

暗ま黒くろだ。
蚊かはブーンと鳴ないて来る。

今いままで氣きが付つかなかつたが、

蚊かにしたゝか食くはれて居ゐた。

痒かゆい、痒かゆい、腕うでが痒かゆい。

脛すねが痒かゆい。

……

例詩類分

散文詩

あゝ辛と安心した。
 腹が何だか減つて来たので、
 甘藷をむしやゝ噛り始めた。
 すると、女も「頂戴！」と、
 嬌焉笑つて自分を見た。

.....

叙景詩

これは客観詩の一種で、重に景色を叙したものだ。叙景詩は俳句に最多く、和歌之に亞ぐのであるが、新體詩には純叙景詩は殆ど無い。

朝顔

吉野臥城

愛の女神のくちづけに
 うちほほゑめる朝顔や、
 清きかうべをもたげつつ
 露の眞珠をよそほひて、
 空に希望の手を伸ぶる
 籬に、あけの星一つ。

〔野茨集〕

叙景詩

例詩類分

叙景詩

嵐來る前
 指揮令に野いくさの始まるを
 伏して待つ兵のやう、
 黙々と平和なる海の町。
 低氣壓、
 動かざり丘の上の
 黒き旗。

平木白星

例詩類分

叙景詩

生乾き、
 あらし来る二分前。
 琥珀空薄にこり、
 風無きに
 逆だちぬ海鷺のうなじの毛、
 重き頭を低く垂れ啼かうとし
 まだ啼かず。
 あらし来る二分前。
 死の色に海うごき、
 ごろごろと

例詩類分

波の底。
 病人は息だはし、人呼べど、
 人は皆定まらぬ眼づかひす。
 暴風來る二分前。

(雑誌「文章世界」)

抒情詩

所謂主観詩で、その名の如く情を抒へたものだ。即ち、戀愛可なり、感慨可なり、旅情可なり、悲哀可なり、歡樂可なり、理想可なり、憧憬可なり、信仰可なりである。特に戀愛のみを歌つたのが戀愛詩、景に依つて情を抒へたのが景情詩、神佛等に對する信仰を賦したのが宗教詩、その徳を褒め讃へたのが頌詩、夫れから思索詩、冥想詩など、小別すれば猶幾多もあるだらうが管々しくは擧げまい。蓋し抒情詩は詩の醇なるものである。新體詩は殆ど抒情詩に盡くと云つても可い。詩集と云ふ詩集は總て之で以て充されてある。

蝶のゆくへ

北村透谷

例詩類分

舞うてゆくへを問ひたまふ、
 心のほどぞうれしけれ、
 秋の野面をそこはかと、
 尋ねて迷ふ蝶が身を。
 行くもかへるも同じ關、
 越え來し方に越えて行く。

例詩類分

抒情詩

花の野山に舞ひし身は、

花なき野邊も元の宿。

前もなければ後もまた、

「運命」の外には「我」もなし。

ひら／＼と舞ひ行くは、

夢とまことの中間なり。

(『透谷全集』)

例詩類分

抒情詩

水静かなる江戸川の

ながれの岸にうまれていで、

岸の櫻の花影に、

われは處女となりにけり。

都鳥浮く大川に、

流れてそそぐ川添の

白堊さく若草に、

夢多かりし吾身かな。

雲むらさきの九重の

大宮内につかへして、

おえふ

處女ぞ經ぬるおほかたの、

われは夢路を越えてけり。

わが世の坂にふりかへり、

いく山河をながむれば。

島崎藤村

例詩類分

抒情詩

清涼殿の春の夜の
月の光に照されつ。

雲を彫め濤を刻り、
霞をうかべ日をまねく
玉の臺の欄干に、
かかるゆふべの春の雨。

さばかり高き人の世の
耀くさまを目にも見て、
ときめきたまふさまさまの
ひとのころもの香をかげり。

例詩類分

抒情詩

きらめき初むる曉星の
あしたの空に動くごと、
あたりの光きゆるまで、
さかえの人のさまも見き。

天つみそらを渡る日の
影かたぶけるごとくにて、
名の夕暮に消えて行く
秀でし人の末路も見き。

春しづかなる御園生の
花に隠れて人を哭き、

例詩類分

抒情詩

秋のひかりの窓に倚り、
夕雲とほき友を戀ふ。

ひとりの姉をうしなひて、
大宮内の門を出で、
けふ江戸川に來て見れば、
秋はさみしきながめかな。

櫻の霜葉黃に落ちて、
ゆきてかへらぬ江戸川や、
流れゆく水靜かにて、
あゆみは遅きわがおもひ。

例詩類分

抒情詩

おのれも知らず世を経れば、
若き命に絶えかねて、
岸のほとりの草を籍き、
微笑みて泣く吾が身かな。

〔若菜集〕

フロレンスの遠望

土井晚翠

雲今西に収りて
天半ただよ黄金の波の
最後の光消えがてに
ポプラ緑の森わけて
はるかに見ゆる萬家の府、
「カステロ、エッキョ」の鐘樓高く

例詩類分

抒情詩

大寺の圓蓋夕に殘る、
 嗚呼美なるかなフローレンス
 煩悶煩惱の人の世に
 ひとり自然のふところに
 はほゑみ育つ天の寵兒、
 天地はここに靈にして
 烟るが如き丘のもと
 花あり、香あり、たくみあり、
 戀あり、歌あり、情ありて
 「完きもの」をここに見る、
 見よ生命の水のごとく
 白練の如く光の如く

例詩類分

抒情詩

緑の谷を貫きて
 アルノ一の流うねり行くを、
 そのアルノ一の水遠く
 我また明日は雲水の
 行方定めぬ旅の空、
 迷の子等の惱ある
 胸にとこしへ行き通へ、
 神韻つねにいにしへの
 朽ちせぬ花に色に香に
 なごりに宿るアルノ一の岸。

※「完し」とはフローレンスの謂也(テイヌ)

(『東海遊子吟』)

例詩類分

抒情詩

金翅鳥王の歌

(天上の花祭を叙へたる)

前田林外

1110

夢は怪しや燦爛と
 長さ八尋にあまりたる
 翅金色の鳥の王。
 我を脊にうち載せて、
 雲は血色の朝ぼらけ
 あるかなきかの軟風に、
 諸羽ふくらめ緩やかに
 天の瑠璃階翱翔るとき、
 君は多慢の僑人
 聽て自在は得るべしと。

例詩類分

抒情詩

その私語や朱の嘴
 觸るるに我は驚きて、
 碧の樹蔭を眺むれば、
 是は面白ろや天女が
 花の冠いだだきて
 早百合、姫百合かざしつゝ、
 稚兒若交り、金銀の
 砂の上を白玉や、
 紅玉縁の裾ひきて
 そぞろに遊ぶ神聖よ。
 ひとり唄へば又ふたり

1111

例詩類分

抒情詩

ふたり唄へば又みたり、
 よつらむつらの歌班が
 花降る影をつぎつぎて
 摩尼を瑪瑙を鏤りばめし
 寶塔遶り且つ唄ふ、
 聖の讃歌やおのづから
 天には天の樂ありて、
 柔婉に響く妙音に
 いといと愛もこもるめり。
 かかる華麗と歡樂を
 視るは今こそ始めなれ。

例詩類分

抒情詩

住みて見ましき離垢土ぞと
 心の底に感じつつ、
 鳥の脊をすべり下り
 仍もその體視へば、
 靈酒匂ふ彩瓶や
 金の杯、眞白手に
 採りては酌みつ、灌ぎては
 祭壇淨む、涓滴よ。
 その祭壇の御前にて
 玉の袖振る花祭。
 いでて迎ふる天使が

例詩類分

抒情詩

艶を誇りぬ天女に、
夢の花束、夢のごと
「美」とぞ呼びつつ、擲ては、
これも「真」とぞ應へつつ
うつつや、花環うち返し、
ここに戲咲とここに戀
光明も永劫の天の國。

嘗て昆耶婆は殿しう
聖經に演べて曰ひけらく。
三十二天、星の上の
虚空は歡喜の聖天とて、

例詩類分

抒情詩

天男、天女魄靈合せ
天華受授しつ、樂むと。
それにぞ似たる靈境か
鞭策は纓絡、羈絆は眞珠。
無量の性も「善」無上
神は神をぞ生るるなる。

我下の界を眸れば
荒れし沙漠に闘ぎつつ、
そこに暫時の平和と
そこに僅少の光榮もとむ。
思へば、我も久遠劫

例詩類分

抒情詩

輪廻幾層苦を経しや。
ああ天翔る靈鳥よ
われと等き人の子に、
汝が靈妙の翅もて
天の快樂は得せしめよ。

なほ念じつつ、枝は枝
葉は葉と向ふ瑞木々の
隙間にニフの笑ふごと
小音流るる川に沿り
是れ水晶と手に掬び
口をも漱め伏し拜み、

例詩類分

抒情詩

ここに美興の花祭
視るを冥加と讃ふれば、
夢は怪しや金色の
鳥も鳥とし幸福讃ふかな。

(「夏花少女」)

『ミロのエーナス』

土井 晚翠

所謂『ミロのエーナス』は一千八百二十年希臘多島海の端ミロの島にてある農夫に發見せられしものなり。學者の考證に據るに、これは紀元前四世紀頃プラキシテレス及びスコパスの派と同時代の作なりとぞ。唯に美婦人のみならず、猶また女神としてアフロデテイを表はしし希臘の彫刻中残りて今日に現存するは獨り是あるのみ。端嚴にして力あり然かも猶いふべからざる青春美妙の趣を含み、其面貌のけだけさは全く人界の慾を離れて悠々自ら足ることを示す。今『ルーブル館』に收めて其最貴なる珍寶の一とす。

(リユーブク及び其他)

石や何等の靈の化ぞ、

例詩類分

抒情詩

紅重く春深く
花魂ゆふべに暮れ迷ふ
玉樓の歌凝りなさは
取らむ有象のあと是れか
端嚴微妙のおもかげに
浮世も塵も影とめず
たとへば深く測りなく
藍を湛ふる波のへに
銀輪かけを照すごと
嗚呼石何の靈ありて
刻むを見るかアフロデテイ。

例詩類分

抒情詩

あゝあゝ高し理想の美
これやアゼンの肩廣き
聖者に見えし幻か
イ、ダの嶺に争ひて
勝ちし報に牧の子に
邪淫許ししそれならず
曙の光に照らさるゝ
薔薇色染む頬の色
花よりにほふ獵の兒に
あこがれ戀ひしそれならず
力ある息貝を吹き
羽ある姿魚にのる

例詩類分

抒情詩

わだつみの子の群の中、
 春南歐のあさぼらけ
 潮の華のうたかたに
 生りしと傳ふそれならず、
 これや五濁の世に遠く
 澄める句へる若やげる
 尊き高き理想の美
 仰げば心遠く遠く
 神秘の息に吹かれ行きて
 雲集る巔に神遊ぶ
 とこよの春の尙あなた、
 天上の霞くれなるの

例詩類分

抒情詩

色に聲ある愛の曲きよく
 夢は銀漢の波に湧きて
 鳳吹長く呼ぶところ、
 下界ゆふべの露に泣く
 幽蘭の香の昇り来て
 星ことく笑む處ところ
 青鸞花を啄みて
 無何有の郷にとびかける
 跡を慕ふに羽たゆき
 暮雲静に聲なくて
 夕の嶺に降るごと、

例詩類分

抒情詩

心再び歸り來て
 みまもるいみじの石の像
 たくみ何等のたくみより
 たゞ渾然の鑿の跡
 刻むか天の産みなせる
 高き理想のおもざしを、
 嫦娥の胸のゆらぎより
 八重の高潮湧き立ちて
 あなたに引かれ寄る如く
 吸ふか眸を石の呼吸、
 石に無聲の歌ありて
 語るは遠き世々のあと、

例詩類分

抒情詩

世もあけぼの、紫の
 雲はなれゆくオリンピヤ
 十二の神のよさしより
 花は不斷の春がすみ、
 露か眞珠かたてがみに
 散す銀馬の嘶に
 聲に歌あるあさぼらけ、
 緑をわけて紅を
 誘ふ流れの行末の
 大わだつみの狂も
 三又の草の神鎮
 神と人との群れ遊ぶ

例詩類分

抒情詩

春銷魂の恨無く
 肉と靈とは仇ならず、
 泉はじめて巖より
 溢れ湧き来る清らかなの
 血の脈いかに高かりし、
 桂の緑橄欖の
 森より仰ぐいや高き
 アクロポリスの頂に
 照りしは花か美か神か。
 あゝ大なるアッチカの
 倒れし跡の死の静

例詩類分

抒情詩

名匠夢のまぼろしを
 觀じ刻める圓柱
 眞白き石は碎かれて
 鳶に纏はれ野に埋れ、
 野に春笑みて降れども
 その妹見えすイリススの
 聖なる谷は鳥去りぬ。
 すぐれし國の姿よと
 歌人傷む行く春の
 曙冷えて幾千年。
 遠く紅砂の原をわけ

例詩類分

抒情詩

椰子の緑の蔭くどり、
 流れて千里大水の
 ナイルの流海に入る
 港再び春を見し
 それはずた夢の一時か、
 橄欖山の夜の暗に
 伏せし至聖の説ける道
 其末流の濁より、
 女神よ君の姿見る
 無垢清浄の花の片
 大路の塵と砕かれて
 暗と醜とに世は泣きぬ。

例詩類分

抒情詩

時か白鷗春に舞ふ
 影は藍光の波照らす
 南海のうへミロの島
 そのわたつみの曙の
 空に虹霓の文染めて
 ひゞきにけらし天の樂
 千歳埋れし美の靈の
 光ふたよび世に照りて
 アフロデテイの影を見し
 その日ことしへ恵あれ。

南海はるか波わけて

例詩類分

抒情詩

こゝに葡萄の紫の
 房かんばしき空の下、
 路に薔薇は蔭かねども
 民の渴仰世の歡喜
 産みてセイヌの岸のうへ
 あと留めしは遠からじ、
 戀に恨に世を泣きて
 世をあざけりて名も清き
 ラインの流渡り來し
 愁の詩人いやはての
 呼吸は神よ御膚より
 にほふ微妙のそよかせに

例詩類分

抒情詩

交へんとこそ願ひしか。
 東海遙か思ひやれば
 鳳鳥いつか飛び去りて
 蕙蘭ながく怨の香。
 世は粉黛の粧さへ
 曉照らす鏡のへ
 雲鬢ながく匂はじを
 あゝあこがるゝ世の祈
 神韻永く香を吹きて
 聖美の影をとこしへに、
 今藝園の花にほふ

例詩類分

抒情詩

セイヌの河の片岸に
とめよあゝ神アフロデテイ。

プラトウ パリス アドニス Sハイネ

(東海遊子吟)

枯薔薇

薄田泣菫

一
乾びぬ、薔薇。あかねさす
花の若えはおとろへぬ。
今はのきざみ、ため息の
香こそ仄めけ、くちびるに。
二
愛でのまどひに何知らず、

例詩類分

抒情詩

面がはりせし人妻の
まみの窠れに消えのこる
日のなまめきを見浮べつ。
三
ふとまた聞きつ、榛樹の
縊葉こぼるゝ木がくれに、
人しれずこそ、會ひし日の
忘れて久のさゝやきを。

(白羊宮)

葉卷のくゆり香

岩野泡鳴

ひそかに君が
つけたる 巻煙草、

例詩類分

抒情詩

葉卷のくゆり

この身に染めてより、

かさねて飽かぬ

出會ひの苦しさをよ。

よそ目を避けて

會ふ度毎に、君、

熱るゝ胸の

ほむらを訴ふとも、

別れし跡よ、

思へば、人の妻。

例詩類分

抒情詩

獨りしあれば、

いよゝく懐かしや、

くゆらす烟の

中より見え來なる――

口びる燃えて、

眸を凝らす人。

眉間のいろ香

拂へど、妄執か――

知力を巻きて

醒むれば、且、凍り、

紅連の熱は

例詩類分

抒情詩

身を焼く阿鼻地獄。

罪呼ぶ聲は

底より響くとも、

はだへは裂けて、

血しほぞ踊るわれ、

君もて遊ぶ。

君、われもて遊ぶ。

互ひのいのち

今更惜まれて、

苦しむひまを

例詩類分

抒情詩

不安

朝は開けぬ事もなく

夜の間に伸びし蔓草の

這ひぬ、大地の濕ひに、

目覚めたる葉は日に向ふ。

我が眼の達く限りには、

雲の動く日の上ると

樂しき夢の世ぞ。

戀こそ籠れ、

葉巻のくゆり香や。

(雑誌「新時代」)

河井醉茗

例詩類分

抒情詩

石柱の根に立つ人と、
世は何事も印象せず。

射向に立てる敵も無く、
伴ひ連るゝ足並の
我のみ暗き危険に、
片寄り行くを安歩む。

女袖には胸隠す
神経質も性ならむ、
出で行く彼方圓蓋の
蔭に才こそはたらかめ。

例詩類分

抒情詩

深川廻り築地行き、
電氣の波の打つ間に、
我が敷石の一片の
抜き去られしを何ぞ知らむ。

火を黙すれば明かに、
光を見れば高らかに、
人迎ふれば親みに、
畏怖混濁は抱かぬを。

いつ後ろより襲ひ來し
「不安」は我を嘲笑りぬ、

例詩類分

抒情詩

失心、みそかに追隨けて、
眞晝、躓く人を見ぬと。

(『豊旗雲』)

感興

雷は青さす玻璃の窓、
友よ花搖る感興に、
いざ杯をあはすべし。
波と溢るる葡萄酒は、
吾曹が血なり、誠なり。
潮うしほと相搏ちて、
色にどよもし西東。

花玉花外

例詩類分

抒情詩

雲、しら雲と相觸れて
嵐も騒ぐ天の舞、
自然は永却に闘へる。
握らば堅く男の手、
分つ再び把るなかれ、
意氣の火の馬をどるとき、
直に摧くも胸の板、
金鐵しらぬ高響。
背合せの國と國、
軋るぞ長き、ああ千年。

例詩類分

甕は破れて血は一つ、
神よ、新に金の甌、
美しに圓う盛れよかし。

(雑誌『中學世界』)

茴香酒

よきかな、此日、舌を刺す

青うるきやうの酒と湧き、

反す光、しろがねの、

聴け、虹の琴——ひとすちに

戀ふる心は弾く嘆く。

『汝を、汝を、

われ得む、汝を。』

(雑誌『新思潮』)

與謝野 寛

象徴詩

佛蘭西の象徴派の詩風を移したものだ。彼の擬人擬物詩とも趣が違ひ、比興詩なぞとも風を異にして居る。諸官能に重きを置いてある所は、この派の特色である。技巧は著しく發達して居る。

みなといり

蒲原有明

浪喘ぐ灣なかば

萎ゆる帆のふかきはためき、

ものうかるさまや、大船、

ちからなく翅垂れぬる。

常夏の小島を離れて、

いく波折、いく日、わたづみ、——

例詩類分

象徴詩

例詩類分

象徴詩

水手はいま眼をあげぬ、
さがあしきこの港いり。

うるはしき積じろ——真だま、
奇鳥の羽、あるはまた
香にたかき果實、びやくだん——
いやさらにかくてもものうげ。

天人の食づらき世に——
はたくらきこの日よそほひ
かざらむの命のふねや、——
真帆ぞ、ああ、喘ぎはためく。

例詩類分

象徴詩

底にこる江の波暮れて
滲びきのこるあをじろし、
黒曜の石をみがける
死の矢こそ飛ばめ、この時。

もたらしし光けおされ、
わきがたし真帆と水手とを、
いづこにか泊てつる船ぞ、
まばゆかるま闇のおくが。

(春鳥集)

蒲原有明

晝のおもひ
晝の思の織り出でし紋のひときれ、

例詩類分

象徴詩

歡樂の緯に、苦悶の經の絲、
縫れてみだるる線の色叫びぬ、さては
眩めき酔ひ痴れてこそ歌ひぬれ。

今夜の膝、やすらひの燈火のもとに
巻き返し、その織りざまをつくづくと
見れば、臍に危げに眠れる獸、
倦める鳥物の象の異様に。

裁ちて縫はさむかこの巾を、宴のをりの
身の飾、ふさはじそれも、終の日の
棺衣の料、それもはたもの狂ほしや。

例詩類分

象徴詩

生にはあはれ死の衣、死にはよ生の
空焔のほひをとめて、現なく
夢はゆらぎぬ、柔かき火影の波に。

(雑誌「新思潮」)

例詩類分

十四行詩

行數によつて名づけたのである。Sonnetの形を我に移したのであるが、押韻などは思ひもよらぬ。薄田泣菫は絶句、岩野泡鳴其他の詩人は短曲と稱して居る。

泉

薄田泣菫

樹蔭の泉に誰を見てもか、
可憐や少女も水も掬まず、
顔うち赤らめ疾く去るとて
水盞碎くな、道は狭きに。

夏の日山路に九里を馳せて、
都の旅人渴きたるに、

例詩類分

戀塚

前田林外

顔よき少女よ、情あらば、
せめては投げても柄杓貸せよ。
湧き散る泉に深く掬みて、
重なる歎きを忘れ得なば、
水盞抱いて君と共に、
吾世を榎のかげに老いむ。

ああこの泉とわが情と
共にし掬まはは幸あらずや。

（『ゆく春』）

例詩類分

十四行詩

想は萎えたり、情は冷えぬ。
かかる世、たれかは哀となりて、
日にけに廢るる此の戀塚に
埋れし清きを、熱きをしのぶ。

二六八

少年よ、少女よ、微笑みてうけ、
句へる白百合ふたもとささぐ。
ふたりが肉艶ふたりが柔音、
ひとたび我が耳、我が目にも入れ、
戀草、鴨跖草、枯れては萌えて、
歳こそ數百をはやも隔つれ、
ふたりの心はその代のころ、

ふたりのすがたはその代の姿。
むかしを思ひ出、思は盡きず、
ここにぞ一夜を寝てもみまほし。

(花妻)

苦悶の鎖

岩野泡鳴

例詩類分

十四行詩

ああ、君、苦悶をいだいて逝きぬ、
わが身はなほそを胸にし生くる。
生くと死ぬるは、例へば影の
その身に添へると、添はぬに似たり。
父母より受けたるこの世のもたえ、

二六九

例詩類分

十四行詩

一息ひといき 毎ごとにも いのちを 刻きざみ、
その音おと 天地てんちの 間あひだに 落おちて、
久遠くゑんの さざ波なみ その輪わを ひろぐ。

ああ、君きみ、 その輪わの ひろがる なべに、
底そこなき 記憶きおくの 淵ふちにや 沈しづむ。
わが手てを 延のべて 救すくふと すれば、
残のこるは まぼろし—— 苦悶くもんの 鎖くさり。
延のび行く その端はし、 君きみ、 今いま 陰府よみに、
われ 他たの端はしをば こなたに 握にぎる。

〔悲戀悲歌〕

いたくなせめそ

小山内 薫

例詩類分

十四行詩

緑葉みどりばは鳥とりのおくつき、
みどり葉はは鳥とりの子この宮みや、
われめでし鳥とりは逝かれて、
かれめづる鳥とりは生うまれぬ。
月つき姫ひめのみことのままに、
そこに死しにそこに生うまれて、

緑葉みどりばに入いらむとしては、
「戀こひしや」と、われに 一ひと聲こゑ。
緑葉みどりばをくぐり出いでては、
「戀こひしや」と、われに 一ひと聲こゑ。

例詩類分

十四行詩

新しき身にしあなれば、
新しき聲も聞きなむ。

ほととぎす汝を恨まば、
月姫の光も絶えむ。

〔小野のわかれ〕

律詩

漢詩の律を摸した詩形で、全篇八行より成り、二對句より成つて居る。一行は七五でも、八七でも、乃至は五七五でも七七五でも何うでも關はぬ。又各行必ず整一ならずとも可い。又、香奩體風に隔句對にしたものもある。ともすると對句の技巧に走つて、内容が貧少になり易い。これは注意すべき點である。

秋夜

土井 晚翠

夜半の窓に秋雨きよて、

思に沈む燈火の姿、

青春昨日の望さめねど、

紅顔いつまで榮を誇らん。

落葉いくひら無韻の哀歌、

衆星いくたび宇宙の生死。

ポーツマウスの「光榮」を、

律詩

例詩類分

律詩

泣きしも夢か、嗚呼日は移る。

(雑誌「太陽」)

吉野臥城

さらば別れん

さらば別れん、木精よ、戀よ、

空しき影に住みぞ詫びぬる。

谿の小流石瀬に咽び、

山の榎乾葉時雨にさわぐ。

忽ち晴れて虹の環かかり、

やがて暮れゆく風の音寒し。

君と別れて東に去るも、

「光」に逢はむ我ならなくに。

(雑誌「中央公論」)

民謡詩

民謡の趣味と民謡の格調とで以て成立つたものだ。方言、俗語、普通語を按排して居る處が普通の詩と異つて居る。彼を雅語詩と云ふなら、是は俗語詩であらう。薄田泣菫、前田林外、吉野臥城等は最も多く試みて居る。

税吏

前田林外

例詩類分

民謡詩

お春戸の
竹藪に鶯鳴いて
あたくかい。

バタバタ

例詩類分

民謡詩

チャンコロリン、御精がお出やる
いつきても。

紅梅

紅梅はや綻びた

紅さいた

あれ

雲が出た、雨風吹いたら

なんとしよう。

けふこそ

例詩類分

民謡詩

たのみます、染めわけ襦
はづさんせ。

おゝいやよ、梭の運びが
遅くなる。

それに又、許嫁ある

わたしなり。

臺南の守備兵やめて

その人は、

遅くても、五月の半

かへらるゝ。

二

例詩類分

民
謠
詩

白しろいは
太た七な子こ、縞しろは銘めい仙せん
このごろを。

われく
手てをつくし、しかとしらべた
脱だつ税ぜい者しや。

おまへの
織おりかたは桐きり生が、足あし利が
いつ習なろた。

例詩類分

民
謠
詩

嚴げん罰ばつ
苦くしいぞ、それが嫌きらなら
今いまの今いま。
ゆかしい
梭をの音ね、梭をの句こひが
戀こひちやもの。

生せい活くわつは、この日ひ過すぎがて
老おいし伯おや母はは。
あさがたを、薪たきとるとて
小こ松まつ山やま。

例詩類分

民 謠 詩

ともかくも、おまち下さい
かへるまで。
伏して泣く、わしが織つたは
悪運と。

(雑誌「趣味」)

茶摘唄

夏が来るたび歸るといやる。
故郷はよいとこ新茶のでどこ
若葉かがやく活日の真晝、
聞こよ戀唄、歸るといやる。
歸る、歸ると聞くたび胸は、

吉野臥城

例詩類分

民 謠 詩

山のふかさや、
情の人の

木曾をとめ。
花の数そへ、
来たをりよりも

木曾少女

辛い生活にちぎるる思、
さまがいやるよな好い故郷ならば、
私も行きましよ、お茶摘に。

(雑誌「太陽」)

蒲原有明

例詩類分

民謡詩

かけた笥の水もよい。

おろく櫛かよ、
もろたか誰に、
髪にさいたる
品のよさ。

黄楊の樹にもならば
櫛にも挽かりよ、
あだしわが身の
あすならう。

例詩類分

民謡詩

木曾はよいところ
尚香畑
君がはだへも
句やかに。
奈良井どまりか
峠は暮れぬ、
さうは急がぬもの
旅の人。
歸る今こそ
来たをりよりも

例詩類分

民謡詩

花の色そへ、
木曾をとめ。

(雑詠「詩人」)

扇

都の人

背の草籠白百合匂ふ、

にほふ姿は百合よりも。

野の女

野良に咲く花色よいけれど、

さまの言葉にや及びやせぬ。

都の人

美しい花情の露に

吉野臥城

例詩類分

民謡詩

濡れて靡くよ、微笑添へて。

野の女

露の情のない里とても、

月夜鴉にや夜は明けぬ。

都の人

さまは野川の青澤瀉よ、

風がさそへば首を振る。

野の女

わしが心は端山の薄、

風に吹かれて月招く。

都の人

そつと汲みとる野中の清水、

うつすは百合の花ばかり。

野の女

裏も表もない涼しさや、

いつも扇のかせがよい。

(雑誌『中央公論』)

例 詩 類 分

譯 詩

外國の詩の翻譯である。『海潮音』の外、尾上柴舟の『ハイネの詩』、片上天絃の『テニソンの詩』、其他頗る多い。

燕の歌

上 田 敏

彌生ついたちはつ燕

海のあなた静けき國の

便もてきぬうれしき文を。

春のはつ花にほひを尋むる

ああ、よろこびのつばくらめ。

黒と白との染分縞は

春の心の舞姿。

例 詩 類 分

例詩類分

譯詩

彌生來にけり、如月は
 風もろともに、けふ去りぬ。
 栗鼠の毛衣脱ぎすてて、
 綾子羽ふたへ、今様に、
 春の川瀬をかちわたり、
 しなだるる枝の森わけて、
 舞ひつ、歌ひつ、足速の
 戀慕の人ぞむれ遊ぶ。
 岡に、摘む花、堇ぐさ、
 草は香りぬ、君ゆるるに、
 素足の「春」の君ゆるるに。

例詩類分

譯詩

けふは野山も新妻の姿に通ひ、
 わだつみの波は、輝く阿古屋珠。
 あれ、藪陰の黒鶉、
 あれ、なかに空に楊雲雀。
 つれなき風は吹きすぎて、
 舊巢脚へて飛び立りぬ。
 ああ、南國のぬれつばめ、
 尾羽は矢羽根に鳴く音は弦を
 「春」のひくおと、「春」の手の。
 ああ、よろこびの美鳥よ、
 黒と白との水干に、

例詩類分

譯詩

舞の足どり教へよと、
 しばし招がむつばくらめ。
 たぐひもあらぬ麗人の
 イソルダ姫の物語、
 飾り畫けるこの殿に
 しばしはあれよつばくらめ。
 かづけの花環ここにあり、
 ひとやにはあらぬ花籠を
 給ふあえかの姫君は、
 フランチェスカの前ならで、
 まことは「春」のめがみ大神。

(ダヌンチカ—「フランチェスカ・ダ・リミニ」) 『海潮音』

諷刺詩

名の示すが如く諷刺である。婉曲に、はた滑稽に、辛辣に物して、露骨に失せざるを以て上乘とする。山田美妙齋の「醉沈香」、與謝野寛の押韻詩「鼻」などは即ち夫れである。

猿芝居

吉野臥城

やんや囃せよ笛太鼓。
 詩歌めでたき初春の
 神を讚する猿芝居、
 猿なればこそ舞ひもすれ。
 やんや囃せよ、長屋衆は、
 尻に卵の殻負ひて
 黄色い嘴のひよこひよこ

例詩類分

諷刺詩

例詩類分

諷刺詩

頭をさげよ、有り難く。

やんや囃せよ、笛太鼓。

現れ出でし一の猿、

馴れぬ鼓をでかだんと

打つや、いようと褒めそやす。

やんや囃せよ、長屋衆は、

その調べなら、身振なら、

完きもの一つぞと、

互に和せよ、同音に。

やんや囃せよ、笛太鼓。

例詩類分

諷刺詩

やんや囃せよ、笛太鼓。

又現れし三の猿、

次で出でたる四の猿は

濡れを演じぬ、しんぼりと。

こたび出でたる二の猿は、

技巧の扇さと開き

舞へば、いようと褒めそやす。

やんや囃せよ、長屋衆は、

進むも引くも法に合ひ、

腰のくねりの品やかさ、

涎流ると目を下げて。

例詩類分

やんや囃せよ、長屋衆は、
 ああかくてこそ「痛切に」
 「深い」「觸れた」と云ふべけれど、
 唾嚙み下し、同音に。

やんや囃せよ、笛太鼓。

詩運めでたき初春の

尻を讚する猿芝居、

やんや囃せよ、長屋衆は、
 猿なればこそ舞ひもすれ。

真似こそ物の上手なれ、

古き人等は黙殺と、

肩肘張りて、聲高に。

(雑誌「太陽」)

印象詩

直観し、直感した其儘を、何等の技巧を用ゐず、何等の彫琢を加へないで詩にしたものである。併し乍ら詩人の筆になつたのである以上は、技巧以上の技巧の自然に加はつてゐる事は云ふまでも無い。

海雲

平木白星

むかし見たりし雲なり、

麻葉綉毬に似た雲、

むつくりむくりと沖から

輪に出づる三つほど。

むかし見たりしかの雲、

思ひ出す、那古にて

例詩類分

例詩類分

印象詩

心はよそに雲見る
まつ毛長き二重瞼。

明滅

ランプが光る。
眩しく光る。

(雑誌「文章世界」)

吉野臥城

瞬いた。
死の氣息が通ふのかと思つたら、
風だつた。

ホヤの中を、

くるくると渦巻きめぐる油煙。――
夫れが薄れて了ふと、
ばつと又眩しく光る。

じいくと心が鳴る。
段々暗くなつて行く。

(雑誌「趣味」)

例詩類分

印象詩

餘材

新體詩假名違例

ああ戦の世となりぬ——と冒頭に置き、トルストイ伯やら何やら擔ぎ出して、露國の偉大を嘆稱する所謂文士とやらもあれば、やれ義戦だの、黄禍説は取るに足らぬ妄説だのと、一世一代の汗を流して鐵拳を握り詰める記者先生もある今日——流行語で言へば、即ち軍國多事の今日——こんなことを詮索するでもあるまいに、そこが大國民の襟度とやら、晝寢のさめた徒然つねづねに書き蒐めたる藻鹽草といへば、七五調の流麗はあれど、ひきしまつた所はないなぞと、人様の新體詩を批評申す時文記者氣質は嫌ひな閑人、時文で飯食ふ男でない腕前は恚いうしたものかと、文壇を驚し奉る所存では毛頭御座いませぬ。唯極△△△△△△めて忠實に、極△△△△△△めて熱心は、彼の何社かの「矢文」にあつたやうに、その責任△△△△△△を負うて、うん／＼唸りつゝ編輯したもので御座います。が、淺學菲才の閑人で御座います上、万年、鷗外、矢一諸

餘

材

餘

博士の校閲を経ぬことですから、誤植も山々あるで御座いませう。「日曜附録」の評壇でなりと指摘して頂けば、過分の原稿料も差上ないで済み、お互に結構至極のことで御座います。

材

一 湯淺吉郎作「七海」

此のお方の詩集には、えら評判の『半月集』と申すが御座いますが、廣告でばかり読んで見ましたが、幸ひ座右にはありませんから、近來『讀賣新聞』に出てゐる「七海」より例を引きませう。非常の長篇と申しても露伴の『心のあと』より短いさうですが、何しろ連日出てゐるのを、連続して目を通すのも七面倒ですから、七月二十七日所載の紅海の章だけで、御免を蒙るで御座いませう。

いかなる罪のむくゐにや
にへたつ海の音たてて
ほのふ舌とおもはれて

むくい
にえたつ
ほのほ

水天一色あはくと

人こそ知らぬ我目には

暑かりしとて

ふきつゝ笑ひあましけり

あをくと

人こそ知らぬ

暑かりきとて

いましけり

以上は、ほんの一例で御座いますが、まあ是程までに（△印を附した通り）甘く用ゐれば、新體詩の大家として耻ぢぬのださうです。尙、丹塗に對しては黄塗とやうに、新造語を可成多く使用することも、大家たるべき一の條件だと申すことです。

餘

二 嶋崎藤村著「一葉舟」

一時詩壇に盛名を馳せ、此の人なくんばとまで、氣早の連中に擔ぎ上げられたので御座いますが、今は信州小諸の里に教鞭を執つて居られるとばかり、とんと其の詩作に接しませぬ。が、腐つても大家で御座いますから、其の用法も亦珍妙を

材

餘

極めて居ります。例を引かぬのも氣の毒の感ありですから、『一葉舟』初の數頁より抜きませう。

材

醉[△]ふてくづるゝ夏の夢
 赤[△]すじたてる大爪に
 承毛は白くやわらかに
 髀[△]に甲ををくごとく
 おとをみそらに残しをき
 闇さあらしのおさまりて
 水はいづこにうせつらむ
 やがてさかへんゆくすへの
 なれものすへにまよふみか
 耳なきわれをとがめそよ

醉[○]うて
 赤[○]すぢ
 やはらかに
 おく
 おき
 をさまりて
 うせぬらむ
 さかえんゆくすゑの
 のすゑ
 なとがめそ

餘

同じしらべにたえかねて
 うたのこゝろのかよわねば
 或は活版小僧の、此の大家を助けて、ますゝ其の美を成させた點が無いとも限るまい。併し、御手際の程はこれにて大方窺ふを得べしでは御座いませぬか。

三『帝國文學』所載の軍歌

近頃やんやの好評を博したる大傑作「我兵見よやロシヤ國」(上田万年)、「祝捷行進歌」(芳賀矢一)の二篇と、それから土井晚翠の「征夷歌」に就て、一寸した例を擧げて見ませう。

材

二千年來きたへたる……………上田万年
 鍛[○]ひ上げたる日本魂……………芳賀矢一
 鍛[△]えし忠魂示さん時ぞ……………土井晚翠

これは、讀者の判斷に任せます。『天地有情』からも例を引かうと思ひましたが、

餘

讀者の既に知る所ならんと存じて略します。

四 薄田泣菫著『暮笛集』

材

此の處女作を以て、一躍して大家の例に加はつた詩人の作で御座いますから、何れ傑作たるに相違は御座いますまい。が、新進の詩人だけに、藤村、晚翠の二大作家に比べると、珍妙な假名違も少く、随つて例に引くべきものも多からずです。さりながら、折角喝采を博した若き大家をぬきにするもお互に遺憾ですから、二の例を示しませう。

袖のかほりを鼻に嗅ぎ

かをり

汝が舌をな試みぞ

な試みぞ

智恵の瞳なめぐらせぞ

なめぐらせぞ

涙なかけぞ春の日の

涙なかけぞ

身のあやまちを悔ひ泣けど

悔い

袖のかほりにめぐりゆく

かをり

ふりさげ見れば紫の

ふりさげ

それから附け加へて言つて置きますが、この詩集は、總振假名で、誰も讀めるやうに出來て居る。その振假名も一寸面白い。即ち、後姿（うしろで）、笛（ふゑ）、縁（ゑにし）などで御座います。最も「縁」の振假名は、藤村そのままです。特に此の詩人の新機軸を出さうとしてゐるのは送假名で、拱ぬけば、埋もらせて、珍らしき、罵しる、懐かし、短かき、漂よへる、など今後の造詣測る可からずですな。

（珍芬閑人、三十八年八月『新韻』所載）

餘

材

餘

明治三十七年の詩界

▲日清戦争當時の詩界に比すれば、非常の進歩だ。外山博士等が新體詩の名稱を唱へ出してから十四五年も眠つて居た、否世に顧みられなかつた新體詩は、日清戦争の終結後漸く頭を擡げて來た。而して更に十年を経たる今日、興國の新氣運と共に大なる發展をなさんとしてゐる。何と喜ぶべき現象ではないか。

▲新體詩の眞に新しい曙光を帯びたのは、藤村以後である。其の以前は幼稚な作のみで、誦するに足るものは殆ど無かつた。名のみの新體詩であつて、想は須らく言はずとするも、その格調の如き、長歌、今様と異なる所は少しも無く、唯生硬蕪雜なだけが僅に新しかつたのである。この時代にあつて、多少名の顯れた詩人の無かつたでもないが、ほんの道樂にやるといふ傾向があつて、殉教者の精神を立つものは一人もなかつたらしい。詩人といはんよりは寧ろ死人で、新體詩の悲運

材

と共に詩より死んで仕舞つた。

▲本年に入つて出版された詩集は、藤村の『藤村詩集』、白星の『七つ星』、心中おさよ新七、鐵幹晶子の『毒草』、逍遙の『新曲浦島』、花外の『花外詩集』、泡鳴の『夕潮』、柴舟の『銀鈴』などである。『藤村詩集』は、渠が既に公にせし『若菜集』以下の諸集の詩篇を集めて一冊としたもので、序文と挿畫だけが新しい。云はば前年の詩界の遺物であるから細評はせぬが、唯一言して置きたいのは、今この集を取つて讀むに、なほ更に新しき響を聞くが如く流石に捨て難い。藤村の詩は到底青年の詩である、煩悶の詩である、戀愛の詩である。煩悶や戀愛や、これ渠が詩の生命である。渠はこれ以上を歌ふには、その調あまりに弱くある。渠は此の詩集を青年に獻じて詩壇を退くといふ、詩壇の爲には洵に惜むべきであるが、藤村の名の爲には又止むを得ないことであらう。予は必しも藤村が、新體詩と終始するの榮譽を得なかつたことを責めはせぬ。

餘

材

餘

▲『七つ星』は、左程注目する價值のあるものではない。『心中おさよ新七』は、前年『片袖』に收められて、公になつたもので、其の時とかくの評があつたもの故、改めて評すべきものとも思はない。『夕潮』は、好評は得なかつたが、某新聞の罵つた様に「拙劣讀むに堪へない」程の代物でない、儘に注目すべき作と思ふ。如何にも其の調が拮据で、議論文を讀むよりも肩が凝るので、些の諧調がない爲に、あたら冥想派の詩人の作を忠實に讀んで呉れる者のないのは遺憾である。史詩「豊太閤」の如きは、其の甚しい例である。

材

▲『夕潮』を格調の上から言ふと、八七が十篇、七五と六四が各七篇、八六が二篇、七七と五七とが各三篇、七六と七三と五五が各一篇であつて、殆どあらゆる體が網羅されてある。洗鍊を要すべき作の少くないのは誰しも認むる所であるが、是程迄に苦心し、研究してゐる作者の精神は十分に買つてやつてよい。六四調の如きは餘程圓熟してゐる。

餘

▲固より詩は、調によりて作るべきものでなく、想の迸出するまゝに調を成すべきものたるは勿論であるが、さりとして詩である限は、調の如き、節の如きにも、大に注意しなければならぬと思ふ。必しも一篇の詩（殊に長篇なる場合）を始から終まで、七五なり八七なりで通さなければならぬと云ふのではないが、變化あらしめ、波瀾あらしめる爲に、一篇の中に七五を用ゐ、七七又は八六を混用することも餘程研究すべきことではあるまいか。それから同じ七五調にしても、音と音との斷續、贅詞の省略、句讀點の運用等に一層の力を致したならば、『古今』の長歌のやうな、のつべりした調を免るゝことが出来るだらう。八七などは、分けて角ばらぬ様にありたいものだ。

材

▲今の新體詩家の多數は、キーツやロセツチの作を摸倣し、さなくばハイネに酔ひ、或はシエレーを崇拜してゐる。新しい思想を歌ふ明治の詩人としては、是等の詩人の作を愛讀し、研究すべきことは勿論であるが、自國の詞で國詩を作る以

餘

材

上は、よく自國の詩歌を研究し、深く自國の言葉を調ぶべき必要が大にあらうと思ふ。『萬葉』や『古今』や『新古今』ばかりでなしに、近く蕪村や太祇の句集をも攻めて貰ひたい。併し、晶子のやうに鶉吞にして、すぐ吐き出されても一寸困るが……まあ随分得る所があらう。

▲予は一つ『夕潮』の假名の誤謬を指摘して見やう。きわ立つ、追ふて、やわらか、無間の上をさへ、小悶へ、翁のゐます、強いて、いませし、など、ほとんど頁毎にある。又、送振名の御鄭寧すぎて煩しく感せらるゝを二つ三つ擧げて見れば、歸へらむ、示めず、返へる、尊ときの如き、あまりに甚い。次に、調に詰つた苦しさに用ゐたと思はれるのは、小悶、小虹、小あらし、小入江など、盛んに小を用ゐて居る。小流、小暗きなどは難がない。詩を公にする以上は、這麼ことにも細心の注意がして欲しい。

▲かゝる假名ちがひ（多くは動詞の活用を誤れるもの）、あまりに送假名の煩しき（二は詞の活用する部分のみを送らざるもの、一は居名詞合名詞等に送るもの）は、ひとり泡鳴に限つた譯ではない。藤村は最甚しく、晚翠、泣菫などにも随分ある。素より韻文は散文とは違ふから、一から什まで文法に拘泥せよは言はない。或場合には破格を許す、但そは調の上に至大の關係を及す時に限りたのである。予のかく文法家的の口吻を以て、諸家の作を評したのは、此の微瑕あるが爲に、思はぬ害を蒙ることあるべきを憂ひ、衷情を以て忠告するのである。

餘 材

▲有明の詩は、同じ詩人仲間でも解り憎いさうであるから、一般讀者に解らぬは勿論である。かく詞を晦澁にし、朦朧にすることが、渠の苦心の存する所とあれば、それ迄であるが、少しく省みる所あつて然るべきだ。予は渠に對して西洋詩形を眞似たり、想を拜借したりすると言ふのではない。渠が格調に於ける苦心と獨創の手腕とは尊重するが、其の作の多くは感服し難きもの而已である。いかにも詞は瑰麗で、ロマンチックで、目前の花やかな文字が並んで居るが、讀み去り

餘

読み來つて一篇の意の奈邊に存するかを疑ふことが少くない。「沈丁花」(『曉聲』所載)の冒頭の四行の如きは秀句であるが、奥に進むに従つて分らなくなる、讀み了つて狐に魅せられた様な感じがする。唯有明に多しとするは、取材の範圍の廣いことで、神話などを短篇中に詠みこなしてゐる所は誠に甘いものである。此の派に屬すべき新進の作家は「夏花少女」の林外であらう。凝らないだけが有明よりは善い。佛典などを引いて居る作は、毛色が變つて面白いが、鐵幹ほどに氣が利かない。假名ちがひがあるのは御氣の毒だ。啄木といふ少年の作には「五月姫」「江上曲」など見るべきものもあるが、多作の割合には駄目ぢや。

▲歌劇に關する評論と創作とを最多く紹介したのは「白百合」で、詩壇に少からぬ反響を與へた。その急先鋒は田中正平で、これに和したのは逍遙で、『新樂劇論』の單行本を出し、『新曲浦島』を出した。是より先『白百合』には、臥城の「白金小櫛」、水島爾の「幽界の曲」、『帝國文學』には柳外の「佛陀の戰」がある。あま

材

り褒めた作でもないが、その先鞭をつけた功は没すべからずぢや。も一つ、嘲風のワグネル熱を吹かしたのも忘れてはならぬ。

▲本年の詩界で最評判のよかつたのは、逍遙の『新曲浦島』と露伴の『出廬』で、専門の新體詩家も後へに瞠着せしむべき作とある。凄じいものだ。『新曲浦島』の舞臺面の成功如何は措いて、單によみ本としても面白い作だ。その價值は、わが日本文學史上の謠曲と並ぶべきものであらう。或人曰く、「錦欄のつぎはぎを見る様だ」と。稻門の秀才曰く、「曲中に現れたる人生觀を見よ」と。この書出でて、評壇の寂寞を破つた事は事實である。

▲『出廬』を評して、「始めて國詩に接す」と言つたのは宙外であつた。これ宙外の國詩に暗きを自白するに過ぎないので、少しも『出廬』の價值を増す所以とはならない。『出廬』に見るべきは其の想で、修辭は未^{いまだ}しである。言はば詩としての未成品で、なほ數段の推敲を要すべきものである。あゝ之を以て詩界の珍品と推

餘

材

餘

獎せざるべからざるに至つては、老の涙が零れてならぬ。半月の「七海」は之よりうは手ぢや。

材

▲單調との評は免れまいが、振假名をしなければ夫れと讀めぬやうな、所謂俗耳に遠い詞がなく、おつに氣取つた所がなく、天真流露なる所愛すべきは、花外の詩である。されど『花外詩集』を公にして以後、漸くだれ氣味となつたのは惜むべしぢや。

▲十一月の末、晚翠は歐州より歸つて來た。わが詩壇の爲に意を強うするに足る。「南歐銷魂吟」「征夷歌」「フローレンス遠望」其の他數篇の詩が公にされたが、「南歐銷魂吟」を除く外は、傑作と稱すべきものでなかつた。注目すべきは三十八年の作だらう。

▲泣菫の「天馳使の歌」は、甲辰の詩界の白眉である。『暮笛集』『ゆく春』時代に比べると、其の着想に於て一變し、筆致も圓熟して來た。但、首かたぶかれる泣菫一流の造語が鼻についてならぬ。「霜月の一日」「如月の一夜」など、暮になつて續々現れた。朦朧に陥らんとする傾向が見えて來たが、どれもよく力がいつてゐる。

▲『毒草』の中で勝れた新體詩は、鐵幹の「哀歌」である。よく古語を驅使して、これ程までに作成した手腕は蓋し凡ならずだ。

▲以上の外、見るべきは泡鳴の「鳴門姫」、臥城の「佐波遲媛」「黎明曲」「牧歌」「天緒琴」、露葉の「戦鬪の詩」、鐵幹の「大沼姫」「鶏の歌」、白星の「魔出現」「開闢」、月郊の「赫夜姫」、平野流香の「天飛ぶ雁」などであらう。醉茗は甚振はなかつた。

▲『ホトトギス』に俳體詩といふものが現れたが、幼稚で、平凡で、讀む氣にもならない。漱石のなどは、新體詩と異なる所がないぢやないか。

▲一つ昨年の『百合』の響に倣つて、手前味噌を摺らう。短歌に於ては、新詩社の奇を弄さなくなつて來て、萬葉調を加味しようと思つて居ると、竹

餘

材

餘

柏會の愈平板單調に流れんとするのと、柴舟躬治等一派の進歩と、わが新韻會の新傾向とは、大に注目すべき現象である。竹柏會の作には叙景多く、其の他の各派は總じて抒情に傾いてゐる。

材

▲佐々木信綱は、清國より歸つて「南清游草」を公にした。中には散文的なものもあつたが、多くは實景實情の歌で、誦するに足るものも少くはなかつた。「新潮」「戀姿」等には、其の想、其の調に、在來の作とは毛色の變つたがある。渠の作は『おもひ草』に於て一變し、更に再變せんとしてゐるのであるまいか。

▲柴舟の『銀鈴』は、佳作に富んでゐる方であるが、已ばかり詩人ぢやと言つたやうな作があるので、うんざりする。西詩の面影があると稱せらるゝ作は、なほうんざりする。花束の雨などの句を見て、隨喜する歌人もあるだらう。晶子が鬼才なら、薫園は凡才ぢや。

▲晶子の「君死に給ふこと勿れ」では、『讀賣』の劍南と『太陽』の桂月とが熾んに

論争してゐる。本文より註釋の方が面白いと云ふ譯さ。

(新韻會同人、三十八年一月『新韻』所載)

餘

材

餘

『東海遊子吟』と『あけぼの』

▲花栗が咲いて、皇月雨の小歌みなく降る頃でした。私は二つの新しい詩集を手にしました。一つは土井晚翠兄の『東海子吟』で、一つは佐々木信綱兄の『あけぼの』です。共に私が畏友として兄事して居る著者から何か評せよとて贈られたのでした。一わたり讀んでは見ましたが、特別に批評の筆を執る閑が無かつたので、思ひながら延引しました。今日となつては、もう栗の花も散つてしまひ、萬葉の鰻を食つて長生すると云ふ土用の丑の日も過ぎ、扇の風に親しむべくなりました。唯私が此の二つの詩集を讀んで感じたことを、最も率直に、無遠慮に申し述べませう。

▲晚翠兄の第一の詩集は『天地有情』で、第二の詩集は『曉鐘』です。この『東海遊子吟』は即ち第三の詩集です。島帝國裡に在つて西の邦の詩華に憧れて居た青年

材

が、四星霜の間みづから彼の地を踏みて文化の流に掉し、目に至高の藝術を仰ぎ耳に古の詩聖が囁きを聞き、感興の溢れて詩と成つたものは此の集でせう。或意味に於て此の詩集は、バイロンのチャイルド、ハロルドだと申すことです。本邦の韻語を以て書いた泰西紀行です。その類の少いのも、此の詩集を賞讃して可いと思ひます。

△晚翠兄は技巧の詩人ではありません。思想の詩人です。象徴派の詩人ではなくて、寧ろ冥想派の詩人です。技巧は素より渠の間ふ所ではありませんが、決して技巧を輕んじ、之を度外視するやうなことは致しませぬ。詩は技巧に待つ所あるは無論であるからです。實に技巧を超越して居るのは、渠の詩の特色です。現時の弊は纖弱平板、朦朧にして脂粉の氣多く、含蓄に乏しく、氣韻に缺くる所があることです。一言以て渠の詩を評すれば、壯大、高遠です。弊は佶偈贅牙で、難解に陥ることです。而して、長篇は渠の得意とする所でありまして、短篇は渠の

餘

材

餘

短所であるやうに思はれます。併しながら、今回の『東海遊子吟』には案外短篇に可いのがあります。

▲短篇で、勝れて居つて、而もよく晚翠調を代表するに足るものは「ノートルダム」でせう。今全文を引用します。

材

あゝ^{△△△}悽愴の目を舉げて
見^{△△△}ずや無月の暗にたつ

「ノートルダム」の塔二つ、

沈黙^{△△△}に聲ありて

幽冥の世より遠く吹く

あらし夜半に何の歌。

霜に星象の色冴えて

餘

高^{△△}し天狼のまたゝく火

みどりは万^{△△}古何の世に

震^{△△}ひ初めし光ぞや、

巨^{△△}塔しづかにうなづきて

語^{△△}るかわかき九百年。

あゝ^{△△△}おほなる暗と空

神^{△△}秘のうちにたゞずめる

人はた何の靈ぞ、曰^{△△}へ

有^{△△△}限無限の別ち絶え

有^{△△△}象無象の聲まじる

「ノートルダム」の夜半の塔。

材

餘

詩句中△印を附したるは、集中に屢用ゐられた語で、○印を附した漢語は晚翠兄獨特のものである。今日の新體詩家で斯く多くの漢字を用ゐて、些の耳ざほりをしませぬで、却て一種不言の趣致を感せしむるは他に一人もないと言つてよくあります。

材

▲も一つ短篇で可いのは「松島」です。松島の眞の美は大高森です。男性的の松島を觀んとするものは大高森に登らねばなりません。實に大高森は、松島四大觀中の隨一です。渠はこの頂に立ちて一詩を賦したのです。

あすは万里の外の旅

故園なごりの姿をと

誘ふ、有情の波の聲

起ちて、落つる日雲染めて

海黄金を溶す時

大高森の頂に。

頂高く今も見る

眞なるもの美なるもの

おほいなるもの常に新、

左太平洋の波

散るは奔馬のくるほひか、

右や一灣松島の

沈静さながら夢の如。

餘

起句一聯と結句一聯とが氣に入ります。此の二聯中の數句は眞に松島を描いた好文字です。沈静の二字、壯大なる景に配して最も妙を覺えます。「瑞士」「佛蘭西」「土耳其」の三篇は感服しませぬ。殊に「日本の女性」などは失敗の作と拜見

材

餘

しました。

▲長篇は何れも読みごたへがありますが、就中「亞細亞大陸回顧の歌」と「セイヌ江上の別離」と夫れから附録の「光榮の追想」とです。「ドナウ江上の吟」や「歐羅巴大陸回顧の歌」も悪いことはありませんが、固有名詞が煩はしきまで多いので感興を助けやうとした作者の苦心、却て感興を殺ぎ、嫌厭を來たさしむる結果を見たのは遺憾です。「光榮の追想」は黃海々戰歌の一節なさうですが、餘程出來が可い。末節の

丈餘金剛の筆とりて
黄金の卷に刻むべく
世界歴史の靈よ起て
今「光榮」は純白の
もすそを風に飄し

餘

材

波の緑の月柱の

冠さゝげて微笑むに

は、光榮を擬人して、行つてのけたる手腕は到底凡手の及ぶ所ではなからう。

▲「懷郷」は故山の若き夫人を思ひての作でせう。真情が溢れて居ます。集中の異彩ですよ。總じて晚翠兄の詩は七五に成功して居ますが七六や八七又は交錯はただ成功とは申されませぬ。併し「曉鐘」以後この方面にも研究の歩を進められたのは賀すべきことです。世には形式研究を免やかう言ふ人もありますが、今日の場合そんな世評になど耳を傾けて躊躇して居る時ぢやないと思ひます。

▲「東海遊子吟」に就ては、もつと細しく申したいのですが、餘り長くなりますから一寸誤謬と思はるゝ點を左に指摘して了へるとしよう。

よどみ(九)どよみ
かほり(二八)かをり

醉ふて(一五)醉うて
おさめ(三二)をさめ

餘

材

餘

後ち(四五)後

緑りの冠(五九)緑の冠

連なりて(六七)連りて

さすらへて(七八)さすらひて

蔽ほはれて(八〇)蔽はれて

消へ(八二)消え

かほり(八六)かをり

よどむ(一一〇)どよむ

おどりて(一二九)をどりて

笑ふて(一四二)笑うて

拂ふて(一四九)拂うて

洗ふて(一五九)洗うて

濕ほしつ(四六)濕しつ

おさめ(六二)をさめ

繼ぐを忘れて(七七)繼ぐをな忘れそ

繼ぐを忘れぞ(七九)繼ぐをな忘れそ

あげつろひ(八一)あげつらひ

春はみじか(八四)春みじか

訪ふて(一一三)訪うて

きわみ(一二八)きはみ

よどみ(一三〇)どよみ

烟ふり(一四四)烟り

おさまり(一五三)をさまり

足なへ手なへ(一六〇)足なえ手なえ

材

よどみしを(一七〇)どよみしを

おほひなる(一九六)おほいなる

なほ此の外に、振假名の誤謬、送假名のあらずもがなと思はるゝ、誤植などが澤

山にあります、さまではと思ひて歇めました。第二版の際、訂正したら可から

うと思ふ。

飄へり(二〇四)飄り

盡くせし(二〇四)盡しし

▲『あけぼの』は竹柏園門下の高足石樽千亦氏外十一氏の新體詩と短歌とを蒐めた詩集です。新體詩は甚だ幼稚で、一讀に値するものがありませぬ、が、唯大塚楠緒子の「お百度詣」のみは佳作の方でせう。

ひとあし踏みて夫思ひ

ふたあし國を思へども

三足ふたゝび夫おもふ

女心に答ありや

餘

材

餘

朝日に匂ふ日の本の

國は世界に只一つ

妻と呼ばれて契りてし

人も此世に只ひとり

材

いづれ重しと問はれなば

たい答へずに泣かんのみ

お百度まうで

ああ答なりや

▲短歌はあまりに露骨で、あまりに平板單調で、殆んど詩としての價值を疑ふやうなのが見えますが、全く選者と私との詩に對する意見の相違ばかりでもないやうに思はれます。川田順、片山廣子の作には見るべきものなきに非ずですが、ま

ア勝れて居るのは橋糸重子のでせう。

偽りの人の涙を拭はんと傾けはてしわがまことかな

いひ知らず美しかりきしかはあれど短く消えし夢をしぞ思ふ

限なくうれしと思ひし一時の思ひ出つらき夕ぐれのそら

かなしさの限をきゝて別れ來し其夜おぼゆる雨の音かな

わがうれひしはし忘れて人の上に涙をそゝぐ夕まぐれかな

さりげなくさらばとのみに別れゆく人の情を悲しとぞ思ふ

人しれず人のまぎれに見送りてしづ心なきわが思ひかな

又一日苦しき命加ふべく明けゆく空のうらめしきかな

涙なく悔なき一日もしあらば其夕暮に死なんとぞ思ふ

これ實に悲哀の高潮に達したものではありませんか、誰か涙を落さずに卒讀することが出来ませう。胸の疵を匿す所なく、心の悲をありのままに露す所、世の歌

餘

材

「東海遊子吟」と『あけぼの』

三三〇

餘

人のよくすべきではありませぬ。あゝ鈴虫の鳴くのは秋を讚する爲でせうか。

(三十九年八月五日『東北新聞』所載)

材

詩壇の烽火

◎曾て、自分が「蕩兒の歌」を「中央公論」に出すや、某友は「君の名譽の爲に惜む」と云ひ、某詩人は「在來に例の無い程、固有名詞が多過ぎる。」と云ひ、某歌人は「墮落の人生を寫したるため、詩情に遠きを覺ゆ。」と云つて呉れた。が、甘んじて之を容れ、之に服する事が出来なかつた。殊に某誌の「當世流行の自然主義とやらを生嚼りにしたのだらう」と云ふやうな冷笑は、てんで相手にする勇氣は無かつた。餘りに馬鹿氣きつた評であつたからだ。とは云ふものの、「蕩兒の歌」は結局這麼譯で非難するものが八分、褒めるものが二分位で、暗黒の裡に葬られて了つた。

材

◎併し、自分は此作を以て天下の傑作とは自負も爲ないし、又自分の傑作だとも吹聴は爲ないが、少くとも在來の詩とは趣を異にし、在來の詩よりは一步を進め

餘 材

たものと自ら信ずるのである。であるから、自分では不真面目な作だとは毛頭思つて居無い。成程おとなしくして先輩諸氏の跡を追ひ、詩界の潮流に盲目的に掉して行けば可いのであらうが、其麼管らない真似は出来なくなつた。

◎「蕩兒の歌にや驚いちやつた」と云ふ人は、先づ其題目に驚いたのだらう。而して、蕩兒と云ふものは不可いものだと云ふ先入主に支配されて讀んだから、名譽にも關する程の大事と思ふに至つたのに相違ない。詩は花鳥風月を詠するのが能事でもなければ、道德に抵觸しない様に教訓を捏ねて満足すべきものでない事を先刻御承知の方は、其麼事に驚く事も無からうぢや無いか。

◎小説には固有名詞を入れるが、詩には入れられぬと云ふ御法度のある譯でも無い。御法度が無ければ、必要に因つては幾ら入れても差支は無い。詩には歴史的人物の名(源九郎とか、正成とか、も少し氣の利いた處では業平だとか、小町だとか)で無ければならぬと思つたり、泰西詩人の名(ハイネとか、ゲーテとか、バイロ

ンとか)で無ければならぬと考へたりするのは、和歌などを捻つた古い考に禍されて居るので、甚だ宜しくない。地名なども、名所で無ければ讀み込めぬと思つた時代は、最う過ぎ去つたのである。

◎苟も新時代の詩人なるものは、舊道德や、舊信仰にすがつて泣つ面して居たつて何になる。大人だの、宗匠だのと云ふ手合なら夫れでも可からうが、新興の國民と歩趨を共にし、現代の生きた人間の思想と進んで行かうとするには、其麼因循姑息な事ぢや不可い。現代の國民を外にして、何處に詩が有らうか。

◎肉と靈とは別物で、人間は靈に因つて活きるものだと思ふのは、基督教などに誤られて居るのだ。肉があつて靈があり、靈が肉に宿つて、茲に人間なるものがあるのだ。靈ばかりのものは幽靈で、地上に足が無いと相場が極つて居る。地上に足の無い人に讀ませる詩のみ作つて居たとて、此詩に何の意義、何の生命があるだらうか。

餘

◎詩人の新事業は、人生を解決するに有る。今日の哲學者や宗教家が傳習的解決に安んじて居る人生を、更に新に解決しやうと努力するに有る。だから、藪から棒に靈だの、憧憬だのと空騒ぎしたつて何にもならぬ。現實に還れ、一たび現實に還つて、更に新なる進路を拓くべきである。自然主義の起るのは、決して偶然でない。

材

◎自然主義は世人の夢想して居る如く、しかく淺薄なものでも無ければ、恐るべきもの——舊道徳や舊信仰の壘に立籠つて、雲霞の如く押寄する新思想を防がうとして居る人は格別——でも無い。却て現代の思潮から離れて、干瀉になつて居る宗教や哲學に代つて、人生の眞を捉へやうとして居るのだ。

◎渠は、厭くまでもなく現實の子である。確かと二本の足を地上につけて、確かと地上に立つて居るのである。理想の雲にふわ／＼と乗つて、安心して居る夢の子では無い。花をかざして陽炎に戯れたり、霞を吸つて風に寝たりして居る吞氣

なもので無い事は勿論である。無形の鎖に繋がれて苦悶して居る肉を觀、生活の筈に鞭たれて呻いて居る靈と在るのだ。自分ばかり醒めたやうな事を云つて、塵世に超脱して居るらしく見せ掛けて居る偽善者で無い事は勿論である。

◎今や彼の情熱派や、冥想派や、古典派や、空靈派や、象徴派やは將に過去のものたらんとして居る時に、猛然として立つて代るべきものは自然派だ。自然派は自覺した國民詩人である。泰西の詩にかぶれ、泰西の詩——多少の影響は免かれぬとしても——を摸して居る詩人には無い。

餘

◎美妙、藤村、晚翠、泣菫、有明及び夫れと同時代の詩人の努力によつて、詩は今日の進歩發達を見るに至つたのは云ふまでも無い。併し乍ら、詩の發達は是に留まるべきであらうか。いや決して留まるべきで無い。留まるべきで無いと云ひつつ進みもせず退きもせず、躊躇逡巡して居る。暗中摸索して居る。仄かなる前途の光明を認めたらやうな心持だけで、彷徨して居る。餘りに早く名を成し過ぎた

材

餘

詩人の、彷徨して居る有様は誠に氣の毒な程である。或人が現今の詩界を、彷徨時代と呼んだのも無理はない。

◎詩界の革新なる語は、屢繰返された。唯漫然と繰返された。想を新しくせよ、調を新しくせよ、詞を新しくせよと叫ばれた。何でも新しくさへすれば夫れで可かつたのだ。

材

◎そこで、詩形論が彌喧しくなつた。詩人は靡然として、西詩の摸倣に傾いた。新造語が自由の天地に試みられた。恣くして形式、内容共に、『新體詩抄』當時の詩と、殆んど別物の如く立派になつた。之が明治二十七八年後の事だ。

◎「何となく西詩の面影がある」とは、當時評家の常套語で、この常套語を頂戴して詩人は有り難がつたものだ。だから、美しい文字を層々と點出して、之でもか、これでもかと美的感情を刺激するに勉めたが、案外讀者のハートに痛切に觸れるやうなものは尠かつた。

◎「國民的精神を發揮せよ」の、「國民性に還れ」よのと絶叫されたが、詩の上には餘り効果が無かつた様に思ふ。泣菫の抒情詩なども器用に詠出されてはあつたが、何となく厭に氣取つた處があり、且西詩の面影が有り過ぎる様に思はれた。『暮笛集』でも『ゆく春』でも慥かに此傾向はある。殊に『國民新聞』に連載された「子守唄」は甚しいもので、日本の子供などは逆も眠れさうで無い。

◎昨年以來、多くの詩人に試みられ、發達すべしと期待された口語詩は、果然失敗に歸して了つた。詩語に熟さない口語を以て、自由に大膽に新思想を歌はうとするには、形式を放たれた散文詩の一體に據るより外に仕方が無からうと思ふ。併し、之とても非常の大才にして始めて能くすべきであるから、現下の詩壇に於ては其の發達は疑問中の疑問である。

餘

◎有明の象徴詩は、一時詩壇を風靡したが、もはや其極度に達して居るらしい。今後どう發展しようかとの煩悶は、漸く見えて來たやうだ。技巧と云ふ事は有明

材

餘

の専有であるかの如く思はれたが、技巧の點に於ては泣菫は有明より一步を進めて居る。有明の格調に一種の音樂的趣味の縹渺して居ると云ふ一事は、泣菫と雖も及ばぬとは誰しも認めて居る處であらう。

材

◎以前の詩の如く、餘りに詩語が貧少で、技巧に乏しくても仕方がないが、さりとて、泣菫の如く今人に耳遠い古語を辭典中に救ひて矢鱈に驅使するのも感服せねば、有明の如く技巧の爲に技巧を弄するの弊に陥るのも敬服せぬ。殊に此二詩人に追隨するらしく見える鐵幹の器用は器用として稱すべしとするも、その内容は甚だ見すばらしい。又更に、鐵幹の流を汲んで居るものは、文字の末にのみ腐心して居る形跡がある。渠の短曲(五行詩)などは、晚翠の律詩よりも主張するに足るものぢや無からう。况んや、鐵幹が創めたのでは無いと云ふに於てをやだ。

◎この際に於て、泡鳴が詩壇に意味ある咆哮を始めたのは多とすべしだ。尤も渠の利那主義には悉く賛同する譯には行かないが、我は詩人なりとの自信を以て叫

んで居るだけが豪い。夫れは誰の作物に向つても鐵槌を加へる態度が傲慢らしく見えて、些ちつとは小面憎く無い事もないが、蔭猫のやうに、人の見えない處でばかり爪を磨いで居るものに比べれば遙かに男らしい。

◎鐵槌を加へると云へば、泡鳴は渠の『新體詩作法』で、吾輩のには音脚の用意が無いと何とか云つて居るが、夫れは渠の眼鏡で見るから左様見えるのだ。換言すれば、泡鳴と吾輩とは其考を異にして居るのだ。自分は變化を尊び、自由を尊ぶ爲に、必しも泡鳴の云ふやうな型に嵌まらんでも可いと信じて居るのだから仕方が無い。之は餘計な話ではあるが、音脚論なども餘り古句に拘泥しないで欲しかった。

餘

材

◎理想も可い、希望も可いが、夫れを骨董品でも弄いぢるやうに、鑑賞して居た夢は醒めた。感情を偽らなないと云ひ乍ら、幾らか偽つて歌つて居た事に氣がついた。技巧の満足に安心して詩歌を飴細工のやうに捏ねあげて居る人を見ると、馬鹿げ

餘

てるやうに思はれてならぬ。活きた詩人は活きた詩を作り、活きた人生を偽なく描寫して其幾微に觸れ、その眞を捉へねばならぬ。

◎今後の新しい詩と云ふのは、即ち夫れだ。詩の發展して行く途は夫れより無い。併し、夫れ以上は、什麼發展するかは今より解らぬ。解らないから面白いのだ。詩の生命は、富士山腹に生えてる虎杖の如きものでは無い。

◎吾輩の現に試みつつあるのは、假に名づければ都會詩だ。林外は近來に至つて『火柱』に「雨の宵」(嗟嘆云々の句を挿入したるなど、其描寫の態度に於て嫌らぬ節はあるが)を出し、『早稻田文學』に「七狂人」を出した。この「七狂人」は、自分の『太陽』に出した「巢鴨病院」と同時の觀察を詠じたものだ。林外の空靈派より脱して、茲に至つたのは注目値する。

◎夫れから泡鳴は『趣味』に「喘息」を出して以來、盛んに苦悶詩(十文に足らない詩だとの冷笑は兎も角)を試み、此頃の『文章世界』には「航海」(先づ佳作と云つて可い)を出した。而して、是等を摸倣する年少詩人も尠くないやうである。

◎詩壇の彷徨時代だ、彷徨時代だと寐言を云つて居る間に、ぼつ／＼新しい詩が現れて來た。之から見る可き詩が多く出るだらう。

◎ああ烽火は揚つた。夢みる詩人よ、春眠より醒めて新しき衣を纏へ。而して人生の奮闘場裡に立ちて、汝の大なる獅子吼を與へ可きである。

(明治四十一年四月稿)

餘

材

晩餐

餘

材

イブセン研究会——場所は學士會。

『吉野君！吉野君！！』

食堂の扉を啓け、右手に扉の擬寶珠を握つて、半身を扉の外に出して恁う呼んだのは、岩野泡鳴君である。

實は第二號室まで一緒に這入つて、夏帽を帽子掛に懸け、洋杖も釣り下げ、聽て椅子に腰を下した。圓卓に凭つて獨逸譯のヘッダ、ガブラアを讀んで居る人があるので、一寸挨拶すると先方も和りと笑つて、白齒を出して挨拶した。室は薄暗がり、人の顔は能くも見えぬ。電燈は未だ點かぬのである。此際に到頭敏捷な泡鳴君を紛失——いや、見失つて了つた。

『何處へ行つたのか不知。』と、茫然して居ると、高らかに呼ぶ聲が聞えたので、

應と返辭して第二號室を食堂へ行く。

『既う、皆が始めて居る。』

『左様。』

泡鳴君が顔を引込めると、風を食つて扉がぱちんと閉まつた。予は直ぐと手を掛けて、ぐツと引き啓けた。葱の香、酒の香が紛と鼻を刺戟する。空腹の底まで徹みるやうである。その香が空氣に漂うて、軽く扉の外に流れ去つて了ふ。

衝と食堂に這入る。葱の香もせぬ、酒の香もせぬ。人の顔が食卓の兩側に並んで、聲と聲とが色なき彩を織つて居るのを見るばかりだ。

『柳田君！吉野臥城君です。』

と、泡鳴君は、イブセン會の幹事なる柳田國男君に紹介して呉れた。予は默禮する。國男君も立つて挨拶する。

『諸君！！吉野臥城君です、吉野君です。』

材

餘

餘

と、泡鳴君は再び一同に紹介した。予は黙禮する。一同は甚麼顔をし、見迎へて居たか予は知らぬ。この會に出席するのは、今日が始めてである。三四人の外は未だ知らぬ顔だ。

材

入口から右側の右端に二つの空席があつたので、二人は其處に腰を下した。鍋は二人に一つ宛置いてある。泡鳴君は先づ脂肪で鍋をじゅうじゅう云はせて、然る後に汁を注ぎ、牛肉、葱……と順次に入れる。葱の香が酷く鼻を刺激して來る。

正宗の二合燗の暖かな奴が來た。泡鳴君の盃に注いでやる。予も少しく飲つて見る氣になる。

『や、先日は失敬。』

『えい。』

盃を口を接げやうとした時なので、不意を食つて一寸盃を控へて、長谷川天溪

君を見る。天溪君は黒の洋服を着て、ホワイトシャツの眞白な胸を寛げて起つて居た。

『や、先日は失敬。』

『えい。』

二人は二人で同じことを繰返す。話することは尙あつたやうにも思へたが、牛肉がぐつぐつと煮えたので、先づ箸を鍋に移す。天溪君もぐびりぐびり酒を飲つて居る。

『岩野君、一の宮は何だつたね。』

『この通り黒くなつて來たよ。』

と、腕をまくつてにゅつと出し、脛を叩いて見せる。生憎脛は食卓の蔭に隠れて居るので、向側の人からは見えなからう。が、予の處からは見える。瘦肉の毛の多い脛である。

餘

材

餘

「避暑地は、一の宮に限るかね。」と、田山花袋君は擦るやうに云ふ。
「まあ、一の宮と茅ヶ崎さ。」

材

「はゝゝ、はゝゝ。」と、國男、花袋、天溪の三君が顔を見合せて笑ふ。「君は屹度左様云ふだらうと、田山君と話して居つた處だ。」と、左手で美髯を捻り乍ら、國男君は云ふ。金の指環がきらりと輝く。

「歡待たらう。」

「定つて居るさ。」

「別莊を買ふと云ふんぢやないか。」

「無論……然う、蒲原君も……。」

「買はないうちから、御披露は恐れ入るな。」

と、有明君は聲高に云ふ。有明君は單衣に袷羽織を襲ねて居る。正宗白鳥、徳田秋江の二君と泡鳴君とは白地の單衣。花袋君と國男君とは天溪君と同じく洋服。

前田木城、三津木春影の二君は夏羽織と云ふ扮装である。風采の頗る揚つて居るのは、國男君であらう。

「柳田君、だいぶ食るな。華車な君にも似合ひ給はす……ははゝ。」と、泡鳴君は一息に呷つて盃を乾す。

「華車な君だけは止し給へな。——既う一人前は平げて了つたよ。君は三人前は食けるだらう。」

「あるなら、最と牛肉を呉れ給へ。」

「茲に一盃——あ、まだ二盃ばかり餘つて居る。」

泡鳴君は、餘程酔が廻つて來たらしい。

「おい、徳田君、大に繁昌するだらう。」

「何？」

「店が。」

餘

『ふう、店か、無論繁昌さ。』
と、秋江君は顎の髯を數へるやうに捻つて居る。極めて真面目である。泡鳴君は更に語を繼いで、

材

『近頃に行くよ。』

先客様は食事が済んだので、食卓を離れる。泡鳴君と予とは、盛んに食す。其處に有明君が卷簾を吹かし乍ら來た。

『ヘッダ、ガブラアはイブセンの劇中で、最も技巧が勝つて居るやうに思ふ。』

『左様、僕も左様思つて居る。』と、天溪君は云ふ。

『その事を君——技巧論を述べ給へ。』と、泡鳴君は牛肉を箸で挟み乍ら、有明に慫慂めた。

イブセンをして、今夜集つて居る連中の髪、眼、鼻などを精細に描かしたなら、餘程面白からうと思ふ。——あ、眉目俊秀のブラックは、果して誰だらう。

後ればせに小山内薫君がやつて來た。一名の速記者を隨へて居る。白地の縞の單衣に袴を穿いて居る。

『お、待つて居たよ。——遅かつたねえ。』

『いや、疾うにやつて來たんだが……。』

『而して後れたのは、什麼云ふ譯かね。』

『五時頃にやつて來て、イブセン會の人は來て居るか、門番に訊くと、まだ集つて居らんと云ふ、夫れちや少し早いのか不知と思つたから、散歩して來たのだ。』

『左様か、柳田君はと訊かなくちや駄目だよ。』

『ぢや、イブセン會では解らんのか。』

這麼ことを泡鳴君と語つて居る。國男君は氣の毒さうに、

『残物のやうで何ですが、誰も手をつけないんだから、此邊でやつて呉れ給へ。』
『だ、いぶ腹が空いた。——さ、食らうちやありませんか。』と、速記者先生にも促

餘

材

餘

す。速記者先生は、『は』と畏まつた。

『新思潮』は期日通りに發行かね。』

『印刷所の都合で、遅れさうだ。』

『まあ、初號だから遅れても可からう。』

『體裁は非常に凝つてるよ。』

食堂に残つて居るのは我々ばかりで、小使が傍から、皿や、茶碗を片付けて居る。電燈は眞晝のやうに輝いて、話して居る三つの影と、黙つて飯を食つて居る一つの影とを照した。

荒寥たるかな、卓上の景。

第二號室よりは、どツと笑聲が漏れて聞える。(四十年九月十三日夜)

闘球盤

庭の木には、つくづく法師が鳴いて居る。聲を限に鳴いて居る。

談話が途切れたので、三人は三人とも黙つて、六つの耳を傾げて居る。空を走る薄雲がすうと過ぎたと思つた時、心の底まで明るくなるやうに、庭の木に午後四時の日が射して來た。緑の葉が、緑を濃くし、緑を浅くし、緑を白くし、緑を黄金色にして、煌煌と光る。金流の中の一木に、つくづく法師が鳴いて居る。天の歡喜に甘酔ふごとく鳴いて居る。

泡鳴君は、卷蕨の吸殻を指頭で落す。臆て食指と中指との間に挿み、口に持つて來る途中で、無意識に拇指と小指とで鼻下の八字髯を巧みに捻つて、慙う云つた。

『弾かうぢやないか。』

闘球盤

材

餘

『え、闘球？』

有明君は、吸つて居た卷煙を口から離して、眼鏡越しに對手を睨むやうに凝と見た。

『行らう、今日は負して遣るよ。』

『偉い元氣だね。』

『そこが泡鳴式だ。』と、予は横合から突込む。『はゝゝ』『ふゝゝ』と笑ふ。

成程、笑聲は波行だなど感心する。

闘球盤は、座の中央に据ゑられた。有明君は毛皮の敷物を直し、泡鳴君は座蒲團を直し、兩々相對して宜しき位置に陣取つた。予は冷茶を飲み乾し、尻を横に振ちて聊か位置を直して、目を盤上に注いだ。

盤は方形で、ちよつと小さな飯臺位ある。方形の盤面に内圈、中圈、外圈の三個の圈を劃す。盤の中央に凹穴がある。内圈の境に幾本の銀柱が建つて居る。これが鐵條網と稱するのださうな。

戦闘に要する彈丸は、圓形の扁平なものだ。丁度一錢銅貨位な大きさで、最と厚みがある。黒と白と各十個ある。黒を取つたものは、先に撃つのである。彈丸が外圈に入れば十點、中圈は二十點、内圈は三十點、中央の穴は五十點と、恚う定つて居る。他の彈丸を穴の中に入れると、百點である。之を捕虜と名けて置く。圈外に跳ね飛ばされたのが零だ。而して、白の有つて居る最後の一彈を敵彈と云つて居る。これは必ず敵彈を撃つべく定つて居るから、恚く稱するのださうな。勝負は二百點で終る。弱卒は一撃にして殪されるから、餘程禪を締めて掛らねばならぬ。一彈苟もすべからずである。

ああ穴中心主義——闘球盤は、實に穴中心主義であるから、穴に向つて彈丸を發射せねばならぬのである。が、穴が可いからと云つて無暗に穴に近づき、一步誤れば捕虜となつて大敗を招くは云ふまでもない。

有明君は、卷煙を吐月峰にさして、さて咳拂をして座り直す。紙箱の蓋を除つて

餘

彈丸を出す。泡鳴君に黒を渡した。泡鳴君は、何時も始めに白を取るのが可厭だと云つて居るからで。

『今日は負して遣るよ。』と、繰返す。

『まあ、負けないやうに撃ち給へ。』と、大人しく出る。

『えへん、ふふふ。』と、眼鏡の蔓を直し、髯を捻つて、徐ろに一弾を投じた。彈

丸は危く穴の手前で止つた。

『最う、少しで……。』

と、有明君は云つて、白を弾く。するりと這つて穴に這入る。『まあま、五十點！』と莞爾して、彈丸を取り上げて盤の片隅に置いた。

『えゝッ。』と、泡鳴君は躍起となる。鼻をくくん云はせて、髯を手帕で拭つて、さて黒を弾く。力が強かつたので、穴を越えて驀進に敵前に行つて了ふ。

有明君は、頬を右の手で擦つて凝と盤面を睨み、彈丸を線上に載せて、びしやり

材

と弾く。鐵條網に衝き當つてくると廻轉し、轉げ戻つて外圈の處に止つた。黒を弾く。白を弾く。恸くて二度、三度、多く穴の附近に停滯して居る。泡鳴君は現状を打破して、更に發展の策を講せんとして、一氣に黒彈を投ず。ばちりと突き當つたので、黒白共に散亂したが、運よくも黒彈が一つ穴に這入つた。

『まあ、這麼もんさ。』

『可。可。』

『そら五十點、又這入つたよ。』と、泡鳴君大に得意である。

『何。』

『呀ッ百點。——癢だねえ。』

『まあ、まあ、這麼もんですね。』

『癢だねえ。——何、糞ッ。』

材

黒彈が飛んで、圈外に出て了ふ。泡鳴君は、餘程しよげて來た。恸くて、有明君

餘

餘

は百四十點の勝。

『最う八十點で。——え、今度は一舉して取返してやる。』

『什麼だか、怪しいもんだらう。』

『何有、那麼なほことがあるもんか。』

泡鳴君は白を取る。先づ有明君が撃つ。黒は空しく圏外に飛んだ。

『えッ、しまつた。』

『それ、見給へ。』と云ひ乍ら、白を弾く。甘く穴に這入つた。

『吉野君、什麼だ。甘からう。』と、予よに云ふ。

『すぐ、得意になるから困る。』と、有明君は苦笑した。

『お、五十點。敵もさるもの！』と、今度は褒めた。白を弾く。ねらひが外れて、鐵條網はぢに反撥はげき飛ばされた。

『御氣の毒さま。』

『何を云つてるんか。——そら、五十點。驚いたらう。』

『全く驚いた。——おつと、左様さやうは行かんか。』

黒は穴に入らんとして穴を轉げ出たと思ふと、穴の中にちよこなんと立つ。

『ちえッ。』

『ほ、お出でなすつた。』と云ひ乍ら舌打をして、泡鳴君は白を放つ。そつと觸れたかと思ふと、倒れて穴の中に甘くうま陥はまつた。

撃ち終つて、泡鳴君は五十點の勝。前回の分と差引いて、有明君はなほ九十點の勝となつて居る。

『さあ、これからだ。黒をよこし給へ。』

『白で勝つたのは、始めてだらう。』

『ふん、何でも可いいさ。——蒲原君、可いいかい。』と、身構をして立膝となる。弾く。穴に這入る。

材

餘

餘

『幸先が可い哩。』

『可しきたり。』と、有明君は手練を引いて、舌でちよと唇を嘗めて、さて口を吃と結び白弾を撃つ。誤たず、穴に這入つた。

黒も後れじと弾く、又這入る。白弾く、又這入る。黒弾く、穴の邊で止る。白弾く、穴を越して黒の上に端に重る。

『御詔通りお出でなすつた。』

『岩野君得意の術を施す、正に此の秋にありか。』

『これが行かなくて、什麼しよう。』

黒に觸れる程に黒を弾く、白之つて苦もなく穴に這入つて了ふ。

『捕虜！捕虜！！』泡鳴君は高く叫んだ。

『これは怪しからん。』と云ひ乍ら、有明君は白を弾く、危いかな穴を越して穴の向うに止つた。

材

『危険い、危険い。』

『飛んで火に入る夏の虫か。——おつと、しまつた。』

『天祐！天祐！！』

白を撃つ。白が白とすれすれになつて白を陥め落す。

『まあ、安心。』

『癢だねえ。』と、黒を弾く。黒、鐵條網の内側の程よき處に止つた。白と睨み合ひの體である。

『技巧！技巧！！技巧に限る。』

『技巧も絲瓜もあるもんかい。』

『おつと、這入つた。——さあ百點！』

『滿らない、夫れんばかり勝つたつて何だね。』

『こりや叶はん。岩野君に逢つちや、勝も必ずしも名譽ならずだ。』

餘

材

餘

『無論でさあ。』

『酷いねえ。』

双方とも他の奇なく進行し、各一弾を餘すのみとなつた。

『最う、これだけか……』

材

『左様。』

この一弾は天下安危の分るる所とやうな思入あつて、泡鳴君は立膝を直して、ちやんと座り、銃と一弾を放つた。

『ほう、駄目か。』

『さ、敵弾。』

『敵弾だよ。併し、君の腕ぢや什麼かね。』と、泡鳴君は北叟笑んで居る。

『さあ、敵弾！何れを撃たうか不知。』と、有明君は弾丸を指頭で弄つては弾丸で盤の横を打ち、弄つては打ちつつ盤面を熟視して居たが、聽て敵弾を目かけて撃

つた。敵弾は滅茶滅茶に跳ね飛ばされて了ふ。

有明君は百十點の勝。前回の九十點と加へて合計二百點。結局有明君の勝利に歸した。

『あ、癢に障つちまふね。』

と、泡鳴君は急須を手にして、茶を注がうとする。茶がない。有明君は『おい、おい。』と呼び乍ら、手をばちばちと拍つ。女中が出て来る。領いて去る。すぐと茶を入れ換へて來た。

予代つて、有明君と對す。泡鳴君は茶を啜り乍ら觀て居た。予は白である。

黒を弾く、譯もなく這入る。白を弾いてやる、之も這入る。

『吉野君も、だいぶ甘くなつたね。』

『君よりも甘いよ。』と、有明君は云ふ。

『何、君よりも……ふうん。』と、泡鳴君は茶碗を置いた。

材

餘

餘

黒、弾く。くるくると廻つて、衝と埒外に飛んだ。

『下手だねえ。』と、泡鳴君は評す。

白、弾く。力のけして弾けず、中圈にして止つた。

『へつぼこだねえ。』と、又冷評す。

『泡鳴式でやられちや堪らん。』

『全く岩野君に逢つちや弱つて了ふ。』

『真逆左様でも無からう。』と、卷莖を吹かして、じろりじろりと見て居る。

黒、弾く。白、黒を跳ね飛ばす。二人とも黙つて居る。黒、弾く。白、又黒を跳ね飛ばす。

『排斥！排斥！！驚いて了ふねえ。』

と云ひ乍ら、有明君は少しく躍起となつて、埒内にある一個の白を狙つて撃つ。鐵條網を利用し、技巧を弄して見事に穴に弾き込んだ。

『えーッ。』

胸が躍つて來たが、焦つては事を仕損ずる原と心を沈著けて、白を弾く。平たい石の水を切つて飛ぶやうに、二三段飛んで都合よく這入る。

一番打ち終つて、有明君は六十點の勝。數番の後、予は遂に敗れた。

『癩だねえ。』——今度は僕が殫してやらう。豎子をして、豈よく名を成さしめんやだ。』

と、泡鳴君は勇んで再び局に對した。意氣軒昂たるものである。

つくづく法師は、まだ鳴いて居る。後の庭でも鳴いて居る。涼しい風が緑の葉を撫で、疊をこつて來る。こつて來た涼しい風が三人に等しく吹いた。

予は白狀する。勝星は有明君は第一、泡鳴君は第二、予は第三であつた。……碁は予と泡鳴君とは伯仲である。有明君は行らない。

玉突なら負けないと、泡鳴君は云つて居た。

材

餘

開球盤

餘

材

三六四

(明治四十年晚秋)

新體詩研究終

明治四十二年九月十日印刷
明治四十二年九月十三日發行

新體詩研究 定價六拾錢

著作者 吉野臥城

發行者 宮城伊兵衛

印刷者 藤澤外吉

印刷所 東京市神田區仲猿樂町四番地 秀光社



發行所

東京市本郷區弓町一ノ二
振替口座東京七六七四番

昭文堂

昭文堂發行圖書特約發賣元

神田表神保町
振替二七〇

京橋尾張町
振替八六七

日本橋住吉町
振替一七四

京橋通油町
振替三三四

神田裏神保町
振替三〇八六

日本橋吳服町
振替七五〇

京橋中橋廣小路
電本五七七

本郷一丁目
振替一七一

名古屋本町
振替五八〇

大阪東區備後町
振替三三五〇

京都佛光寺烏丸
振替二六四七

久留米市米屋町
振替五二九三

大阪東南區渡邊町
振替二八二三

杉本書店

東枝律書房

川瀨代助

菊竹金文堂

吉岡寶文館

前川文榮閣

東亞堂

上田屋

北隆館

至誠堂

水野書店

昭文堂發兌名著一覽

木下尙江君著

論 荒野

九月發行

今の日本は一の荒野なり、人皆な方位を失ふて彷徨涕泣す。然れども靜に見れば一條の大道最初より貫通するものあり、高處に立つて大觀するに非れば之を知るゝ能はざる也。迷へるものよ、乞ふ本書の出るを待て。

木下尙江君作

五版 小説 乞食

△價參拾五錢

△送料 六錢

宗教道徳は軍政の奴婢と成り果てぬ、世は沙漠の如く人は迷羊に似たり、曰く社會主義、曰く無政府主義、曰く自然主義、何れか時代苦悶の絶叫に非ざる、悲哉靈光一閃を言す、衆心野を望んで豫言者の聲を待つこと切「乞食」は即ち著者か祈禱の點滴なり。

重なる新聞紙の批評

●萬朝、主人公をはじめ、君代でも妹の鶴代でも、なか／＼うまく性格が表はれて居る。主人公の君代に對する感情の變化などは全く巧みなものだ。●東京朝日「死生を超越せる所に主義あり、理想あり、向う上の生活には富貴を意味せず、貧賤を耻とせず、是れ此小説の脚色なるべし。●國民「現代文壇の諸主義中にありて一種の異れる主義より成れる作物也。●東京毎日「本篇の面白い所は暗黒の世界から光明の世界へ、飛び出でようとする内省的煩悶、即ち精神的波瀾を素樸な筆で描寫したる點に在る。●東京二六「吾人は著者が文章に於て今や非常なる圓熟の境に入れるを認むるに於ける。●然描寫、性格描寫に於て非常なる成功を博せるを明に認むるものなり、荷も軌近思想界に於ける事數にして近來の讀物とするに足る。●大阪朝日「序文の所謂「自ら食する所の生が眞の生に非るか爲めと雖も、實に志の弱きに因る也、記して自ら鞭つゝ大煩悶を描破せんとしたる目的は成功せるに似たり。●靈か肉か」以來雌伏せる著者の熱血を注げる新著として歓迎すべし。

木下尚江君作

參版
小説
墓場

△價參拾五錢

△送料六錢

▲人は皆な自ら死して新たに生まるゝことを要す。「墓場」出でぬ。「墓場」は明治歴史の批判也。新機運の母胎也。

●時事新報「人生の戦に疲れ久方振りにて懐しき故郷に歸れば、山河依然として舊の如くなるも、人事の轉變、殆んど隔世の感なくんばならず、箇中の消息「墓場」の一篇に盡く、可憐なる小女の情話、少年時代の追憶、宛として無韻の詩を讀むの感あり、釘装に何等の美を凝らさざる所、あくまで木下式なる面白し」

●日本及日本人「虚飾を捨て、經驗を曝露して憚らず、事件悉く生きて見ゆ、描寫技巧亦拙ならず、筆に力あり、骨あり、青年の劣情に訴へて其歡心を買はんとするが如き類の作にあらざるを喜ぶ」

批評摘錄

木下尚江君

再出版
小説
勞働

△四六判三百四十四頁

△定價四拾五錢

△送料六錢

誤れる基礎に建造を企つ改築又た改築益々破壊没落して而かも自ら悟らず誇つて人類の進歩と強辨するもの實に今日の文明なり疑團あるもの憂愁あるもの憤懣あるもの乞ふ來つて「勞働」を看よ

報知新聞連載好評嘖々

空前之好歴史。天下之快文字。

報知新聞記者 熊田葦城君著

日本史蹟

天、地之卷既刊
人之卷近刊

○各卷寫真百八十餘箇入總クローズ美本○

正價壹冊金貳圓

特期間中……特價金壹圓六拾錢

樺山大將閣下題字 芳賀文學博士序

報知新聞記者 西村文則君著

再版

橋本左内

大形美本卷頭寫真入

正價六十五錢

送料八錢

●江戸の實權は奥女中の手に移り京師の上には公卿頑冥の空氣を弄す外交切迫海外騒然、此時一箇の青年あり容貌婦人の如く膽氣宇宙を吞む開國進取の大經綸を抱き死地に出入して乾坤一新の秘機に當る、事成らんとして斬られたるは眞に時勢の罪也、謹て『橋本左内』を我新時代の青年の前に進む。

告 豫 刊 近

ツルゲネーフ大作
戸川秋骨君 共譯
敲戸會同人

獵人日記

六月下旬出來
菊判約五百頁

未だツルゲネーフを知らずして近代文學を説くものはあらず、未だ獵人日記を讀まずしてツルゲネーフを口にすることもあらず。獵人日記はその代表的傑作なればなり。本書は即ちその尤も精確なる翻譯にして、原作の眞意と妙味とを傳ふるに於て殆んど遺憾なしとす。蓋しツルゲネーフ氏の翻譯世に少なからずと雖も、本書の右に出づるものあらざるべし、苟も新文藝及び大陸文學の如何を知らんとし併せて小説翻譯の模範を見んと欲するものは須らく本書を一讀すべし。

載 摘 評 批 [作傑大の朽不的界世]

坪内文學博士序 松本雲舟君譯

版五 說小 何處ニ往ク

原名 Quo vadis

冊壹全

▲總クローヌ 大形美裝箱入
紙數五百頁
▲價壹圓廿錢 送料拾貳錢

▲本書は高山樗牛が世界的傑作と讃歎せるポーランドの文豪シンキエツチ氏の小説「クオワヂス」の譯にして、前篇は花の如く美はしき戀物語、後篇は、ローマ滅亡の修羅場の繪巻物也、結構雄大思想深遠肉躍り血湧くの感あり。又坪内博士の序文に曰く雲舟の譯筆平明にして暢達作意を傳ふるに於て遺憾なしとす。

●萬朝「流」は大作家の作、ちつばけなる自然主義小説の比にあらず。大阪毎日「羅馬滅亡の状態、混亂せる修羅の巷の慘絶悲壯なる光景を以てし局面の波瀾曲折に富める面白き讀物也」●報知「文辭華麗製本優美學生家庭の讀物として極めて健全有益なる新刊也」●太陽「歐米文壇を風靡したる名篇たり文辭平明流暢にして原意を傳へたり自然主義的作篇の多き今日此書はたしかに一異彩を放つもの云ふべし」●新人「原書は近世文壇の珍と稱せらるる傑作にして本邦に於ては實に故人高山樗牛の愛讀の書たりき。而して隆々たる樗牛の文名を慕ふ天下の書生は樗牛愛讀の書たりとの理由を以て争ふて之を繕き恰も勃興せる宗教的氣運に乗じたりしかば熱烈敬虔なる宗教精神が横溢せる此書はいたく我が讀書界の歡迎を受ける。丸善店頭其英譯書は常に口切れの好況を呈したりき」●やまご「吾人は此の書を以て俗化せる現代基督教徒の反覆讀誦以て其家珍となさんことを望まずんばあらず」●大阪基督教世界「...之を聖書の裡面史と見るを得べく又以て好個の堅信修徳の書となすを得べし」●教勢日に雁潮にして信徒漸やく柔弱に慣れんとする今日此の活宗教の活劇史を得余輩何の辭を以て之を歡迎すべきやを知らず謹んで譯者の勞を謝し江湖の愛讀を推奨すること附り。

土井晚翠著

訂正
增補
新體詩

曉鐘

菊判美本
正價五拾錢
送料六錢

『曉鐘』の天下に鳴るや久し我國の新體詩を誦せんとするものは先づ『曉鐘』を
看よ。美文の妙趣を知らんとするものは『曉鐘』を讀誦百回せば一躍彼岸に
達するを得べし

發賣元

東京本郷區弓町
振替七六七四番

昭文堂